

飯田市

KAWARA

川原遺跡

SHIMOGAWARA

下川原遺跡

天竜川下久堅地区築堤護岸工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2019.3

国土交通省中部地方整備局天竜川上流河川事務所
長野県埋蔵文化財センター

飯田市

KAWARA

川原遺跡

SHIMOGAWARA

下川原遺跡

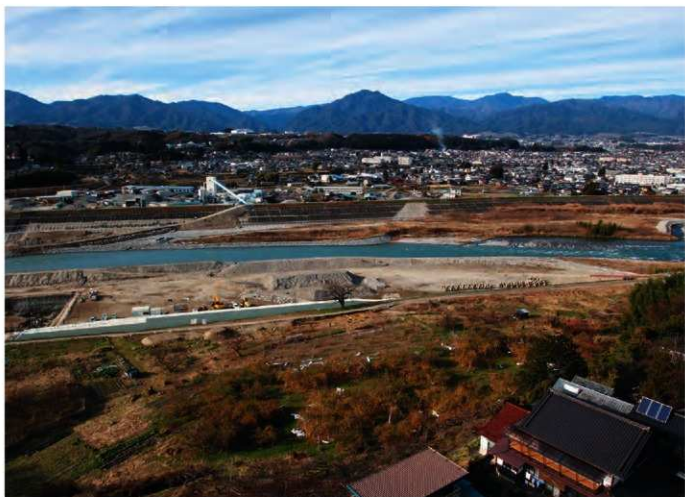
天竜川下久堅地区築堤護岸工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2019.3

国土交通省中部地方整備局天竜川上流河川事務所
長野県埋蔵文化財センター



川原遺跡、下川原遺跡遠景（北より）



川原遺跡遠景（南東上空より）



川原遺跡2区全景（上空より）



下川原遺跡全景（南より）

例 言

- 1 本書は、天竜川下久堅地区築堤護岸工事に伴う川原（かわら）遺跡、下川原（しもがわら）遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 2 川原遺跡は、長野県飯田市下久堅知久平1993-1ほかに、下川原遺跡は、飯田市下久堅知久平2025-5ほかに所在する。
- 3 発掘調査は、天竜川下久堅地区築堤護岸工事に伴う記録保存調査として、国土交通省中部地方整備局天竜川上流河川事務所の委託を受けた一般財団法人長野県文化振興事業団長野県埋蔵文化財センターが実施した。
受委託契約等については、第1章第1節を参照願いたい。なお、経費は以下のとおりである。
2016年度：39,420,000円 2017年度：54,270,000円 2018年度：27,123,000円
- 4 調査期間は、発掘作業が2016年8月24日～12月22日、2017年8月23日～12月7日、整理等作業が2017年4月5日～2018年3月31日、2018年4月4日～2019年3月31日である。
- 5 これまでの発掘・整理等作業の概要は、「長野県埋蔵文化財センター年報」33～35、現地説明会、速報展・遺跡調査報告会の資料等で紹介してきたが、本書の記述をもって最終報告とする。内容に相違がある場合は、本書をもって訂正する。
- 6 本書で報告した川原遺跡・下川原遺跡の諸記録・出土品は、飯田市に移管される予定である。
- 7 発掘作業・整理等作業にあたっては、下記の機関に業務委託した。
測量・空中写真撮影：株式会社小林コンサルタント（2016・2017年度）
遺物実測：株式会社アルカ（2018年度）
遺物写真撮影：信毎書籍印刷株式会社（2018年度）
- 8 発掘作業および報告書刊行にあたり、下記の機関・諸氏に御指導・御協力をいただいた。お名前を記して感謝の意を表する（敬称略、五十音順）。
【機関】愛知県埋蔵文化財センター、飯田市役所、飯田市教育委員会、飯田市役所下久堅自治振興センター、飯田市下久堅区、飯田市下久堅公民館、飯田市立下久堅小学校、飯田市上下水道局下水浄化センター、飯田市立中央図書館、豊田市教育委員会、長野県文化財保護審議会史跡・考古資料部会
【個人】会田 進、市澤英利、岡田正彦、長田友也、小野 昭、川添和暁、小林正春、坂井勇雄、坂上耕一、下平博行、永井宏幸、馬場保之、平岩祥平、福井優希、松島信幸、三宅 裕、百瀬長秀、山下誠一、吉川金利
- 9 発掘調査の担当者は、第1章第1節5に記載した。

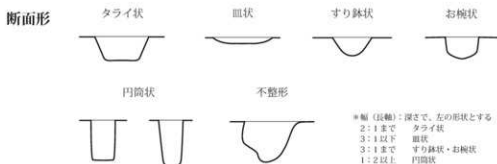
- 10 本書の編集は、黒岩 隆が行った。執筆分担は下記のとおりである。
- 第1章 平林 彰
 第2章、第5章第1節 岡村秀雄
 上記以外 黒岩 隆
 校閲は、所長 会津敏男、調査部長 平林 彰、調査第1課長 岡村秀雄が実施した。
- 11 本書に添付したDVDには、下記の内容を収録した。
- 発掘調査記録写真、遺物観察表・管理台帳、挿表データ、川原遺跡2区 任意グリッド配置図

凡 例

- 本書で扱っている国家座標は、国土地理院が定める平面直角座標系第Ⅲ系の原点を基準点とする。座標値は世界測地系である。
- 本書で使用した地図は、国土交通省国土地理院発行の1:25,000地形図「飯田」「時又」、1:50,000地形図「飯田」、1:200,000地勢図「飯田」「豊橋」、1:2,500飯田市都市計画基本図（承認番号:30飯地計第455号）である。
- 遺物番号（掲載図番号）は時代別に付し、本文、遺物図版、挿図、挿表、遺物出土状況図、写真のすべてに共通する。
- 遺構番号は、遺構種類ごとに付した。発掘調査の過程で消滅した遺構は、欠番とした。
- 掲載した実測図の縮尺は、原則として以下のとおりである。
 遺構実測図 竪穴建物跡 1:60、1:30 遺物集中 1:40、土坑ほか 1:40、1:60
 ただし、調査区全体図、遺構配置図、挿図などは任意である。
 遺物実測図 土器 1:3、1:4（遺構図に付随する場合 1:6、1:8、1:12）
 石器・石製品 2:3、1:2、1:3、1:4（遺構図に付随する場合 1:4、1:6、1:8）
 遺物写真 遺物実測図とおよそ共通であるが、異なる場合および実測図がない場合は写真に示した。
- 土坑をはじめとした遺構の説明の際、平面形、断面形を下記の基準で分類した。

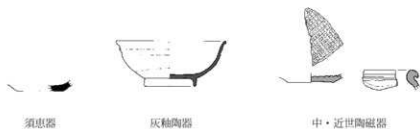
平面形



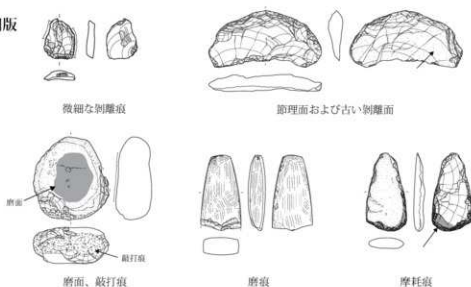


7 土器・石器図版中のスクリーントーン等の表現は、以下のとおりである。このほかの遺構図版等の凡例は、図中に付した。

土器図版



石器図版



8 基本土層、埋土の色調の記録は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖 35 版』(2013.3) による。

9 参考文献については章末に掲載し、前章に既出したものは後章では省略する。

目 次

口絵	
例言	
凡例	
目次	
図版目次	
表目次	
写真図版目次	
第1章 調査の経過	
第1節 調査に至る経過	1
1 事業計画の概要	1
2 事前調査の結果	1
3 保護措置の調整	3
4 行政手続の経過	3
5 発掘作業と整理等作業の体制	6
第2節 発掘調査の経過	7
1 発掘作業の経過	7
2 整理等作業	8
3 普及啓発活動	9
4 作業日誌抄録	10
第2章 遺跡の位置と環境	
第1節 地理的環境	11
1 遺跡の位置	11
2 遺跡の範囲	11
3 遺跡周辺の地形環境	12
第2節 周辺の遺跡	12
1 旧石器時代	12
2 縄文時代	12
3 弥生時代	12
4 古墳時代	13
5 奈良・平安時代	13
6 中・近世	14
第3章 調査の方法	
第1節 発掘作業の方法	18
1 調査区とグリッド設定	18

2	表土の掘削と遺構の検出	18
3	遺構精査	20
4	記録作成	20
第2節	整理等作業の方法	21
1	遺物の整理	21
2	記録類の整理	21
3	報告書作成と資料収納	22
第4章	川原遺跡の調査	
第1節	基本層序	23
第2節	遺構	26
1	遺構の概要	26
2	竪穴建物跡	26
3	遺物集中	32
4	土坑	32
第3節	遺物	46
1	遺物の概要	46
2	縄文時代の遺物	46
3	弥生時代の遺物	57
第4節	小結	73
第5章	下川原遺跡の調査	
第1節	基本層序	77
第2節	遺構	79
1	遺構の概要	79
2	石を伴う土坑	79
3	土坑、小土坑	81
第3節	遺物	85
1	遺物の概要	85
2	縄文時代の遺物	86
3	平安時代以降の遺物	87
第4節	小結	91
第6章	総括	92
写真図版		
報告書抄録		
奥付		

図版目次

第 1 図	天竜川茶堤護岸工事 (下久堅地区) 範囲図…………… 1	第 23 図	S B 01 ~ 03 出土縄文土器 ……………58
第 2 図	川原遺跡全体図…………… 2	第 24 図	S B 03 ~ 07 出土縄文土器 ……………59
第 3 図	1969 年調査で検出した 縄文後期配石遺構…………… 2	第 25 図	S B 09、10 出土縄文土器……………60
第 4 図	1969 年調査で検出した 弥生中期末 A 1 号住居址…………… 2	第 26 図	S H 01 出土縄文土器……………61
第 5 図	下川原遺跡トレンチ配置図…………… 7	第 27 図	S K 出土縄文土器……………62
第 6 図	遺跡の位置と範囲……………11	第 28 図	遺構外出土縄文土器 1……………63
第 7 図	川原・下川原遺跡周辺遺跡分布図 ……13	第 29 図	遺構外出土縄文土器 2……………64
第 8 図	調査対象範囲とグリッド設定図 ……19	第 30 図	縄文石器 1 (石鏃ほか)……………64
第 9 図	川原遺跡の基本層序とトレンチ土層 ……………24	第 31 図	縄文石器 2 (削器ほか)……………65
第 10 図	川原遺跡 6・7 T、10 T トレンチ土層……………25	第 32 図	縄文石器 3 (打製石斧ほか)……………66
第 11 図	川原遺跡 2 区遺構全体図……………27	第 33 図	縄文石器 4 (横刃形石器)……………67
第 12 図	S B 01 遺構図……………36	第 34 図	縄文石器 5 (横刃形石器)……………68
第 13 図	S B 02 遺構図……………37	第 35 図	縄文石器 6 (横刃形石器ほか)……………69
第 14 図	S B 03 遺構図……………38	第 36 図	縄文石器 7 (石核ほか)……………70
第 15 図	S B 04、05 遺構図……………39	第 37 図	縄文石器 8 (敲石ほか)……………71
第 16 図	S B 06 遺構図……………40	第 38 図	縄文石器 9 (礫器ほか)・石製品、 弥生土器・石器……………72
第 17 図	S B 07・08 遺構図……………41	第 39 図	川原遺跡 石片類の長重分布……………74
第 18 図	S B 09、10 遺構図……………42	第 40 図	下川原遺跡の 基本土層とトレンチ土層……………78
第 19 図	S H 01 遺構図……………43	第 41 図	石を伴う土坑および土坑全体図 1 ……80
第 20 図	S K 01 ~ 11 遺構図……………44	第 42 図	土坑全体図 2……………80
第 21 図	S K 12・13 遺構図……………45	第 43 図	S H 01 ~ 09、S K 21 遺構図……………83
第 22 図	川原遺跡 石鏃の重さと大きさ……………56	第 44 図	S H 10、S K 01 ~ 20 遺構図……………84
		第 45 図	縄文土器・石器……………89
		第 46 図	平安時代以降の土器・石製品……………90

表目次

第 1 表	土木工事のための発掘にかかわる 行政手続…………… 3	第 4 表	受委託契約等の経過…………… 5
第 2 表	調査のための発掘にかかわる行政手続 …………… 3	第 5 表	2016 年度発掘作業工程…………… 8
第 3 表	埋藏物の発見にかかわる行政手続 …… 4	第 6 表	2017 年度下川原遺跡発掘作業工程 …… 8
		第 7 表	2017 年度整理等作業工程…………… 8
		第 8 表	2018 年度整理等作業工程…………… 9

第 9 表	川原・下川原遺跡周辺遺跡一覧	……14	第 15 表	川原遺跡 縄文石器・石片類 石材別組成表	……55
第 10 表	川原遺跡 竪穴建物跡一覧	……34	第 16 表	川原遺跡 縄文石器・石片類 主要遺構別石材別組成表	……73
第 11 表	川原遺跡 遺物集中一覧	……35	第 17 表	下川原遺跡 土坑一覧	……82
第 12 表	川原遺跡 土坑一覧	……35	第 18 表	下川原遺跡 土器破片数・重量計測表	……85
第 13 表	川原遺跡 土器破片数・重量集計表	……47			
第 14 表	川原遺跡 縄文石器・石片類 遺構別組成表	……53			

写真図版目次

P L 1	川原遺跡 遠景、2区全景		P L 18	川原遺跡 縄文土器7、縄文石器1	
P L 2	川原遺跡 2区北側		P L 19	川原遺跡 縄文石器2	
P L 3	川原遺跡 2区南側		P L 20	川原遺跡 縄文石器3	
P L 4	川原遺跡 竪穴建物跡1		P L 21	川原遺跡 縄文石器4	
P L 5	川原遺跡 竪穴建物跡2		P L 22	川原遺跡 縄文石器5	
P L 6	川原遺跡 竪穴建物跡3		P L 23	川原遺跡 縄文石器6、弥生土器・石器	
P L 7	川原遺跡 竪穴建物跡4		P L 24	川原遺跡 石片類1	
P L 8	川原遺跡 竪穴建物跡5		P L 25	川原遺跡 石片類2	
P L 9	川原遺跡 竪穴建物跡6、遺物集中、 土坑1		P L 26	川原遺跡 石片類3、敲石類	
P L 10	川原遺跡 土坑2		P L 27	下川原遺跡 遠景	
P L 11	川原遺跡 土坑3		P L 28	下川原遺跡 トレンチ断面1	
P L 12	川原遺跡 縄文土器1		P L 29	下川原遺跡 トレンチ断面2、遺構	
P L 13	川原遺跡 縄文土器2		P L 30	下川原遺跡 土坑	
P L 14	川原遺跡 縄文土器3		P L 31	下川原遺跡 石を伴う土坑	
P L 15	川原遺跡 縄文土器4		P L 32	下川原遺跡 縄文土器・石器	
P L 16	川原遺跡 縄文土器5		P L 33	下川原遺跡 平安時代以降の土器・ 石製品	
P L 17	川原遺跡 縄文土器6				

第1章 調査の経過

第1節 調査に至る経過

1 事業計画の概要

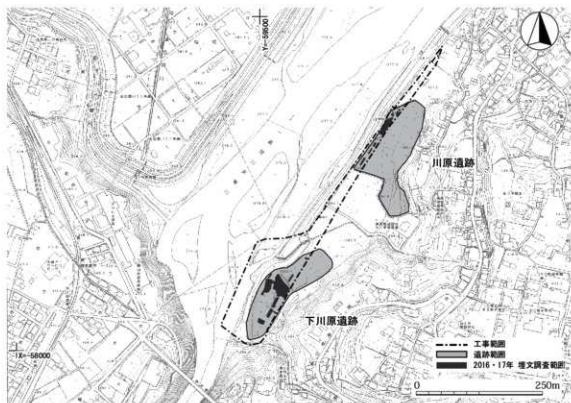
飯田市下久堅地区と松尾地区の間を南北に流れる天竜川は、下流に鷲流峡の狭窄部があるため、従来から洪水時の流下能力不足が指摘されていた。国土交通省中部地方整備局（以下「中部地整」という。）は、2009年7月、天竜川水系河川整備計画を策定し、飯田市下久堅下虎岩および知久平の天竜川左岸を堤防強化場所に特定し、順次、築堤護岸工事を行うこととした。

工事は、天竜川の水神橋下流から知久沢川までの左岸延長705 m、最大幅104 mにわたる。2015年度に着手し、2019年度以降の完成が予定されている（第1図）。

2 事前調査の結果

今回の事業によって影響を受ける埋蔵文化財包蔵地は、川原遺跡と下川原遺跡である。川原遺跡は、過去2回発掘調査を実施している。

1回目は、1969年に下伊那考古学会が、今回の事業地の東側民有地に2×5 mのトレンチを3か所設け、12月26日から翌年1月6日まで発掘した（長野県考古学会1971、飯田市教委1983）。略報によると、南北（地形の傾斜に平行）に1.5 m間隔で並列させたⅠトレンチとⅡトレンチでは、上層から弥生中期後半の土器



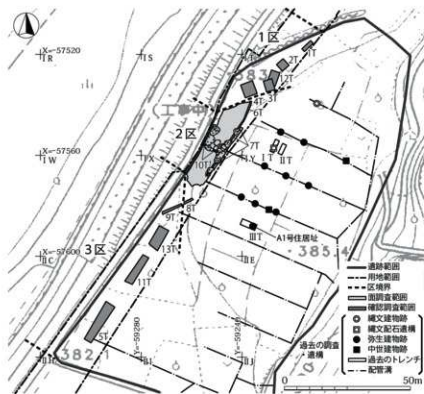
第1図 天竜川築堤護岸工事(下久堅地区)範囲図

片がわずかに出土し、地表下75～95cmで縄文晩期初頭の土器、さらに95～125cmからは縄文後期の土器片が集中して出土した。また、地表下100cmには人頭大以上の石を用いた骨片を伴う配石遺構(第3図)を検出しているが、遺構の性格を確認するに至らなかったという。一方、I・IIトレンチの南約30mの箇所に東西(地形の傾斜に直交)に設定したIIIトレンチでは、地表下90cmから南北4.2mの隅丸方形を呈する住居跡を検出している(第4図)。また、この住居跡の下層、地表下140cmでは縄文後期の生活面を検出し、さらに200cmから縄文中期後半の土器片が出土したという。

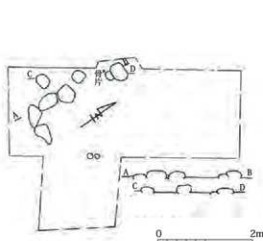
調査担当の佐藤勉氏は、

「硬砂岩を打ちかいた剥片の量は極めて多く大小100点以上になる。立地上からみて石器製作址とも考えられる」あるいは「天竜沿岸の最低位にある重要遺跡として保存につとめたいものである。」と所見を述べている(長野県考古学会1971:40,41)。

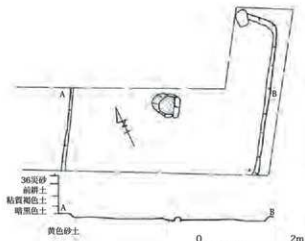
2回目は、1981年に県営畑地帯総合土地改良事業で、灌水施設設置のための掘削工事時に飯田市教育委員会(以下「市教委」という。)が立会調査を実施したものである。工事は、1969年の調査箇所を含む一帯の果樹園地内で行われ、地形傾斜に直交する方向に、幅50cmのトレンチを約15m間隔で、深さ70cmまで掘削したという。立会調査では、縄文後期1軒、弥生後期8軒、中世1軒の住居跡と、中世の建物址と



第2図 川原遺跡全体図(過去の調査区と遺構を含む)
(飯田市教委1983:18一部改変引用)



第3図 1969年調査で検出した縄文後期配石遺構
(飯田市教委 1983:21 縮尺変更)



第4図 1969年調査で検出した弥生中期末A1号住居址
(飯田市教委 1983:22 縮尺変更)

みられる配石が検出されたというが、遺構図・写真や遺物図が省略されているため、詳細は不明である。ただ、検出遺構の位置については、報告書の記載をもとに、今回の調査区とともに提示した(第2図)。調査担当の佐藤氏は、「これら遺構は川原台地の北側に集中しており、南側はやや低地となり、遺構の発見はなくなる。」と遺構分布について説明を加えている(飯田市教委1983:17)。

以上、前後2回の事前調査は、川原遺跡範囲の中ほどから東寄りで行われたとみられ、佐藤氏の説明によると、遺構・遺物は範囲の北側に集中するという。今回の築堤護岸工事業に伴う発掘箇所は、遺跡の西側に当たる。事前調査では、縄文中期後半から弥生後期、さらには中世の遺構・遺物を確認しているが、天竜川により近づく今回の発掘範囲までそれらが及んでいるかどうか、土層の堆積状況を把握した上で、検出作業のなかで慎重に見極める必要がある。

なお、川原遺跡の南隣にある下川原遺跡は、事前の調査歴がない。したがって、面的な発掘前に、トレンチ調査で遺物包含層の有無やその広がり、遺構の有無や分布状態等を探っていく必要がある。

3 保護措置の調整

2015年、設計を完了した中部地整天竜川上流河川事務所(以下「天上事務所」という。)は、計画域内の埋蔵文化財包蔵地の有無を市教委へ照会した。市教委は天上事務所に対して、計画路線内に川原遺跡および下川原遺跡が存在していることを回答する一方、長野県教育委員会(以下「県教委」という。)に対して、その保護措置について照会した。

県教委は、7月、市教委、天上事務所とともに現地を視察し、工事内容と事業地域内の埋蔵文化財の内容を聴取した。その結果、築堤護岸箇所や工法の変更を含めた遺跡の現状保存は困難であると判断し、両遺跡について記録作成のための発掘調査を実施するよう、天上事務所および市教委と調整を図った。また、当該事業に対して比較的大規模な発掘調査になると判断した県教委は、長野県埋蔵文化財センター(以下「埋文センター」という。)が実施する方向で、天上事務所および市教委と調整した。

なお、当初は2016年7月から発掘作業に着手する予定であったが、覚書・契約締結に至る事務や地元への事前説明会、希少動物の発見等の影響により、掘削開始は8月24日にずれ込んだ。

4 行政手続の経過

本報告書掲載遺跡の発掘調査にかかわる行政手続については第1～3表のとおりである。

第1表 土木工事のための発掘にかかわる行政手続(文化財保護法第94条関係)

年月日	文書番号	施行者	文書名	あて先	備考
2016.5.30	国部整天工第22号	天上事務所	周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について	県教委	川原遺跡・下川原遺跡での土木工事を通知
2016.6.8	28教文第8-62号	県教委	周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について	埋文センター	埋文センターが上記遺跡の発掘調査を受託するよう通知

第2表 調査のための発掘にかかわる行政手続(文化財保護法第92条関係)

年月日	文書番号	施行者	文書名	あて先	備考
2016.6.9	28長埋第9-3号	埋文センター	埋蔵文化財発掘調査の届出	県教委	川原遺跡
2016.6.28	28教文第6-4号	県教委	埋蔵文化財の発掘調査について通知	埋文センター	上記発掘調査の実施および終了報告提出等を指示
2017.1.13	28長埋第12-7号	埋文センター	発掘調査終了報告	県教委	川原遺跡 1,705㎡
2016.6.9	28長埋第9-4号	埋文センター	埋蔵文化財発掘調査の届出	県教委	下川原遺跡

年月日	文書番号	施行者	文書名	あて先	備考
2016. 6.28	28 教文第 6-5 号	県教委	埋蔵文化財の発掘調査について 通知	埋文セン ター	上記発掘調査の実施および終 了報告提出等を指示
2017. 1.13	28 長理第 12-8 号	埋文セン ター	発掘調査終了報告	県教委	下川原遺跡 4,193㎡
2017. 6.29	29 長理第 1-1 号	埋文セン ター	埋蔵文化財発掘調査の届出	県教委	下川原遺跡
2017. 7. 7	29 教文第 6-1 号	県教委	埋蔵文化財の発掘調査について 通知	埋文セン ター	上記発掘調査の実施および終 了報告提出等を指示
2017.12. 8	29 長理第 4-4 号	埋文セン ター	発掘調査終了報告	県教委	下川原遺跡 4,000㎡

第3表 埋蔵物の発見にかかわる行政手続（文化財保護法第102・105・108条関係）

年月日	文書番号	施行者	文書名	あて先	備考
2016.12.26	28 長理第 10-7 号	埋文セン ター	埋蔵物発見届	県教委	川原遺跡 土器7箱・石器6箱
2017. 1.26	28 教文第 20-104号	県教委	埋蔵物の文化財認定及び出土品 の帰属通知	埋文セン ター	川原遺跡
2016.12.26	28 長理第 10-8 号	埋文セン ター	埋蔵物発見届	県教委	下川原遺跡 土器1箱・石器1箱
2017. 1.26	28 教文第 20-105号	県教委	埋蔵物の文化財認定及び出土品 の帰属通知	埋文セン ター	下川原遺跡
2017.12. 8	29 長理第 2-4 号	埋文セン ター	埋蔵物発見届	県教委	下川原遺跡 土器・石器3箱
2017.12.25	29 教文第 20-55号	県教委	埋蔵物の文化財認定及び出土品 の帰属通知	埋文セン ター	下川原遺跡

天竜川下久堅地区築堤護岸工事に伴う発掘調査については、2016年7月に、委託事業者である天上事務所と受託事業者である埋文センターおよび発掘調査の指導にあたる県教委との間で覚書が交わされた。その内容は次のとおりである。なお、覚書は2017年1月に変更し、発掘調査期間を1年間短縮するとともに、発掘調査費用の概算総額を130,645,000円（2016年度：39,420,000円、2017年度61,860,000円、2018年度：29,365,000円）に減額した。

また、天上事務所は覚書の第3条第1項の規定により、年度ごとに埋文センターと発掘調査の受委託契約を締結して事業を実施した。2016年度以降の受委託契約の経過は第4表のとおりである。

天竜川下久堅地区築堤護岸工事に伴う埋蔵文化財発掘調査の実施に関する覚書

国土交通省中部地方整備局天竜川上流河川事務所長（以下「甲」という。）と、長野県教育委員会教育長（以下「乙」という。）と、一般財団法人長野県文化振興事業団長野県埋蔵文化財センター所長（以下「丙」という。）の三者により、天竜川下久堅地区築堤護岸工事（以下「工事」という。）に伴う、埋蔵文化財包蔵地の発掘調査（以下「発掘調査」という。）に関する覚書を交わすものである。

（目的）

第1条 この覚書は、甲が実施する事業範囲にかかる埋蔵文化財の取扱い及び発掘調査の実施方法等について定めることを目的とする。

（調査の範囲）

第2条 この覚書を適用する調査対象範囲は、別添図面に示す部分とする。

2 前項に予定する発掘調査の実施箇所等に変動がある場合、あるいは工事に伴って新たに埋蔵文化財を発見した場合は、甲、乙、丙協議の上、調査対象範囲及びその保護措置について決定するものとする。

（発掘調査の体制）

第3条 甲は丙に、前条の調査対象範囲の発掘調査を委託するものとする。

2 丙は、発掘調査を実施する組織を速やかに編成し、別添全体実施計画書に基づき発掘調査を実施するものとする。
(発掘調査の指導)

第4条 乙は、丙が行う発掘調査の内容・方法に対し、検査、指導、監督にあたるものとし、問題があった場合は改善を求めることができる。

(発掘調査の期間)

第5条 丙は、この覚書に基づく発掘調査を、覚書締結年月日から平成32年3月31日までに完了させるものとする。ただし、やむを得ない理由により期間を延長する場合には、甲、乙、丙で協議して変更するものとする。

2 前項の発掘調査の着手順序及び範囲は、甲、乙、丙で協議して定めるものとする。

(発掘調査の費用)

第6条 発掘調査に要する費用は、丙が積算するものとする。

(事業者が負担する費用)

第7条 この調査に要する費用は、別添のとおり概算総額186,343,200円とし、甲が負担するものとする。その内訳及び予定年割額は、次のとおりとする。

平成28年度：57,175,200円 平成29年度：78,505,200円 平成30年度：23,144,400円

平成31年度：27,518,400円

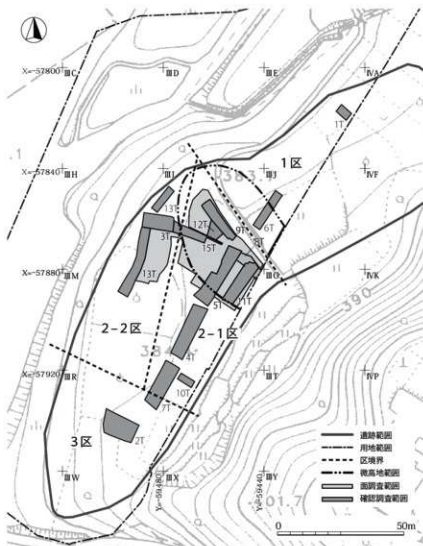
第4表 受委託契約等の経過

年月日	文書番号	施行者	文書名	あて先	備考
2016. 7.27	国部整契第397号	中部地整	平成28年度天竜川下久堅地区築堤護岸工事に伴う埋蔵文化財発掘調査業務の委託契約の締結について	埋文センター	期間：2016.7.29～2017.3.31 予算：4,235,200円 道跡：川原道跡他1道跡 内容：発掘作業4,500㎡
2016. 7.29	28長埋第117号	埋文センター	平成28年度天竜川下久堅地区築堤護岸工事に伴う埋蔵文化財発掘調査業務委託契約の締結について	中部地整	同上
2017. 1.24	国部整契第811号	中部地整	平成28年度天竜川下久堅地区築堤護岸工事に伴う埋蔵文化財発掘調査業務の委託契約(第1回変更)について	埋文センター	期間・道跡：変更なし 予算：39,420,000円 内容：発掘作業5,898㎡
2017. 1.26	28長埋第245号	埋文センター	平成28年度天竜川下久堅地区築堤護岸工事に伴う埋蔵文化財発掘調査業務の委託契約(第1回変更)について	中部地整	同上
2017. 3.23	28長埋第292号	埋文センター	平成28年度天竜川下久堅地区築堤護岸工事に伴う埋蔵文化財発掘調査業務委託事務の完了について	中部地整	同上
2017. 3.21	国部整契第1114号	中部地整	平成29年度天竜川下久堅地区築堤護岸工事に伴う埋蔵文化財発掘調査業務の委託契約の締結について	埋文センター	期間：2017.4.1～2018.3.31 予算：61,860,000円 道跡：下川原道跡他1道跡 内容：発掘作業4,000㎡ 整理作業5,705㎡
2017. 4. 3	29長埋第26号	埋文センター	平成29年度天竜川下久堅地区築堤護岸工事に伴う埋蔵文化財発掘調査業務委託契約の締結について	中部地整	同上
2018. 2.13	国部整契第729号	中部地整	平成29年度天竜川下久堅地区築堤護岸工事に伴う埋蔵文化財発掘調査業務の委託契約(第1回変更)について	埋文センター	期間・道跡・内容：変更なし 予算：54,270,000円
2018. 2.19	29長埋第244号	埋文センター	平成29年度天竜川下久堅地区築堤護岸工事に伴う埋蔵文化財発掘調査業務の委託契約(第1回変更)について	中部地整	同上

第2節 発掘調査の経過

1 発掘作業の経過

2016年度 川原遺跡では、今回の調査範囲の東側で、縄文時代後期、弥生時代中期～後期、中世の建物跡等が検出されている（前節第2図参照）。しかしながら、検出面上には三六災害等の際に被ったと思われる砂層が厚く覆い、遺構の存否はもちろん、原地形の把握にも苦慮する状況が予想された。そこでまず、約1,700㎡の調査範囲内にトレンチを南北に設定し、遺構の存否およびその密度や広がりを確認した。トレンチ調査では、調査範囲の北側（1区）と南側（3区）に洪水砂が分厚く堆積していた。元来、谷状地形であったものが三六災害等により平坦になったものと思われ、遺構・遺物はほとんどみつからなかった。一方、調査範囲の中央部（2区）は、東側の丘陵から天竜川に向けて岬状に微高地が突出し、この微高地上から縄文時代



第5図 下川原遺跡トレンチ配置図

中・後期の遺構を密度濃く検出できた。そこで、面調査は2区を中心に行い、最終的に堅穴建物跡10軒、土坑10基等を精査・記録し、発掘作業を終えた。

下川原遺跡は、弥生土器の散布地として登録されているが、調査歴はなく情報が少ない。したがって、遺構の存否を確認するため、8,000㎡余の調査範囲に12本のトレンチを設定し（2017年度に3本追加。14Tは面調査で消滅）、遺構の確認を行った（第5図）。その結果、調査範囲の北側で東側の丘陵から延びる微高地を検出した。微高地上からは、縄文土器、平安時代の灰軸陶器、中世陶磁器や石器等が出土し、当該期の遺構が存在する可能性が高いことが判明した。また、微高地の南側や西側では、天竜川起源の洪水によって埋没した水田土壌をトレンチ断面で観察することができた。なお、対象となる調査範囲のうち南側を中心とした4,192㎡は、遺構・遺物がなかったため面調査不要とした。

発掘作業中の出土物は現地プレハブで水洗し、乾燥後仮収納した。また、現場で作成した記録類は基礎整理作業で点検等を行った。

第5表 2016年度発掘作業工程

作業内容		4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	備考
発掘作業	準備				■									
	基準点設定					■								■川原遺跡 ■下川原遺跡
	確認調査					■		■						
	表土掘削					■	■	■						
	遺構検出					■	■	■	■	■				
	遺構精査					■	■	■	■	■				
	記録作成					■	■	■	■	■				
	埋戻し										■			
後片付け											■			
基礎整理作業												■	■	

2017年度 下川原遺跡は、前年度の調査で確認した微高地部分と水田土壌が認められた部分の面調査を行った。中世の石を伴う土坑10基と天竜川起源の洪水砂に埋まった水田面を精査・記録し、発掘作業を終えた。

第6表 2017年度下川原遺跡発掘作業工程

作業内容		4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	備考
発掘作業	準備					■								
	基準点設定								■					
	表土削除					■	■							
	遺構検出					■	■	■						
	遺構精査					■	■	■	■					
	記録作成					■	■	■	■					
	埋戻し										■			
	片付け											■		
基礎整理作業												■	■	
打合せ 中間検査						△	△	△	○	△	△			△打合せ、○中間検査

2 整理等作業

2017年度 川原遺跡では、縄文時代の堅穴建物跡10軒等の調査を行い、各遺構から縄文土器が出土している。そのなかには、東海や近畿地方の影響を受けたとみられる土器が散見されるため、周辺地域の土器群との比較検討を行った。また、石器では剥片石器、礫石器などが多数認められ、なかでも石錘や横刃形石器が他の遺跡に比べて多い傾向にある。そこで、天竜川に面しているという遺跡立地に着目し、遺跡内での石器生産の有無に焦点を当てた整理作業を進める計画を立てた。

第7表 2017年度整理等作業工程

作業内容		4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	備考
遺構	図面修正	■	■											
	編集			■	■	■								
	トレース			■	■	■								
遺物	遺物分類			■	■						■	■	■	
	接合・補強													
	実測・トレース													次年度へ継続
記録	原稿執筆											■	■	次年度へ継続

2018年度 川原遺跡は、前年度に引き続き、天竜川沿いでは類例の少ない縄文時代後期の集落跡の特徴を抽出するため、縄文土器については、土器全体の様相を捉え、東海や近畿地方を中心とした地域間交流に視点を向けた。また、石器はその組合せや量的把握から、遺跡内における生産活動（漁労、石器製作等）の追究に力点を置いた。

一方、下川原遺跡は、天竜川に面した場所における中世の土地利用について検討を加えた。

第8表 2018年度整理等作業工程

作業内容	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	備考
遺構	図面編集												
	トレース												
	作 表												
	版 組												
遺物	遺物選別												
	実測・トレース												委託（石器）
	版 組												
写真	写真撮影												委託
	版 組												
記録	原稿執筆												
	入稿・校正												
印刷・製本・発送													編集を含む
取 納													

3 普及啓発活動

(1) 遺跡説明会および発掘体験等

2016.11. 2	発掘体験（飯田市立下久堅小学校）	38名
2016.11.23	現地説明会	77名

(2) 展示会および講演会等

2017. 2.18～2.24	出土品展「掘るしん in しなのい2017」	埋文センター	199名
2017. 2.18	遺跡調査報告会—川原遺跡—	J Aグリーン長野グリーンパレス	110名
2019. 2.14～2.22	出土品展「掘るしん in しなのい2019」	埋文センター	270名
2019. 2.16	遺跡調査報告会—川原遺跡—	J Aグリーン長野グリーンパレス	149名

(3) 調査情報誌等の発行

2016.10. 7	「川原遺跡・下川原遺跡 発掘調査速報」通巻1号	
2017. 9. 8	「下川原遺跡 発掘調査速報」通巻2号	
2017.12. 7	「下川原遺跡 発掘調査速報」通巻3号	
2017. 2. 3	「天竜川とともに生きた縄文人のムラ 川原遺跡」『信州の遺跡』第10号	
2017. 3.24	「発掘作業の概要 川原遺跡 下川原遺跡」『埋文センター年報』33	
2018. 3.23	「発掘作業の概要 下川原遺跡」「整理等作業の概要 川原遺跡」『埋文センター年報』34	
2019. 3.22	「整理等作業の概要 川原遺跡・下川原遺跡」『埋文センター年報』35	

(4) その他

埋文センター公式ホームページに調査情報を掲載

4 作業日誌抄録

(1) 2016年度

7月29日	受委託契約締結	12月5日	調査指導：松島信幸氏（理学博士）、市澤英利氏（長野県文化振興事業団理事）
8月24日	川原遺跡トレンチ掘削開始	12月8日	空中写真撮影
9月1日	川原遺跡、発掘作業員作業開始	12月13日	現地協議：天上事務所、県教委、市教委、埋文センター
10月11日	トレンチ断面で水田の可能性がある畦畔を確認（下川原遺跡）	12月20日	発掘作業終了
10月26日	2区で縄文時代中・後期の竪穴建物跡確認（川原遺跡）	12月22日	埋戻し完了。現地確認、引渡し：天上事務所
11月2日	飯田市立下久堅小学校6年生発掘体験	12月26日	基礎整理作業開始
11月14日	測量業務委託契約締結	1月26日	受委託変更契約締結
11月15日	JICA国際協力機構の遺跡見学	2月22日	測量業務委託成果品納品
11月21日	測量業務委託開始	3月31日	基礎整理作業終了
11月23日	現地説明会実施		

(2) 2017年度

4月3日	受委託契約締結	11月15日	下川原遺跡、天上事務所の現地視察
4月5日	本格整理作業開始（図面編集）	下川原遺跡測量業務委託契約締結	
6月23日	土器分類開始	11月16日	下川原遺跡測量業務委託開始（基準点・単点測量）
7月4日	下川原遺跡の発掘作業準備にかかわる現地協議（天上事務所、埋文センター）	12月7日	下川原遺跡発掘作業終了
7月14日	縄文後期土器指導：百瀬長秀氏（松本市教委）	現地確認、引渡し：天上事務所	
8月3日	土器接着・補強・復元開始	2月1日	原稿執筆開始
8月8日	報告書編集会議	2月7日	縄文後期土器の資料調査（愛知県）
8月23日	下川原遺跡トレンチ掘削開始	2月19日	受委託変更契約締結
9月1日	下川原遺跡発掘作業員作業開始	2月23日	測量業務委託成果品納品
9月21日	下川原遺跡で天竜川起源の洪水砂層下に畑跡を確認	3月8日	土器の実測・拓本実測開始
11月13日	下川原遺跡で石を伴う土坑群確認	3月31日	本格整理作業終了

(3) 2018年度

4月1日	受委託契約締結 本格整理作業再開	10月15日	報告書編集会議
4月4日	本格整理作業員作業開始	11月6日	遺物写真撮影業務委託契約締結
5月9日	石器分類開始	11月8日	遺物写真撮影業務委託開始
5月23日	土器実測用のトレス開始	11月30日	遺物写真撮影業務委託成果品納品
6月21日	遺構図版作成開始	1月16日	報告書印刷製本業務委託契約締結
7月5日	石器実測業務委託契約締結	3月20日	報告書印刷製本業務委託成果品納品
8月23日	土器図版作成開始	3月31日	本格整理作業終了
10月4日	石器実測業務委託成果品納品		

参考文献

- 飯田市教育委員会 1983「知久平遺跡群」
 佐藤勉信 1971「昭和44年度長野県内発掘調査略報 川原遺跡」
 『長野県考古学会誌』第10号：40、41



第2章 遺跡の位置と環境

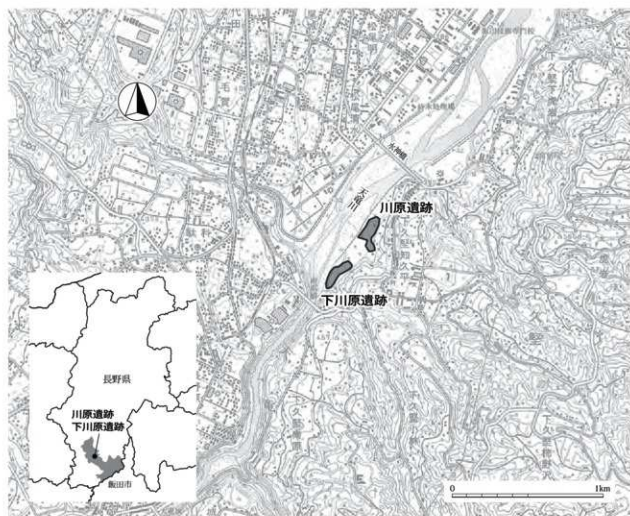
第1節 地理的環境

1 遺跡の位置

川原遺跡、下川原遺跡は、長野県飯田市下久堅知久平 1993-1、2025-5 ほかに近接して所在する（第6図）。両遺跡は天竜川東岸沿いにあり、とくに川原遺跡は川との比高4mほどの低地に位置する。

2 遺跡の範囲

川原遺跡は、水神橋下流 350 m ほどの川岸にあり、堤防上の市道から東側の微高地上、南北 200 m、東西 130 m ほどの範囲で、現況は果樹園となっている。下川原遺跡は、川原遺跡から約 130 m 下流にあり、南北 200 m、東西 100 m ほどの範囲で、現況は果樹園となっており、段丘際には水田が耕作されている。



第6図 遺跡位置と範囲

3 遺跡周辺の地形環境

飯田・下伊那地域は、東を南アルプス（赤石山地と伊那山脈）、西を中央アルプス（木曾山脈）に挟まれた伊那谷の南部に当たる。谷の間には天竜川が南流し、河岸段丘が著しく発達している。遺跡の所在する下久堅地区は、主に伊那谷の天竜川東岸の河岸段丘に位置している。現在の飯田市街地（飯田城跡周辺）から約7km南東方向にあり、段丘上からは対岸の飯田市街地や中央アルプスが一望できる。天竜川は、水神橋下流約900mの飯田市駄科と下久堅の間で峡谷をつくり、「鳶流峡」と呼ばれている。大水になると、この峡谷に流れがせき止められるため、両遺跡は何度も天竜川の氾濫・洪水被害を受けている。

なお、遺跡周辺は現状では平坦になっているが、これは過去において天竜川に削られた低地部分を人為的に埋めた、もしくは洪水砂の堆積により見えている景観である。

第2節 周辺の遺跡

川原遺跡、下川原遺跡の発掘調査では、縄文時代および中・近世の遺構と遺物を発見した。本節では、両遺跡が所在する飯田市下久堅地区、対岸の松尾・竜丘地区ならびに喬木村伊久間地区の天竜川沿いの遺跡を概観する。第7図の1が川原遺跡、2が下川原遺跡である。ここでは、飯田市域の天竜川西岸を竜西、同東岸を竜東と記述する。川原・下川原遺跡は、竜東に所在する。

1 旧石器時代

竜西・松尾地区の松尾八幡原遺跡（63）で、細石刃が採取されている。竜東では未確認である。

2 縄文時代

草創期から前期の遺跡は極めて少ない。竜西・松尾地区の上溝遺跡（55）で草創期の有舌尖頭器、同じく寺所遺跡（60）で早期前半の押型土器が出土している。喬木村の伊久間原遺跡（157）は早期から晩期にわたり遺物が確認され、前期の集落跡が調査されている。中期になると、遺跡数が増加する。周辺遺跡一覧表（第9表）の縄文時代の多くが該当する。川原遺跡、下川原遺跡のような天竜川に近い遺跡としては、松尾地区の清水遺跡（74）があげられるが、遺物が採取されているのみで、遺構は確認されていない。中期の遺跡で、遺構が発見された主な遺跡として、松尾地区の妙前遺跡（54）、松尾北の原遺跡（56）、寺所遺跡（60）、松尾八幡原遺跡（63）等、下久堅地区では下虎岩大原遺跡（3）、大中尾遺跡（4）、天神遺跡（6）、番場遺跡（17）、内御堂遺跡（27）、内御堂東遺跡（28）がある。竜西・竜丘地区の城陸遺跡（149）、喬木村伊久間原遺跡（157）では中期の良好な集落が調査されている。後期・晩期に属する遺跡は、天神遺跡（6）、番場遺跡（17）、寺所遺跡（60）、松尾地区の平遺跡（77）、竜丘地区の大島遺跡（148）、伊久間原遺跡（157）があげられ、遺跡数は少ない。これらの遺跡はすべて、低位段丘より上位の段丘上に展開している。川原・下川原遺跡は、天竜川に近い氾濫原に所在し、立地が極めて特異であることがわかる。

3 弥生時代

中期に属する遺跡は、前葉の標式遺跡である松尾地区の寺所遺跡（60）はあるが、竜東では確認されていない。後期は、下久堅地区の大中尾遺跡（4）、松尾地区の松尾北の原遺跡（56）、田圃遺跡（75）などがあり、本遺跡対岸の清水遺跡（74）で後期の住居跡、方形周溝墓などが調査されている。

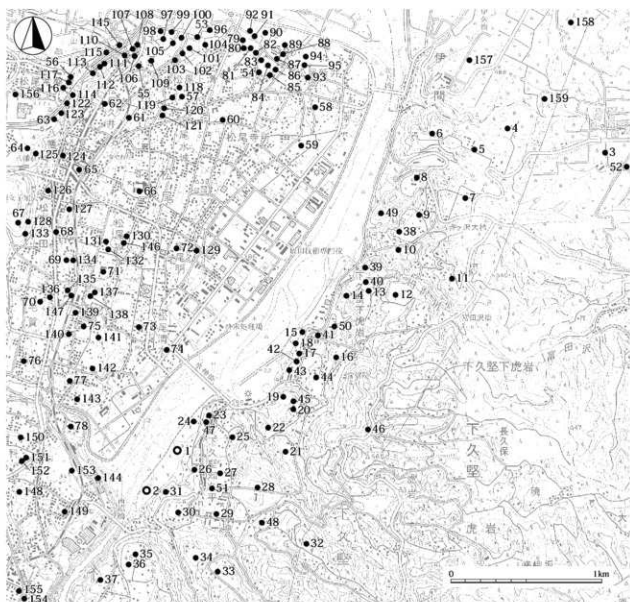
4 古墳時代

下久堅地区では、番場遺跡 (17)、内御堂遺跡 (27)、内御堂東遺跡 (28) で住居跡などが確認されているが、ほとんどが散布地である。松尾地区の清水遺跡 (74) では前～後期の住居跡が調査されていて、天竜川に近いこの地が古墳時代の住居に適していた場所とされている。

古墳は竜東では天竜川を臨む河岸段丘 (低位段丘) から山間地である上久堅地区まで散的に分布するが、消滅した古墳も多い。竜西では、松尾地区に多数の古墳がみられ、著名な古墳として、眉庇付冢、鉄鍬多数、剣、太刀等が発見された妙前大塚古墳 (81) がある。そのほか、国の史跡となった上溝天神塚古墳 (109)、おかん塚古墳 (110) を含む飯田古墳群をはじめとしたいくつかの古墳がある。

5 奈良・平安時代

下久堅地区の内御堂遺跡 (27)、馬出し遺跡 (29)、坂下遺跡 (30) などで確認されているが、竜東における当該期の様相は、遺構・遺物が少なく、不明な点が多い。竜西の松尾地区では、妙前遺跡 (54)、久井遺跡 (61)、松尾八幡原遺跡 (63)、かみが原遺跡 (70)、田圃遺跡 (75) などがある。



第7図 川原・下川原遺跡周辺遺跡分布図

6 中・近世

遺物散布地が多くを占めるが、下久堅地区では川原遺跡、下川原遺跡を見下ろす段丘上に中世末期の城郭を示す知久平城跡(51)がある。近世では下久堅地区の富田窯跡(52)があり、下川原遺跡でも破片が出土している。

参考文献

飯田市教育委員会 1976「清水遺跡—弥生時代後期、古墳時代前・中期、平安時代の集落址、方形溝溝墓群—」

飯田市教育委員会 1980「内御堂遺跡—中世武家屋敷跡を中心とした—」

飯田市教育委員会 1992「八幡原遺跡」

飯田市教育委員会 1998「飯田の遺跡 市内遺跡詳細分布調査」

飯田市教育委員会 1999「田圃遺跡(Ⅱ)」

松島信幸 2009・2010・2012「5万分の1 信州南部活断層地質図および説明資料図」飯田市美術博物館

第9表 川原・下川原遺跡周辺遺跡一覧

番号	市町村	地区	市町村 番号	遺跡名	旧石 器	縄 文	弥 生	古 墳	奈 良	平 安	中 世	近 世	種 別	面積 (ha)	備 考
1	飯田市	下久堅	447	川原		○	○					○	集落跡	10	今回調査、一部発掘調査済
2	飯田市	下久堅	448	下川原		○	○			○	○	○	集落跡	09	今回調査
3	飯田市	下久堅	421	下虎岩大原		○	○	○					集落跡	194	一部発掘調査済
4	飯田市	下久堅	422	大中尾		○	○	○					集落跡・その他の墓	39	一部発掘調査済
5	飯田市	下久堅	423	中尾		○	○						散布地	94	
6	飯田市	下久堅	424	天神		○							集落跡	31	一部発掘調査済
7	飯田市	下久堅	425	北原上の平		○	○						散布地	76	
8	飯田市	下久堅	426	観音原		○					○		散布地	20	
9	飯田市	下久堅	427	北原		○	○			○	○		散布地	56	
10	飯田市	下久堅	429	竹の下		○	○						散布地	14	
11	飯田市	下久堅	428	亀平北		○	○					○	散布地	12	
12	飯田市	下久堅	430	亀平南		○	○						散布地	34	
13	飯田市	下久堅	431	畑外田				○					散布地	26	
14	飯田市	下久堅	432	京田		○	○						散布地	20	
15	飯田市	下久堅	434	司場畑A		○				○	○		散布地	04	
16	飯田市	下久堅	433	のいわ				○	○	○			散布地	31	
17	飯田市	下久堅	436	番場		○	○	○				○	集落跡	53	一部発掘調査済
18	飯田市	下久堅	435	司場畑B						○	○		散布地	06	
19	飯田市	下久堅	438	南の祖久保田		○				○			散布地	14	
20	飯田市	下久堅	437	南の祖塚平		○	○						散布地	16	
21	飯田市	下久堅	439	南塩沢						○	○		散布地	17	
22	飯田市	下久堅	440	南塩沢下						○	○		散布地	08	
23	飯田市	下久堅	441	主膳		○				○			散布地	20	
24	飯田市	下久堅	446	下井戸						○			散布地	02	
25	飯田市	下久堅	442	三石		○	○	○					散布地	21	
26	飯田市	下久堅	445	高塚				○				○	散布地	07	
27	飯田市	下久堅	443	内御堂		○	○	○		○	○		集落跡	43	一部発掘調査済
28	飯田市	下久堅	444	内御堂東		○	○			○			集落跡	44	一部発掘調査済
29	飯田市	下久堅	449	馬出し		○				○	○		散布地	65	
30	飯田市	下久堅	450	坂下		○	○	○	○	○	○		散布地	25	

番号	市町村	地区	市町村 番号	道跡名	旧 石器	縄 文	弥 生	古 墳	奈良	平 安	中 世	近 世	種 別	面積 (ha)	備 考
31	飯田市	下久堅	451	御供田						○			散布地	1.5	
32	飯田市	下久堅	452	向新道地						○			散布地	1.1	
33	飯田市	下久堅	453	小林堀の前						○	○	○	散布地	2.3	
34	飯田市	下久堅	454	小林堀端			○				○	○	散布地	2.4	
35	飯田市	下久堅	457	相平			○					○	散布地	1.3	
36	飯田市	下久堅	455	五輪原			○	○			○	○	散布地	8.9	
37	飯田市	下久堅	458	下久堅南原			○						散布地	4.7	
38	飯田市	下久堅	1044	ハチマン古墳				○					古墳		
39	飯田市	下久堅	1045	塚越古墳				○					古墳		
40	飯田市	下久堅	1046	垣外田古墳				○					古墳		
41	飯田市	下久堅	1047	番場古墳				○					古墳		
42	飯田市	下久堅	1048	タカハシ古墳				○					古墳		
43	飯田市	下久堅	1049	屋敷古墳				○					古墳		
44	飯田市	下久堅	1050	中島古墳				○					古墳		
45	飯田市	下久堅	1052	塚平古墳				○					古墳		
46	飯田市	下久堅	1051	神殿古墳				○					古墳		
47	飯田市	下久堅	1053	鳥垣外古墳				○					古墳		
48	飯田市	下久堅	1054	赤坂古墳				○					古墳		
49	飯田市	下久堅	1104	北原城城跡							○		城跡	1.8	
50	飯田市	下久堅	1105	虎岩城城跡							○		城跡	1.9	
51	飯田市	下久堅	1107	知久平城城跡							○		城跡	12.6	一部免掘調査済
52	飯田市	下久堅	1182	富田空跡								○	空跡		免掘調査済、消滅
53	飯田市	松尾	178	上溝羽場			○	○	○		○	○	散布地	4.1	
54	飯田市	松尾	182	妙前			○	○	○	○	○	○	集落跡	13.1	一部免掘調査済
55	飯田市	松尾	173	上溝			○	○	○	○	○	○	集落跡	11.0	一部免掘調査済
56	飯田市	松尾	167	松尾北の原			○	○	○	○	○	○	集落跡・その他の墓	14.7	一部免掘調査済
57	飯田市	松尾	183	水城			○	○	○	○	○	○	集落跡	23.1	一部免掘調査済
58	飯田市	松尾	191	新井			○	○	○	○	○	○	散布地	13.3	
59	飯田市	松尾	192	免匂			○	○	○	○	○	○	散布地	6.0	
60	飯田市	松尾	188	寺所			○	○	○	○	○	○	集落跡・その他の墓	28.0	一部免掘調査済
61	飯田市	松尾	179	久井			○	○	○	○	○	○	集落跡・その他の墓	5.8	一部免掘調査済
62	飯田市	松尾	174	八幡町				○		○		○	散布地	10.6	
63	飯田市	松尾	165	松尾八幡原	○	○	○	○	○	○	○	○	集落跡・その他の墓	2.4	一部免掘調査済
64	飯田市	松尾	166	八幡山				○					散布地	2.9	
65	飯田市	松尾	180	八幡下			○			○		○	散布地	6.0	
66	飯田市	松尾	184	松尾城			○	○	○	○	○	○	集落跡・その他の墓	7.4	一部免掘調査済
67	飯田市	松尾	195	代田山				○	○				散布地	0.6	
68	飯田市	松尾	175	代田			○	○	○	○	○	○	集落跡・その他の墓	7.6	
69	飯田市	松尾	181	代田下			○	○	○	○	○	○	散布地	2.6	
70	飯田市	松尾	176	がにが塚			○	○	○	○	○	○	集落跡	6.5	
71	飯田市	松尾	185	下ノ宮			○	○	○	○	○	○	散布地	3.5	
72	飯田市	松尾	189	明			○	○	○	○	○	○	散布地	16.5	
73	飯田市	松尾	190	清水上			○	○	○	○	○	○	集落跡	8.8	一部免掘調査済
74	飯田市	松尾	193	清水			○	○	○	○	○	○	集落跡・その他の墓	6.9	一部免掘調査済
75	飯田市	松尾	186	田圃			○	○	○	○	○	○	集落跡・その他の墓	11.8	一部免掘調査済
76	飯田市	松尾	177	毛賀諏訪社						○	○	○	散布地	4.5	
77	飯田市	松尾	187	平			○	○	○	○	○	○	散布地	6.3	
78	飯田市	松尾	194	張原			○	○	○	○	○	○	集落跡	2.9	一部免掘調査済
79	飯田市	松尾	709	妙前1号古墳				○					古墳		免掘調査済
80	飯田市	松尾	710	妙前2号古墳				○					古墳		

*○：遺構確認、○：遺物確認

第2章 遺跡の位置と環境

番号	市町村	地区	市町村 番号	遺跡名	旧 石器	縄 文	弥 生	古 墳	奈良	平安	中 世	近 世	種 別	面積 (ha)	備 考
81	飯田市	松尾	711	妙前大塚古墳				○					古墳		一部学術発掘調査済
82	飯田市	松尾	712	妙前4号古墳				○					古墳		
83	飯田市	松尾	713	妙前5号古墳				○					古墳		
84	飯田市	松尾	714	妙前6号古墳				○					古墳		
85	飯田市	松尾	715	妙前7号古墳				○					古墳		
86	飯田市	松尾	716	妙前8号古墳				○					古墳		
87	飯田市	松尾	717	妙前9号古墳				○					古墳		
88	飯田市	松尾	718	妙前10号古墳				○					古墳		
89	飯田市	松尾	719	妙前11号古墳				○					古墳		
90	飯田市	松尾	720	妙前12号古墳				○					古墳		
91	飯田市	松尾	721	妙前13号古墳				○					古墳		
92	飯田市	松尾	722	妙前14号古墳				○					古墳		
93	飯田市	松尾	723	妙前15号古墳				○					古墳		
94	飯田市	松尾	724	大石1号古墳				○					古墳		
95	飯田市	松尾	725	大石2号古墳				○					古墳		
96	飯田市	松尾	708	羽場獅子塚古墳				○					古墳		一部発掘調査済、前方部削平
97	飯田市	松尾	700	上溝7号古墳				○					古墳		
98	飯田市	松尾	701	上溝8号古墳				○					古墳		
99	飯田市	松尾	702	上溝9号古墳				○					古墳		
100	飯田市	松尾	703	上溝10号古墳				○					古墳		
101	飯田市	松尾	704	上溝11号古墳				○					古墳		発掘調査済
102	飯田市	松尾	705	上溝12号古墳				○					古墳		
103	飯田市	松尾	706	上溝13号古墳				○					古墳		
104	飯田市	松尾	707	上溝14号古墳				○					古墳		
105	飯田市	松尾	699	塚塚古墳				○					古墳		飯田古墳群（国史跡）
106	飯田市	松尾	695	上溝2号古墳				○					古墳		
107	飯田市	松尾	696	上溝3号古墳				○					古墳		
108	飯田市	松尾	697	上溝4号古墳				○					古墳		
109	飯田市	松尾	698	上溝天神塚古墳				○					古墳		飯田古墳群（国史跡）、 一部発掘調査済
110	飯田市	松尾	694	おかん塚古墳				○					古墳		飯田古墳群（国史跡）、 一部発掘調査済、前方部削平
111	飯田市	松尾	681	茶柄山1号古墳				○					古墳		発掘調査済
112	飯田市	松尾	682	茶柄山2号古墳				○					古墳		発掘調査済
113	飯田市	松尾	683	茶柄山3号古墳				○					古墳		発掘調査済、一部残存
114	飯田市	松尾	684	茶柄山5号古墳				○					古墳		発掘調査済
115	飯田市	松尾	685	茶柄山6号古墳				○					古墳		発掘調査済
116	飯田市	松尾	688	茶柄山9号古墳				○					古墳		発掘調査済
117	飯田市	松尾	680	御射山獅子塚古墳				○					古墳		飯田古墳群（国史跡）
118	飯田市	松尾	729	狐の森古墳				○					古墳		
119	飯田市	松尾	726	水佐代獅子塚古墳				○					古墳		飯田古墳群（国史跡）、 一部発掘調査済
120	飯田市	松尾	727	水佐代2号古墳				○					古墳		
121	飯田市	松尾	728	羽場下古墳				○					古墳		
122	飯田市	松尾	689	北の原古墳				○					古墳		発掘調査済
123	飯田市	松尾	690	妙見山古墳				○					古墳		発掘調査済
124	飯田市	松尾	734	八幡町古墳				○					古墳		
125	飯田市	松尾	733	八幡山古墳				○					古墳		
126	飯田市	松尾	735	降松古墳				○					古墳		
127	飯田市	松尾	737	代田2号古墳				○					古墳		
128	飯田市	松尾	691	代田山1号古墳				○					古墳		

*○：遺構確認、○：遺物確認

番号	市町村	地区	市町村 番号	遺跡名	旧 石器	縄 文	弥 生	古 墳	奈良	平安	中 世	近 世	種 別	面積 (ha)	備 考
129	飯田市	松尾	747	大善斎森古墳				○					古墳		
130	飯田市	松尾	730	清見寺古墳				○					古墳		
131	飯田市	松尾	731	下ノ宮1号古墳				○					古墳		
132	飯田市	松尾	732	下ノ宮2号古墳				○					古墳		
133	飯田市	松尾	692	代田山狐塚古墳				○					古墳		県史跡
134	飯田市	松尾	736	代田獅子塚古墳				○					古墳		
135	飯田市	松尾	738	照月庵古墳				○					古墳		
136	飯田市	松尾	739	上毛賀2号古墳				○					古墳		
137	飯田市	松尾	740	下毛賀1号古墳				○					古墳		
138	飯田市	松尾	741	F毛賀2号古墳				○					古墳		
139	飯田市	松尾	742	下毛賀3号古墳				○					古墳		
140	飯田市	松尾	743	F毛賀4号古墳				○					古墳		
141	飯田市	松尾	744	下毛賀5号古墳				○					古墳		
142	飯田市	松尾	745	下毛賀6号古墳				○					古墳		
143	飯田市	松尾	746	下毛賀7号古墳				○					古墳		
144	飯田市	松尾	748	張原古墳				○					古墳		
145	飯田市	松尾	1085	上の城跡						○			城跡	2.3	
146	飯田市	松尾	1087	松尾城居館跡						○			城跡		
147	飯田市	松尾	1131	照月庵跡						○			居館跡		
148	飯田市	竜丘	206	大鳥		○	○	○	◎	◎	○		集落跡・その他の墓	28.2	一部発掘調査済
149	飯田市	竜丘	207	城跡		◎	○	○	◎	○	○		集落跡	17.7	一部発掘調査済
150	飯田市	竜丘	765	番匠塚古墳				○					古墳		
151	飯田市	竜丘	767	丸瀬町古墳				○					古墳		
152	飯田市	竜丘	766	ヒエ田古墳				○					古墳		
153	飯田市	竜丘	768	丸塚古墳				○					古墳		
154	飯田市	竜丘	794	福宮1号古墳				○					古墳		
155	飯田市	竜丘	795	福宮2号古墳				○					古墳		
156	飯田市	塘	679	物見塚古墳				○					古墳		発掘調査済
157	喬木村	伊久間		伊久間塚		◎	◎	○	○	○	○		集落跡		1952・54・77・78・90・ 95・98・99年調査
158	喬木村	伊久間		双山古墳群				○					古墳		
159	喬木村	伊久間		赤坂古墳				○					古墳		

*◎：遺構確認、○：遺物確認

第3章 調査の方法

第1節 発掘作業の方法

1 調査区とグリッド設定

調査は県教委の「記録保存を目的とする発掘調査の標準および積算基準」と、埋文センター作成の「遺跡調査の方針と手順」に則して実施している。

(1) 遺跡名称と遺跡記号

遺跡名称と遺跡記号は、川原遺跡 (KAWARA) : 「IKR」、下川原遺跡 (SHIMOGAWARA) : 「ISG」である。遺跡記号は、調査記録の便宜を図るため、遺跡名をアルファベット3文字で表したもので、1文字目の「I」は長野県内を10地区に分割した飯田・下伊那地域の地区を示し、2文字目、3文字目は遺跡名のローマ字表記2文字を選択したものである。各種記録類や遺物の注記に遺跡記号を用いた。

(2) 調査区 (グリッド) の設定と呼称 (第8図)

国土地理院の平面直角座標第Ⅱ系の原点 (X = 東経 138° 30' 00", Y = 北緯 36° 00' 00") を基点に、200の倍数値を選んで測量基準線を設け、調査対象範囲全体をカバーするようにグリッドを設定した。

大々地区は、200 × 200 mの区画で、北西から南東へⅠ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳのローマ数字で表記した。

大地区は、大々地区を40 × 40 mの25区画に分割し、北西から南東へA～Yまでのアルファベットで表記した。

中地区は、大地区を8 × 8 mの25区画に分割し、北西から南東へ01～25のアラビア数字で表記し、調査では、中地区を遺構測量等の基準単位とした。なお、座標値は、世界測地系である。

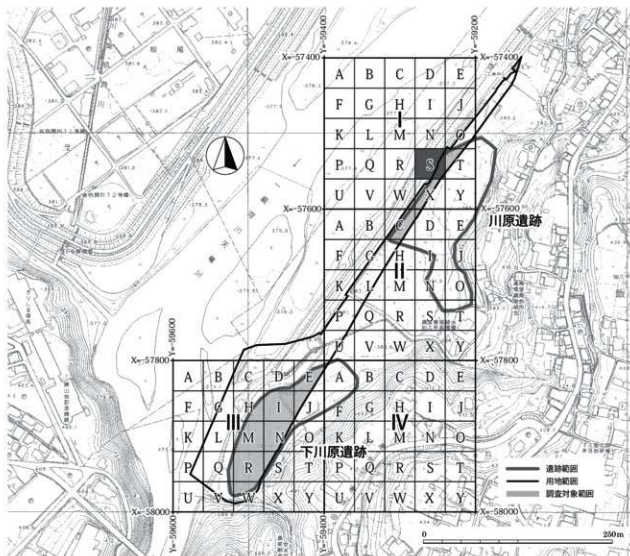
またグリッド設定は、川原遺跡、下川原遺跡とも、遺構検出がほぼ終了した調査後半の段階で、業務委託により行った。

2 表土の掘削と遺構の検出

川原遺跡では、現地踏査後、用地範囲に沿って北東から南西にかけて、重機により13か所のトレンチを掘削し、土層観察による確認調査を行った (第2図参照)。2区の東側の丘陵から延びる微高地区分は、用地範囲の南西壁際 (6・7T)、中央部分でそれに直行するトレンチ (10T) を入れ土層観察した。2区のみで遺物を確認し、重機により表土 (上部砂層、シルト層) 掘削し、面調査した。遺構検出は、基本土層Ⅳ層の縄文時代中期以降の遺物包含層を移植ごておよび両刃鎌で掘り下げ、Ⅴ層上面で行った。

出土遺物については、層位で分けて、原則、中地区グリッド、遺構が明確となった場所は、遺構ごとに取り上げた。ただし、委託によるグリッド設定前の遺構検出時の一部資料について、任意に設定した2 × 2mグリッドで取り上げた。こうした遺物は、調査で得られた4,862点のうち1,053点が該当する。整理等作業のなかでこの1,053点のうち、確実に遺構に伴うと判断したものが402点あり、そのほかは遺構外として扱った。遺物注記は任意グリッドをそのまま記し、台帳にも記載した。なお、任意グリッドの配置図は、添付DVDに収録した。

下川原遺跡も同様に、15か所でトレンチによる確認調査を行い (第5図参照)、遺物が出土した東側の



▲大々地区 (200m) : I・II・III・IV

A	B	C	D	E
F	G	H	I	J
K	L	M	N	O
P	Q	R	S	T
U	V	W	X	Y

200m
40m

▲大地区 (40m) : A・B・S...

S19-01	S19-02	S19-03	S19-04
S19-05	S19-06	S19-07	S19-08
S19-09	S19-10	S19-11	S19-12
S19-13	S19-14	S19-15	S19-16

8m
2m

▲小地区 (2m) : I S19-14

01	02	03	04	05
06	07	08	09	10
11	12	13	14	15
16	17	18	19	20
21	22	23	24	25

2m
8m
40m

▲中地区 (8m) : I S19
小地区 (2m) : I S19-14

第8図 調査対象範囲とグリッド設定図

丘陵から延びる微高地部分（2-1区）のみを面調査した。遺構検出は、基本土層Ⅳ-3層上面で行った。出土遺物は少量でトレンチ内の出土が主体であり、層位で分けて、遺構、中地区、トレンチ単位で取り上げた。

3 遺構精査

埋文センターで定める以下の遺構記号にアラビア数字を付して遺構名とした。

SB：2mを目安とし、それ以上の大きさの方形、円形、楕円形の掘込み【竪穴建物跡】

SK：単独、もしくは他の掘込みとの関係が認められないSBより小さな掘込み【土坑、小土坑】

SH：石が面的に出土するもの【遺物集中、石を伴う土坑】

遺構精査は、SB（竪穴建物跡）については、検出面で遺構の形状を確認したのち、セクションベルトを残し、移植ごとおよび両刃鎌で埋土の層位ごとに床面まで掘り下げた。セクションベルトは記録後に外し、周溝、柱穴、炉跡等の精査、記録を行い、プラン全体を記録した。その後、床下を確認した。SK（土坑、小土坑）についても同様だが、規模の小さいものについては、検出面で遺構の形状を確認したのち、半裁し、セクションを記録後に完掘し、プラン全体を記録した。また、SHのうち遺物集中については、平面を中心に記録をとり、遺物を取り上げた。さらに、石を伴う土坑については、平面を中心に記録をとり、あとはSKに準じた。

出土遺物は、遺構ごとに層位を分けて取り上げ、出土地点の記録が必要なものには遺構ごとの遺物番号を付して取り上げた。

終了した調査面は、下層の遺構・遺物の有無を再確認するため、重機による深掘りを行った。

なお、墓坑の可能性が考えられた下川原遺跡SH10の埋土は、銭貨、土器、鉄製品等を抽出する目的で、2mmメッシュのフルイを用いた水洗選別によって遺物採取を実施した。細い竹の炭化物と内耳鍋片を検出した。

4 記録作成

図化記録は、業務委託を主体に行い、トレンチ図、遺構平面図は単点測量により作成した。土層断面図、遺物出土状況図は、調査研究員およびその指導のもと発掘作業員が手測量で行った。遺構平面図は、プラン完掘後に、竪穴建物跡、土坑について、それぞれ業者委託による単点測量を行い、提出された紙出力図へ遺構と照合しながら結線を行った。単点測量図は、竪穴建物跡、土坑とも割付平面図に記録した。遺構図は、1/20の縮尺を基本とし、必要に応じて1/10の縮尺で測量した。また、調査範囲図、地形測量図は、業務委託で1/100を基本として作成した。

写真記録は、6×7リバーサル・モノクロフィルム、一眼レフデジタルカメラを併用した。デジタル写真は、JPEGとLAWデータ形式のデータを保存した。また、遺跡全景等の空中写真は、平成28年度の業務委託により、ラジコンヘリコプターに搭載されたPENTAX 645で撮影した。

第2節 整理等作業の方法

1 遺物の整理

(1) 注記について

土器、石器は、1cm角以下程度の微細な資料を除き、すべてに注記をした。遺跡名は記号を用いて、川原遺跡：I K R、下川原遺跡：I S Gとし、出土地点等は以下の略号を用いて注記をした。なお、発掘時の遺物取上げ台帳と注記内容の対応表を、添付DVDに収録した（「遺物台帳」）。

注記に用いた略号

検出面 → ケ 埋土 → 注記なし 床面 → ユ 炉跡 → ロ トレンチ → ト
 ベルト → ベ 黒褐色土 → 黒カツ 深掘 → フ かく乱 → カク 排土 → Z

(2) 遺物管理番号について

遺構の時期・性格を決定し遺跡の特徴を記述するために、資料化が必要と判断した土器、加工が認められるすべての石器、石核等について、個別に管理番号を付した。管理番号は、遺跡ごとに下記のとおりとした。これらの資料は、出土地点、器種、遺物の属性などを記載した「遺物管理台帳」を作成し、添付DVDに収録した。なお、管理番号を付したが、写真、実測図を掲載できなかった資料もある。

川原遺跡

縄文・弥生時代の土器 No.0001～0165
 縄文・弥生時代の石器・石製品 No.1001～1360

下川原遺跡

縄文時代～中世の土器 No.01～24
 縄文時代～中世の石器 No.01～23

(3) 遺物整理の手順

ブラシを用いた水洗作業ののち、注記マシンによる注記および手注記を行い、土器、石器と遺物の素材別に整理を進めた。

土器は、遺構別、グリッド別に、すべての資料を分類し、部位、時期、文様等がわかるものは記録し、破片数と重量を計測した。接合作業は、遺構の当該グリッド出土土器を含めて遺構ごとに実施した。遺物包含層出土土器もあり、グリッド出土土器のなかでも器形が推定できる土器は、他のグリッドとのグリッド間接合を実施した。

石器・石製品は、器種分類したのち、石器類および剥片類（石核、剥片、砕片）1点1点の法量と重量の計測を行い、遺構別、器種別にまとめた。剥片石器については、接合作業を実施した。接合作業は、遺構別、石材別に調査区全体を対象に実施した。なお、石器群の石材分類は、黒岩 隆が行った。

出土遺物のなかで、川原遺跡のS B 07・08上層から出土した遺物は、遺物出土状況写真・図や空中写真等の検討から、北側に近接する遺物集中（S H 01）から連なる一連の遺物群の可能性が高くなった。当初S B 07・08として取り上げた埋土上層No.遺物は、S H 01出土に変更して報告した。

その後、管理番号を付したそれぞれの遺物の実測・トレース図を作成し、写真撮影を行い、必要に応じて遺構図と合わせて編集、版組をした。

2 記録類の整理

(1) 遺構図の整理

業務委託で作成した単点測量図（デジタルデータ）をもとに全体図、個別遺構平面図を作成し、断面図等は図面用紙に記録した図を点検、編集、第2原図を作成して、Illustrator CC 2018を用いてデジタルトレースを行った。

(2) 写真記録の整理

発掘作業で撮影したフィルム写真およびデジタル写真は、「写真台帳」を作成し、撮影日、撮影番号と内容を記した。フィルム写真は、遺跡別に撮影日順にアルバムに収納した。デジタル写真データは、JPEG、LAWを撮影日順にカットごとにまとめ、ハードディスクとDVDに記録した（川原遺跡：1,530カット、下川原遺跡：1,566カットである）。

遺物写真は、業務委託によりデジタル撮影を行った。撮影No.をファイル名とした「遺物写真台帳」を作成し、撮影日、撮影番号と内容を記した。デジタル写真データは、JPEG、TIFF、LAWのデータ単位で、撮影番号順にハードディスクとDVDに記録した。

3 報告書作成と資料収納

(1) 報告書作成

報告書の本格的な編集作業は、平成30年度に入ってから着手した。川原遺跡と下川原遺跡は別の章立てをし、それぞれの遺跡の特徴が理解しやすいように工夫し、章末には小結を設けた。

報告書作成にあたり、平成29年8月8日、平成30年10月15日の2回、編集会議を行った。会議では、遺構図の表現方法、表・グラフの有効性の指摘および両遺跡が天竜川左岸の東側の丘陵から延びる微高地上に営まれた地形的に同じ性格の遺跡である共通点を明記し、それぞれの遺跡の特徴を記述することが良いのではという指摘を受けた。2回の会議で指摘を受けた事項を検討し、報告書の内容を練り上げていった。

完成した報告書は、国、都道府県および県内外市町村の埋蔵文化財関係機関、大学、地域の図書館等に配布する。

(2) 資料収納

土器・石器等の人工遺物は、材質、種別ごとに報告書掲載遺物と非掲載遺物に分けたうえで、出土遺構、グリッド等の地点別にテンバコに収納し、「遺物収納台帳」を作成した。

実測図類は、遺構実測図、遺物実測図別に、通し番号（図面番号）を付けて「図面収納台帳」に登録し、図面ファイルに収納した。

写真は、遺構・遺物写真ともに、整理段階で作成したアルバムと台帳をテンバコに収納した。

遺構・遺物写真のデジタルデータは、同じハードディスクに収納した。ハードディスクの型式は、2018年購入のBUFFALO社のHD-GDU3D（容量2.0TB）である。

第4章 川原遺跡の調査

第1節 基本層序

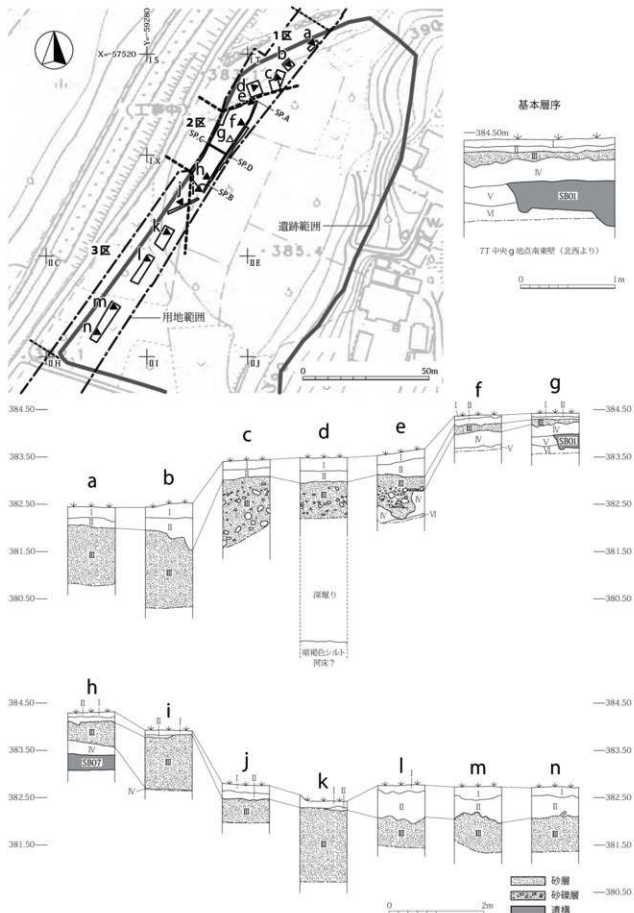
調査対象地は、天竜川を起源とする洪水砂が厚く堆積する地点と、東側の丘陵から延びる微高地地点に大別できる。

調査範囲の北東側（1区）と南西側（3区）の洪水砂が厚く堆積する地点では、砂の堆積が齊一的でなく、調査区内で土層を統一化できなかったため、Ⅲ層（砂層）として大きくまとめた（第9図）。元来、谷状地形であったものが三六災害等の洪水砂により平坦になったものと思われ、遺構・遺物はほとんど検出できなかった。

一方、調査範囲の中央部（2区）の東側の丘陵から延びる微高地地点では、洪水砂層下の縄文時代中期以降の遺物包含層（Ⅳ層）を掘り下げ、Ⅴ層上面で面的な調査を実施したところ、縄文時代中期後葉～後期中葉の遺構が密度濃く残る集落跡を検出できた（第10図）。

基本層序は、以下のとおりとした（第9図）。

- I層：暗オリーブ褐色（Hue25Y3/2）砂質シルト。粘性やや強い。しまり普通。極細粒砂30～40%混入。現耕作土。
- II層：オリーブ褐色（Hue25Y4/3）砂質シルト。粘性弱い。しまり普通。にぶい黄色（Hue25Y6/3）極細粒砂のラミナ、部分的に混入。ビニール混入。旧耕作土。
- III層：オリーブ褐色（Hue25Y4/3）極細粒砂。粘性弱い。しまりやや良い。にぶい黄色（Hue25Y6/3）細粒砂、かく拌された状態で30～40%混入。細粒砂多い部分、しまり悪い。6 T北東端からc～e地点にかけて、砂礫が多量に混入。
- IV層：暗オリーブ褐色（Hue25Y3/3）砂粘土質シルト。粘性やや強い。しまり良い。上層ににぶい黄色（Hue25Y6/3）極細粒砂のラミナ、5～10%混入する部分あり。縄文時代中期以降の遺物包含層。
- V層：にぶい黄褐色（Hue10YR4/3）砂粘土質シルト。粘性やや強い。しまりやや良い。暗褐色（Hue10YR3/3）粘土質シルト、5～10mm厚で互層およびブロック状に20～30%混入。オリーブ褐色（Hue25Y4/3）極細粒砂、20～40mm大で10%混入。縄文時代の地山層。
- VI層：オリーブ褐色（Hue25Y4/3）砂質シルト。粘性普通。しまり普通。下層ほど粘性強い。



第2節 遺構

1 遺構の概要 (第11図、口絵2、PL 1～3)

調査した遺構はすべて2区からの出土で、竪穴建物跡10軒、遺物集中1基、土坑10基である。それぞれの遺構の帰属時期については、出土土器から推定した。

竪穴建物跡は、縄文時代中期後葉4軒・後期初頭1軒・後期前葉4軒・後期中葉1軒である。遺物集中は、縄文時代中期後葉～後期前葉の土器が出土し、当該期に形成されたと考える。土坑も同様に、縄文時代中期後葉4基・後期初頭2基・後期前葉4基の時期とした。

すべての遺構は、天竜川左岸の氾濫原に北西方向に延びた微高地上で検出した。北東側、南西側は天竜川によって削られ、北東側には大量の砂礫が堆積し、南西側では竪穴建物跡(SB 08)、遺物集中(SH 01)の一部が削り取られていた。また、微高地先端部は堤防道路造成時に掘削を受け、遺跡範囲外となっている。

2 竪穴建物跡

竪穴建物跡からは、縄文時代中期後葉下伊那唐草文Ⅲ段階古相¹～後期中葉東海系観塚Ⅲ式土器²が出土している。半数の建物跡で炉跡を持たず、日常の住居として使用されなかったことも推測した。なお、建物跡の埋土上層から出土した遺物には、建物廃絶以後に当該遺構に混入したものも含まれていると考えられる。

なお、それぞれの建物跡の計測値等の詳細については、文末の竪穴建物跡一覧(第10表)を参照されたい。

SB 01 (第12図、PL4)

検出：基本土層V層で検出した。7Tの北東断面で本遺構の立上りを確認した。埋土からは土器片が出土し、その状況から竪穴建物跡と判断した。南東側は調査区外である。

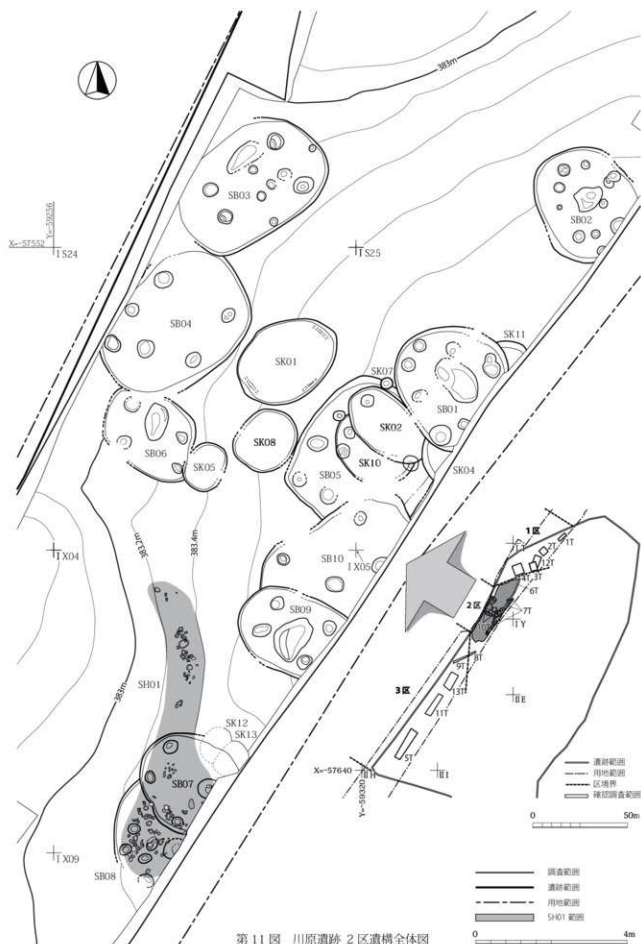
重複関係：北東側でSK 11、南西側でSB 05、SK 02・04を切る。すべての遺構が、SB 01より暗褐色砂粘土質シルトの混入が多く、黒味を帯びる。

構造：壁面はほぼ垂直に立ち上がる。床面は貼床がなく、地山土がやや粘土質となり硬化し、平坦ではない。柱穴は円形ないしは楕円形を呈する。P1とP8、P2とP7、P4とP6が対になると考えられ、未調査箇所を含めると、本来は8基ほどの柱穴で上屋を支えた可能性がある。炉跡は長楕円形で建物跡埋土類似の4層が堆積し、焼土粒、炭化物粒が微量に混入する。熱を受けて黒色化し、もろくなった礫9点と土器片が炉跡底面から10～20cm高い位置で出土した。炉跡の掘方および炉石が残存する。P1・8を入口部の柱穴と考えると、建物の主軸方位は南東となる。炉跡もそれに対応する形となっている。

出土遺物：埋土上層から中層にかけて、縄文時代後期初頭の土器片(4、5、9ほか)および石鏃(164)、打製石斧(185)、横刃形石器4点(194、201、216ほか)、磨製石斧未成品、礫器(243)、石核、剥片、礫

1 縄文時代中期土器については、日本考古学協会2013年度長野大会でまとめられた「長野県における縄文時代中期土器の幅年と動態」を基本とする(坂井2013)。

2 本遺跡SB 03出土土器については、愛知県豊田市三斗目遺跡(余合ほか1993)、三重県多気郡明和町天白遺跡(森川ほか1995)等に類似土器を確認したことから、縄文時代後期中葉、東海地方の在土器型式「観塚Ⅲ式」であると推測した。



等が出土している。床面近くからは、石錘 (223、225)、剥片および土器片が出土し、北西埋土からは石錘 (170) が出土した。さらに、石核 2 点、剥片 29 点、碎片 10 点と石器製作に関わる石片類が大小合わせて出土している。石材としては、砂岩、硬砂岩、緑色岩が多い。炉跡上～中層では、被熱してもろくなった石皿・礫や黒色化した台石・石核、剥片とともに、横刃形石器 (202)、蛇行沈線文を特徴とする縄文時代後期初頭末期の土器片 (6、7) が出土している。

時期：縄文時代後期初頭 (称名寺式期)。

S B 02 (第13図、PL4・5)

検出：7 T掘削時に赤色化した礫が3点出土し、炉跡と推測した。周囲を面的に検出し、北側では基本土層Ⅵ層上面、南～北西側にかけては基本土層Ⅴ層上面で半円形の輪郭を検出し、7 T断面で本遺構の立上りを確認した。南東側は調査区外となる。

重複関係：なし。

構造：壁面はほぼ垂直である。床面は貼床がなく、地山土がやや粘土質となり硬化し、平坦ではなく、一部暗褐色砂粘土質シルト層となる。壁面もやや粘質で硬く、埋土が剥がれる形で確認できた。柱穴は円形を呈する。P1・11は、基本土層Ⅵ層が底面となる。柱穴の埋土は建物跡埋土と同質の砂粘土質シルトであるが、P2・5は砂質シルトとなる。主柱穴は明確ではないが、径の大きな穴を中心に上層を支えた可能性が高い。炉跡は不整形で、埋土は建物跡埋土類似の3～5層が堆積し、焼土粒、炭化物粒を微量に含む。炉石と考えられる赤色化した礫9点が、建物跡床面～高さ約20cmの間で出土した。P9・11間が広く、炉跡の長軸方位を考え合わせると、建物の主軸方位は北東となる。

出土遺物：北東床面から縄文時代中期後葉の土器片 (19)、石錘 (229) が、埋土上層からは赤色化した石皿2点 (246ほか)、P9上部からは磨石 (敲石) が出土した。全体に出土量は少ないが、南西埋土を中心に、砂岩やチャートの剥片・碎片20点が出土し、北西側検出面から刃器 (182)、南東埋土2層からは礫器が出土している。

時期：縄文時代中期後葉 (下伊那唐草文Ⅲ段階)。

S B 03 (第14図、PL5)

検出：北西に向かってやや傾斜する基本土層Ⅴ層上面で検出した。北西側は堤防道路建設時に破壊され下端のみが検出できた。

重複関係：南東側でS B 04を切る。断面での重複関係の観察はなく、平面での土質の違いによって重複関係を判断した。S B 03の埋土はS B 04に比べ、やや黄色味を帯び、粘性があり、しまりが良い。ただ、埋土は部分的に変化し一様ではない。

構造：壁面はほぼ垂直である。掘削により中央寄りには床を抜いて掘り過ぎた部分があり、東側が全体に5～10cm下がっている。残りの床面は貼床がないが、やや硬く、北東半分の地山層 (床面) は柔らかい極細粒砂である。床面は平坦ではないが、埋土が剥がれる形で確認できる (特に南東部)。壁面は、やや粘質でやや硬く、埋土が剥がれる形で確認した。柱穴は円形を呈し、主柱穴をP1～4と推測した。柱穴の埋土は建物跡埋土1層に類似する黄褐色の極細粒砂または砂質シルトとなる。柱穴は床面より砂質が強く、しまりが悪くなることを基準に検出した。埋土とP1出土土器が同一個体 (22) と考えられることから、埋土堆積時期と柱穴埋没時期との時間差は短い可能性がある。炉跡は不整形円形の掘方のみで、埋土が建物跡埋土2層に類似する砂粘土質シルトに微かに赤みを帯びた被熱土がブロック状に20%、焼土粒、炭化物粒がわずかに混入していた。炉跡が中央北西寄りに位置していることから、建物の主軸方位は北西となる。出土遺物：遺物は建物跡中央から北西寄りにかけて集中し、床面およびやや上層で約3分の2の遺物が出土している。縄文時代後期中葉の東海系土器 (観塚Ⅲ式) (22) の同一個体と考えられる土器片11点が、

建物の床面および上層、P 1 内中位層から出土し、そのうち6点が接合した。そのほかの後期中葉と思われる土器片(24、26～28、39)は、床面を中心に埋土上層まで出土している。30は、後期前葉の混入土器である。石器は、横刃形石器が11点(195～197、207、209、212ほか)、石錘5点(227ほか)、打製石斧2点(183、184)、石皿2点、石核2点(220、221)、剥片40点、砕片2点、微細な剝離がある剥片11点がある。そのほか、検出面から石鏝(167)、北西床面より敲石が出土している。

時期：縄文時代後期中葉(鯉塚Ⅲ式期)。

SB 04 (第15図、PL 6)

検出：北西に向かってやや傾斜する基本土層V層上面で検出した。北西側は堤防道路建設時に破壊され、現在は遺跡範囲に含まれない。

重複関係：北側でSB 03に切られる。平面での土層観察により、SB 04の埋土はSB 03に比べ、やや黒味を帯び、粘性がなく、しまりが悪い。南側でSB 06を切る。10 Tの土層断面観察、10 Tベルト下の検出により、埋土の色調は同じだが、SB 06の埋土はSB 04に比べ、しまりが良い。

構造：壁面はほぼ垂直である。床面の高さをみると、南北方向で約10cm、東西方向で約20cmの高低差がある。床面は貼床がなく、やや硬い。地山層は砂質が強く柔らかい部分も多いが、しまり粘性等の微妙な違いにより床面と判断した。壁面は、やや粘質があり硬い部分が多く、埋土が剥がれる形で確認した。柱穴は楕円形ないしは円形を呈し、規模が類似し、すべてが主柱穴となる可能性がある。柱穴の埋土は1層目が建物埋土3層類似の極細粒砂に微量の炭化物粒が混入し、下層が粘性の強い砂質シルトである。炉跡は、砂質が強い床面のため検出しにくい状況があり、確認できなかった。建物の主軸方位は、長軸方位とほぼ一致する北東となる。

出土遺物：遺物量は他の建物跡に比べると少なく、西側床面およびやや上層から、打製石斧(186)、大形打製石斧未成品(192)が出土した。192は半分破損しており、磨製石斧未成品の可能性もある。そのほか、北西埋土より先端が破損した打製石斧(191)、南東埋土および検出面を中心に、縄文時代後期前葉土器片(41ほか)、横刃形石器2点、剥片15点等が出土した。なお、SB 06との接点部分では遺物が混在している可能性がある。

時期：縄文時代後期前葉(堀之内Ⅰ式期)。

SB 05 (第15図、PL 6)

検出：基本土層V層上面で検出した。7 T、10 T断面で本遺構の立上りを確認した。

重複関係：北東側でSB 01、SK 02・04・07・10に、南側でSB 10に切られる。中期後葉の遺構は類似した土層ではあるが、しまりの違いから判別した。また7 Tの土層断面、平面での埋土観察、畑地灌漑のかく乱断面、SB 01の壁面観察でも、重複関係を確認した。

構造：壁面はほぼ垂直である。埋土は地山層と類似するが、炭化物粒が微量に混入し、壁際には極細粒砂が堆積していた。床面は貼床部分はなく、地山土がやや粘土質となり硬化する。凹凸があり、一部暗褐色砂粘土質シルトであった。壁面はやや粘質で硬く、埋土が剥がれる形で確認した。柱穴は円形ないしは楕円形を呈し、壁面近くをめぐるP 1・3・4～6・8を含めた9～10本の柱を持つ上層構造となる可能性がある。柱穴の埋土は1層目が砂質シルト、2層目が建物跡埋土類似の砂粘土質シルトとなる。両層ともに炭化物粒がわずかに混入する。炉跡は、7 Tの掘削およびかく乱のため確認できなかった。建物の主軸方位は、長軸方位と一致する北東である。

出土遺物：床面やや上層に、土器片および剥片が数点出土した。重複する遺構が多いためであろう。土器は、縄文時代中期後葉の大形破片(49)が埋土から出土し、石器は、打製石斧(187)が埋土から、削器(179)、微細な剝離がある剥片(177)、横刃形石器(204)、礫器(244)が検出面から出土している。

時期：縄文時代中期後葉(下伊那唐草文Ⅳ段階)。

S B 06 (第16図、PL6・7)

検出：10 T北東壁断面で基本土層V層を切る落込みを確認し、10 T底面では一部に床面と思われる硬化面を検出した。基本土層V層上面で建物跡の南東角、10 Tベルト部分で北東角および北西角のプランを確認し、堅穴建物跡とした。検出では土色が類似していたが、土層の硬さで分けた。

重複関係：北側でS B 04、東側でS K 05に切られる。10 T北東側の先行トレンチでS B 04との重複を、10 T断面観察時にS K 05との重複を確認した。

構造：壁面はほぼ垂直で、やや粘質で硬い。床面は北西・南西方向に向かって傾斜し、軟弱で貼床はないが、炉跡付近は一部やや硬化していた。P 1～P 4は円形ないしは不整楕円形を呈し、壁に沿った平行四辺形の配列となるが、4基のみの出土から支柱穴と判断する。炉跡は長楕円形で、建物中央北寄りに位置し、建物跡埋土類似の3、4層が埋土である。3層には少量の焼土粒が混入している。底面は軟弱で、南側の壁際がほかにくらべてやや硬い。炉跡は、ほぼ北に長軸を持つが、北東・南西の壁を考慮すると、建物の主軸方位は北東となる。

出土遺物：床面直上の遺物が多く、特に炉跡付近からの出土が顕著である。炉跡内の遺物は埋土上面から上位層に限られる。床面やや上層の1層中位から、器形が一部復元できた堀之内I式土器(52)が、他の土器片、打製石斧未成品(193)、敲石、剥片と隣接して出土した。炉跡上面および上層からは、土器底部片ほかの土器片(57、58)、微細な剝離がある剥片、打製石斧、横刃形石器、磨製石斧(219)、石錘(224)、敲石、剥片が、炉跡および4層からは、削器(181)、打製石斧(190)が出土している。そのほか、中央床面直上より横刃形石器(200)が、埋土中から石核(222)、石鏃(165)、打製石斧、横刃形石器(198)等が出土している。

時期：縄文時代後期前葉(堀之内I式期)。

S B 07 (第17図、PL7・8)

検出：7 T掘削時に縄文時代中期後葉土器片および石器等の散布が認められた。基本土層V層類似層の上面で検出し、7 T断面で本遺構の立上りを確認した。

重複関係：南西側でS B 08を切り、北東側でS K 12・13に切られる。S B 08との前後関係は、7 T南東断面および平面観察で、埋土の色調、粘性およびしまりの違いから判断した。当初、S K 12・13は本遺構に切られると考え、掘り進めたため、本遺構調査によって一部を掘削してしまった。遺物集中S H 01は、本遺構埋没後に形成された。南東側は調査区外である。

構造：壁面はほぼ垂直で、やや粘質で硬い。埋土は単層で砂粘土質シルト、やや暗めのオリブ褐色砂粘土質シルトがブロック状に混入した自然堆積土である。床面は全体に軟弱で貼床はなく、一部に硬化箇所があり、ほぼ平坦となる。柱穴は円形ないしは楕円形を呈し、支柱穴は明確でない。炉は存在しなかった可能性が高い。建物の主軸方位は、P 1・4間を入口部と考え、長軸方位とほぼ同様に南東となる。

出土遺物：縄文時代中期後葉の土器片(63～66)、楔形石器1点(174)、石錘4点(228ほか)、横刃形石器、石皿(252)等の石器が出土している。そのほか、埋土からは剥片30点、碎片18点と多数の石器製作に関わる石片類が出土した。

時期：縄文時代中期後葉(下伊那唐草文Ⅲ段階)。

S B 08 (第17図、PL7・8)

検出：7 T掘削時に縄文時代中期後葉土器片および石器等の散布が認められた。基本土層V層類似層の上面で検出し、7 T断面で本遺構の立上りを確認した。南西側は削平されている。

重複関係：北東側でS B 07に切られる。前述の土性の違いからS B 07との重複関係を判断した。S H 01は本遺構埋没後に形成された。

構造：壁面はほぼ垂直で、やや粘質で硬い。埋土は単層で砂粘土質シルト、オリーブ褐色砂質シルトがブロック状に混入した自然堆積土である。床面は全体に軟弱で貼床はなく、ほぼ平坦となる。柱穴は楕円形を呈し、規模の小さいものが多く並びも不揃いで、主柱穴は明確でない。柱穴の埋土は、建物跡埋土と同じ砂粘土質シルトである。炉跡は今回の調査範囲では確認できなかった。主軸方位は、西壁のラインに合わせると北となる。

出土遺物：縄文時代中期後葉の土器片、横刃形石器2点（203ほか）、敲石1点（237）等の石器、剥片10点、砕片3点が、埋土から出土している。

時期：縄文時代中期後葉（下伊那唐草文Ⅲ段階）。

S B 09（第18図、PL 8）

検出：基本土層V層上面で検出し、7 T断面で本遺構の立上りを確認した。南東側は調査区外である。重複関係：北東側でS B 10を切る。7 T南東断面および平面観察で、土層の色調・混入物の違いから重複関係を判断した。

構造：壁面はほぼ垂直で、やや粘質で硬い。埋土は2層とも砂粘土質シルトとなり、焼土粒がブロック状に混入する。床面には貼床はみられないが部分的に硬化している箇所がある。柱穴は不整形ないしは楕円形を呈し、P 1～P 4の4基で主柱穴をなす。柱穴の埋土は単層で、オリーブ褐色砂粘土質シルトないしは砂質シルトとなる。炉跡は不整形楕円形で、焼土粒の混入は微量である。底面は軟弱で南西側がテラス状にやや傾斜している。炉跡が中央南西寄りに位置し、入口部を北東側と考えると、建物の主軸方位は南西となる。

出土遺物：床面から浮いた状態で土器片と石器が出土し、床面直上の遺物は少ない。ただし、炉跡南西壁際や炉跡底面からの出土は多い。出土した大形土器片（81）は縄文時代中期後葉の時期であり、建物跡埋土出土の土器（後期前葉堀之内1式期）とは時間差がある。中期後葉の壺（76）もあるが、炉跡内の土器（75）をはじめ遺構全体では後期前葉土器の比率が高い（125点・52% 中期39点・16%）（第13表）。石器および石片類も多いが、特に横刃形石器が9点（206, 210ほか）と最も多い。そのほか、石皿（248）、碟器（245）、敲石4点（236ほか）が、床面、Pit、炉跡、埋土より出土している。剥片・砕片47点、二次加工がある剥片・微細な剝離がある剥片11点を数え、石片類の合計数は10軒の堅穴建物跡のなかで最も多いだけでなく、遺物集中SH 01よりも多い。

時期：縄文時代後期前葉（堀之内1式期）。

S B 10（第18図、PL 8・9）

検出：基本土層V層上面で検出した。7 T断面でS B 05・09との前後関係を把握した。南東側は調査区外となる。

重複関係：北側でS B 05を切り、南西側でS B 09に切られる。

構造：壁面は北東側がほぼ垂直で北西側はやや傾斜を持つ。床面は貼床がなく、地山土がやや硬化する程度で、一部砂質が強い部分がある。壁面は、やや粘質で硬く、埋土が剥がれる形で検出した。柱穴は不整形ないしは不整形楕円形を呈し、埋土は単層で、建物埋土より暗い砂粘土質シルト、砂質シルトとなる。主柱穴は明確ではないが、P 1・4は位置、規模的にその可能性がある。P 3の底面からは風化礫が層状に出土、埋設過程に混入したものと考えられる。炉跡は、7 Tの掘削または調査区外にあるためか確認できなかった。建物の主軸方位は、長軸方位に合わせ北東となる。

出土遺物：床面や上層から、土器片および剥片少量と横刃形石器、石皿（250）が、埋土中～上層より、二次加工がある剥片、微細な剝離がある剥片、横刃形石器2点（214ほか）、敲石（232）、石錘（231）が出土した。そのほか、検出面から敲石（234）が出土している。

時期：縄文時代後期前葉（堀之内1式期）。

3 遺物集中

2区南西側、微高地の縁辺部に沿うように弧状の遺物集中を1基検出した。礫とともに石器を含む石片類、土器片が発見され、縄文時代中期後葉～後期前葉にかけての廃棄を主目的とした遺物集中と考える。

なお、整理作業の分析によって、当初下位の遺構との関係も想定されたS B 07・08上層出土の遺物は、北側のS H 01の遺物からほぼ同一標高値で続くことから、同遺構に帰属するものに修正した。

S H 01 (第19図、PL3・9)

検出：S B 09南西側のIV層を地形に合わせて掘削中、V層上面に幅50cm、長さ3mほどのほぼ南北に帯状に並ぶ礫とそれに混じって石器・石片類、土器片を検出した。礫は地形に沿ってやや弧状に並び、周辺とは独立した形で集中して出土したため、S H 01と呼称して調査した。調査時には明確でなかったが、整理等作業のなかで空中写真、標高値を比較し、礫および遺物類は南側に位置するS B 07・08上にも広がるかと判断した。

重複関係：S B 07・08埋没後に形成された。

構造：遺物が出土した幅は、最大で北側は約50cm、南側で約150cmを測る。微高地の縁辺部に沿うように弧状に残存するのは、天竜川によって縄文時代以降に削られたためと推測する。礫および遺物類の下面標高を計測すると383.4～383.2mとなり、北側～南側にかけて、ほぼ20cmのなかに収まり、高低差は少ない。

出土遺物：北側からは敲石(233)、石皿(249)、打製石斧(188)、横刃形石器(199、208、215)、削器(180)、二次加工がある剥片、微細な剥離がある剥片(176ほか)、磨石、石皿(255)等の石器が出土し、剥片29点、砕片4点の石片類が、S B 09と同じ程度に多量に出土した。図示した土器は後期前葉の時期で1点(104)だが、同時期の土器片は有文38点(286.9g)、無文98点(598.6g)を数える(中期後葉、有文15点(162.8g))。本遺跡における同時期の竪穴建物跡出土土器にも共通することだが、有文が少なく無文が多いという傾向がみられ、後期前葉の時期には粗製土器が主体であったことが考えられる。南側のS B 07・08上では、敲石7点(238～241、257～259)をはじめとして、横刃形石器(205、211)、磨石(242)、台石、二次加工がある剥片、微細な剥離がある剥片、石核、剥片が出土し、土器は北側と異なり中期後葉の器形復元可能な大形破片(92、93)、小破片(94、95、97、98)が出土している。そのほか、石錘(169)、楔形石器(175)、石錘(230)が検出で出土した。

時期：縄文時代中期後葉(下伊那唐草文Ⅱ段階)～後期前葉(堀之内Ⅰ式期)。

4 土坑

調査した土坑は10基で、時期は縄文時代中期後葉4基、後期初頭2基、後期前葉4基とした。これらは、次の3つに分類できる。

- ①形状が長軸1～3m弱の円形・楕円形・長楕円形で、深さ10～20cm前後の浅い土坑。
- ②形状は不明確だが、30cm以上の深さを持つ土坑。
- ③30cm以上の深さを持つ、柱穴状の土坑。

遺物は土器片、石鏃、打製石斧、横刃形石器、石錘等の石器、さらに剥片、砕片などの石片類が出土している。土坑の性格については明確にはわからない。以下、代表的なものの記述にとどめ、詳細については土坑一覧(第6表)を参照されたい。

S K 01 (第20図、PL9・10)

検出：北西に向かってやや傾斜する基本土層V層上面で検出した。

重複関係：なし。

構造：上記①に分類される。断面観察ベルトのみでの確認であるが、北東側と南西側壁間に幅約10cm・

深さ約5cm、南東側幅約15cm・深さ10cmの周溝状の掘込みを確認している。底面は下層の基本土層VI層と類似していたため不明瞭で掘り抜いており、断面観察により判断した。

出土遺物：埋土中～上層に、横刃形石器(217)、堀之内1式土器(105)が、南東壁際の被熱燻下から底面に食い込む形で石皿片(247)が出土している。

時期：縄文時代後期前葉(堀之内1式期)。

S K 02 (第20図、PL10)

検出：S B 05、S K 10の精査時に本遺構のプランを検出し、7 T断面でも重複する遺構の前後関係を把握した。

重複関係：北東側でS B 01、S K 04に切られ、南西側でS K 10、直下でS B 05を切る。S B 01とは土質的には類似するが、本遺構の方が暗褐色砂粘土質シルトの混入が多く色調が黒味を帯びる。さらにS K 04・10とは土質および混入物の割合、土色の違いによって、下層のS B 05とは土質、粘性の違いによって区別され、長楕円形プランが認められた。

構造：上記①に分類され、壁面はほぼ垂直である。埋土は2層で、下層が砂質となる。底面はS B 05の埋土となり、ほぼ平坦でしまりが悪く、やや硬い砂質シルトの埋土が剥がれる形で検出した。壁面も同様であった。

出土遺物：埋土1層に中期後葉土器片(108)、大形打製石斧(189)、石錘(226)が出土し、そのほか、埋土より横刃形石器4点、石核とともに剥片・碎片類が17点出土した。

時期：縄文時代中期後葉(下伊那唐草文Ⅳ段階)。

S K 04 (第20図、PL10)

検出：S B 05埋土上面で検出した。南東側は調査区外である。

重複関係：北東側でS B 01に切られ、南西側でS B 05と西側でS K 02を切る。S B 01・05とは土色、S K 02とは混入物の違いによって区分した。S B 01調査後、南西側の壁面を観察しながら掘削した。

構造：上記②に分類される。壁面はほぼ垂直である。埋土は2層で下層が極細粒砂となる。底面はS B 05の埋土となり、しまりが悪く、極細粒砂の埋土が剥がれて底面となる。

出土遺物：検出面より釣手付深鉢形土器の釣手部(109)ほか後期初頭の土器片、埋土上層より石製品と剥片1点が出土している。

時期：縄文時代後期初頭(称名寺式期)。

S K 07 (第20図、PL11)

検出：基本土層V層およびS B 05埋土上面で検出した。

重複関係：南西側でS B 05を切る。S B 05とは、土質、土色、混入物、しまりの違いによって識別した。

構造：上記③に分類される柱穴状土坑で、壁面はほぼ垂直である。底面はしまりが悪く、壁面は粘性がやや強く、砂質の埋土を取り除いて確定した。

出土遺物：埋土の中～上層より土器小片1点と石鏃(166)が出土した。

時期：縄文時代後期前葉(堀之内1式期)。

S K 12・13 (第21図、PL11)

検出：基本土層V層上面で検出した。当初S B 07に切られる土坑と判断し、S B 07の調査を進めたが、石皿等の石器がS B 07の壁面からさらにS K 12・13個に入り込むことがわかり、調査区境の土層断面を再観察した結果、S K 12・13はS B 07よりも新しい遺構であることが判明した。

重複関係：S K 12・13はS B 07を切る。S K 12とS K 13の新旧関係は明確ではないが、遺物出土状況を考えると、S K 13の方が新しい可能性が高い。

構造：上記②に分類される。SK 12・13とも同規模の土坑になる可能性が高く、SB 07の上端縁辺部を壊す形で掘削されている。

出土遺物：SK 12より横刃形石器(213)、敲石、剥片が出土し、SK 13からは石皿(253、254)、台石とともに一部器形が復元できる中期後葉土器片(117、118)が出土している。

時期：縄文時代中期後葉(下伊那唐草文Ⅲ段階)。

第10表 川原遺跡 竪穴建物跡一覧

遺構名 図番号	位置	形状	長軸 cm	短軸 cm	深さ cm	埋土 の 堆積	面積 ㎡	主軸 方位	1区の規模 長軸×短軸×深さ cm	2区の規模 長軸×短軸×深さ cm	時期	重複関係	床面の傾き 長軸 短軸
SB01 第12区	I S25	不整形	(258)	303	32	3層	(5.77)	N126°E	P1: 33×33×23 P2: (37)×(35)×28 P3: 30×26×14 P4: 48×41×14 P5: (22)×28×22 P6: 57×55×24 P7: (24)×(18)×10 P8: 36×36×26	138×82×25	縄文後期 初葉	SB05、SK02・ 04・11(古)	0° N37°E 0.4°
SB02 第13区	I S20-25	不整形	(260)	275	31	2層	(5.30)	N64°E	P1: 33×33×22 P2: 23×22×8 P3: 35×27×20 P4: 31×(26)×18 P5: 23×21×11 P6: (23)×45×15 P7: 26×(13)×15 P8: 23×23×11 P9: 32×30×15 P10: 13×13×7 P11: 29×27×16	73×61×25	縄文中期 後葉	なし	N50°W 1.0° 0.0°
SB03 第14区	I S19-24	長楕円形	422	(282)	25	4層	(9.05)	N31°W	P1: 44×44×21 P2: 56×45×33 P3: 40×40×19 P4: 41×36×21 P5: 37×(25)×13 P6: 26×(25)×12 P7: 26×24×6 P8: 24×22×23 P9: 20×18×9 P10: 22×22×13	(102)×52×4	縄文後期 中葉	SB04(古)	N61°E 0.5° N28°W 1.5°
SB04 第15区	I S19-24	楕円形	423	317	24	3層	(9.73)	N50°E	P1: 50×43×21 P2: 42×32×24 P3: 44×37×31 P4: 49×46×16 P5: 47×38×13 P6: 35×35×15	なし	縄文後期 前葉	SB06(古) SB03(新)	S54°W 2.5° N37°W 3.8°
SB05 第15区	I S24-25	隅丸方形	(392)	355	28	1層	(10.78)	N38°E	P1: 33×27×15 P2: 33×28×16 P3: 36×33×21 P4: 43×40×25 P5: (44)×(48)×11 P6: 37×(29)×21 P7: 39×37×15 P8: 54×41×11	なし	縄文中期 後葉	SB01・10、 SK02・04・07・ 10(新)	S38°W 1.0° N36°W 1.5°
SB06 第16区	I S24	隅丸長方形	250	201	35	2層	(3.94)	N30°E	P1: 40×(19)×12 P2: 36×27×15 P3: 32×22×18 P4: 36×(23)×17	98×58×20	縄文後期 前葉	SB04、SK05 (新)	N39°W 5.6° S30°W 4.5°

遺構名 ・ 図番号	位置	形状	長軸 cm	短軸 cm	深さ cm	埋土 の 埋積	面積 ㎡	主軸 方位	P1の規模		伊藤の規模 長軸×短軸×深さ cm	時期	重複関係	床面の傾き 長軸 短軸
									長軸×短軸×深さ cm	P2の規模				
SD07 第17図	1 X04	不整形形	(200)	(262)	46	1層	(394)	N122°E	P1: 41×34×41 P2: (38)×51×24 P3: 30×23×12 P4: 33×26×15	なし	縄文中期 後葉	SB08 (古) SK12・13 (新)	N52°W 0.2° N35°E 0.8°	
SD08 第17図	1 X04-09	不整形形	(160)	(194)	26	1層	(279)	N02°W	P1: 32×27×14 P2: 36×25×17 P3: (64)×(50)×20 P4: 41×(21)×26 P5: 34×24×13 P6: 32×28×9	なし	縄文中期 後葉	SB07 (新)	N35°E 0.8° N54°W 1.3°	
SD09 第18図	1 X04	楕円形	(241)	215	34	2層	(418)	N151°W	P1: 40×34×34 P2: 40×34×17 P3: 42×34×26 P4: 52×32×26	124°×83°21	縄文後期 前葉	SB10 (古)	N61°W 1.9° S32°W 0.8°	
SB10 第18図	1 S24-25 1 X04-05	楕丸長方形	(444)	(258)	27	1層	(648)	N60°E	P1: 34×(28)×28 P2: 48×(22)×13 P3: 48×29×18 P4: 34×31×20	なし	縄文後期 前葉	SB05 (古) SB09 (新)	S60°W 1.2° N31°W 0.4°	

*計面積の()は残存値、()は推定値。重複関係の(古)は古い遺構、(新)は新しい遺構。

第11表 川原遺跡 遺物集中一覧

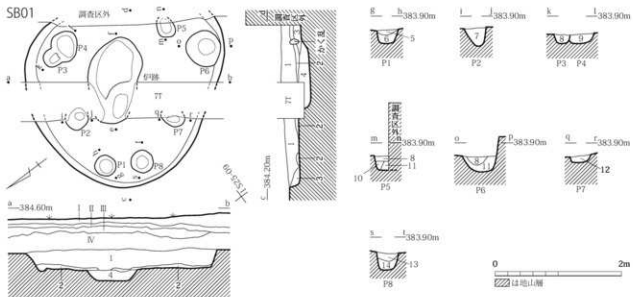
遺構名 ・ 図番号	位置	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	埋土 の 埋積	面積 ㎡	主軸 方位	下面標高 m	時期	重複関係	主な出土遺物	備考
SH01 第19図	1 X04-09	約800	約150	約20	1層	-	N11°E	約383.2 ～383.4	縄文中期後葉 ～後期前葉	SB07・08 (古)	土器片、石鏃、u.FI、横刃 形石器、鍬石、石鏝、石杖、 銅片、砕片	北より南西に 約27°の角度で 弧状に集積

*重複関係の(古)は古い遺構。

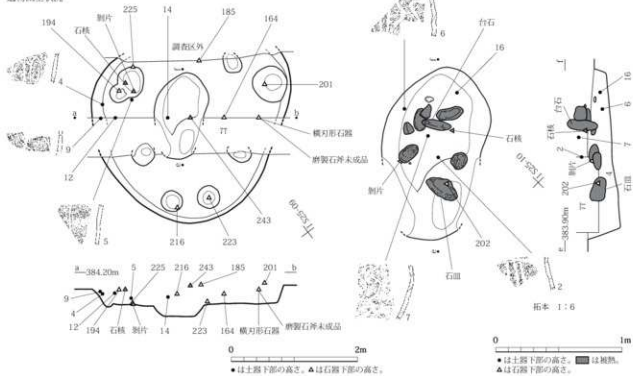
第12表 川原遺跡 土坑一覧

遺構名 ・ 図番号	グリッド	平面形状	断面形状	長軸 cm	短軸 cm	深さ cm	埋土 の 埋積	面積 ㎡	主軸 方位	底面標高 m	時期	重複関係	主な出土遺物
SK01 第20図	1 S24	楕円形	皿状	284	209	16	2層	4.03	N56°E	383.47	縄文後期 前葉	なし	u.FI、横刃形石 器、石鏝、銅片、 砕片
SK02 第20図	1 S24-25	長楕円形	タライ状	(238)	145	25	2層	(2.34)	N51°W	383.65	縄文中期 後葉	SB05、SK10 (古) SB01、SK04 (新)	削器、u.FI、打 製石斧、横刃形 石器、石鏃、石 杖、銅片、砕片
SK04 第20図	1 S25	円形?	タライ状	(測定不能)	(測定不能)	35	2層	0.30	(不明)	383.68	縄文後期 初葉	SB05、SK02 (古) SB01 (新)	石製品、銅片
SK05 第20図	1 S24	楕円形	タライ状	128	(106)	18	1層	(0.89)	N30°E	383.20	縄文後期 前葉	SB06 (古)	
SK07 第20図	1 S25	円形	円筒状	31	30	32	1層	0.02	なし	383.51	縄文後期 前葉	SB05 (古)	石鏃
SK08 第20図	1 S24	円形	皿状	172	(150)	10	1層	(1.78)	N37°E	383.57	縄文後期 前葉	なし	石鏃、横刃形石 器、銅片、砕片
SK10 第20図	1 S24-25	長楕円形	タライ状	226	(85)	22	2層	(1.46)	N49°W	383.60	縄文中期 後葉	SB05 (古) SK02 (新)	銅片
SK11 第20図	1 S25	円形?	タライ状	(測定不能)	(測定不能)	30	1層	(0.18)	(不明)	383.59	縄文後期 初葉	SB05、SK02 (古) SB01 (新)	
SK12 第21図	1 X04	楕円形?	段差を持つ タライ状	(測定不能)	(測定不能)	(24)	1層	(測定不能)	N32°E?	383.39	縄文中期 後葉	SB07 (古) SK13 (新)	横刃形石器、鍬 石、銅片
SK13 第21図	1 X04	楕円形?	段差を持つ タライ状	(98)	(77)	(31)	1層	(0.56)?	N40°E	383.44	縄文中期 後葉	SB07、SK12 (古)	石鏝、白石

*計面積の()は残存値、()は推定値。重複関係の(古)は古い遺構、(新)は新しい遺構。S K 03、06、09欠番。

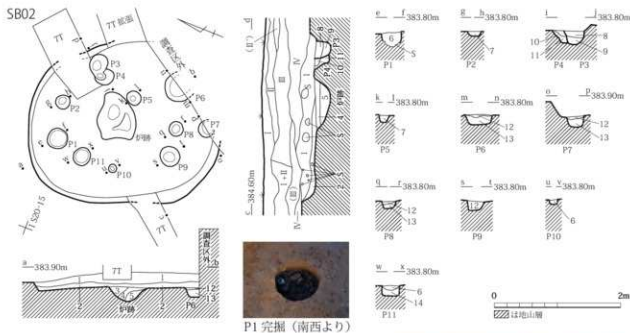


遺物出土状況

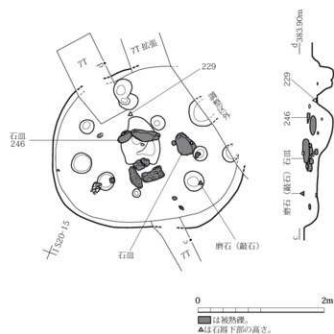


- 1 オリーブ褐色(Hue2.5Y4/4) 砂粘土質シルト、粘性やや強い、しまり良い、暗褐色(Hue10YR3/3)砂粘土質シルト、帯状およびブロック状に20~30%混。北東隅、オリーブ褐色(Hue2.5Y4/4)極細粒砂、多量に混。φ1mm以下炭化物粒、焼土粒1%以下混。1層より粘性あり。
- 2 オリーブ褐色(Hue2.5Y4/4) 砂粘土質シルト、粘性やや強い、しまり良い、暗褐色(Hue10YR3/3)砂粘土質シルト、ブロックに30~40%混。1層より粘性あり。
- 3 オリーブ褐色(Hue2.5Y4/4) 砂粘土質シルト、極細粒砂、粘性弱い、しまり普通。暗褐色(Hue10YR3/3)砂粘土質シルト1%以下混。
- 4 オリーブ褐色(Hue2.5Y4/4) 砂質シルト、粘性強い、しまり悪い、暗褐色(Hue10YR3/3)砂粘土質シルト、ブロック状に10%混。
- 5 オリーブ褐色(Hue2.5Y4/4) 砂粘土質シルト、粘性やや強い、しまり良い、黄褐色(Hue2.5Y5/4)砂質シルト30~40%混。
- 6 オリーブ褐色(Hue2.5Y4/4) 砂質シルト、砂質強、粘性やや弱い、しまり良い、2~3mm大の炭化物粒2%混。
- 7 オリーブ褐色(Hue2.5Y4/3) 砂質シルト、粘性やや強い、しまり普通。上~中層にかけて暗褐色(Hue10YR3/3)砂粘土質シルト、帯状およびブロック状に10~20%混。
- 8 オリーブ褐色(Hue2.5Y4/3) 砂質シルト、粘性弱い、しまりやや悪い、暗褐色(Hue10YR3/3)砂粘土質シルト、ブロック状に下層中心に10%混。
- 9 オリーブ褐色(Hue2.5Y4/3) 砂質シルト、粘性弱い、しまりやや悪い、暗褐色(Hue10YR3/3)砂粘土質シルト、ブロック状に下層中心に20%混。
- 10 オリーブ褐色(Hue2.5Y4/3) 8層に類似するが、8層より粘性増し、全体に混入物10%。
- 11 オリーブ褐色(Hue2.5Y4/3) 8層に類似するが、8層より粘性増し、全体に混入物20%。
- 12 オリーブ褐色(Hue2.5Y4/3) 砂質シルト、粘性やや弱い、しまり良い、暗褐色(Hue10YR3/3)砂粘土質シルト、ブロック状に10%混。炭化物粒1%以下混。土器片出土。
- 13 オリーブ褐色(Hue2.5Y4/3) 砂粘土質シルト、粘性やや強い、しまり良い、粘性やや強い、暗褐色(Hue10YR3/3)砂粘土質シルト、ブロック状に10%混。石鐘出土。
- 14 オリーブ褐色(Hue2.5Y4/4) 砂粘土質シルト、粘性強い、しまり良い、2~3mm大の炭化物粒2%混。

第12図 SB01 遺構図



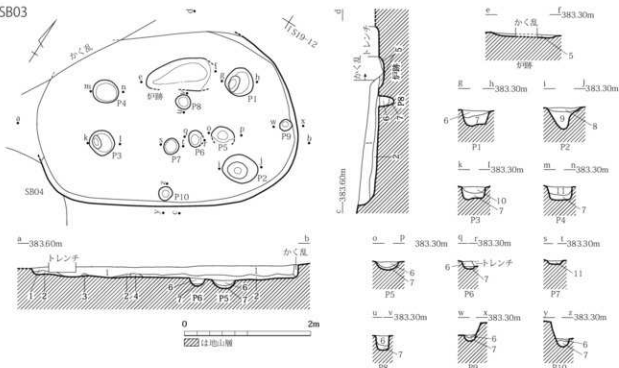
遺物出土状況



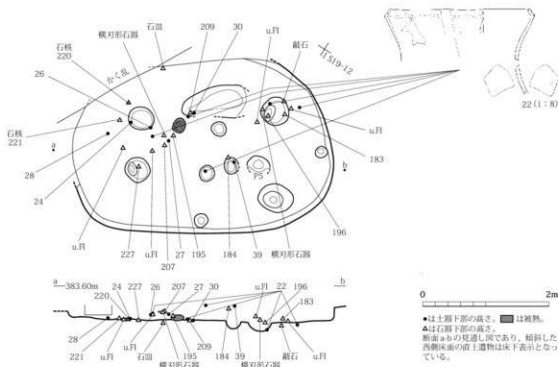
- 1 オリーブ褐色(Hue2.5Y4/3) 砂粘土質シルト、粘性やや強い、しまり良い、にぶい黄色(Hue2.5YR6/3)極細粒砂ブロック状に20%混。
- 2 オリーブ褐色(Hue2.5Y4/3) 砂粘土質シルト、粘性やや強い、しまり良い、1層より砂質強く砂質シルトに近くなる。色調やや黄色味を帯びる。
- 3 灰黄褐色(Hue10Y4/2) 砂粘土質シルト、粘性やや強い、しまり良い、2mm大の炭化物粒2%混。全体に茶色味となる。
- 4 オリーブ褐色(Hue2.5Y4/4) 砂粘土質シルト、粘性やや強い、しまり良い、上層に炭化物が面的に広がる。2~3mm大の炭化物粒3%混。
- 5 オリーブ褐色(Hue2.5Y4/3) 砂粘土質シルト、粘性やや強い、しまり普通。3、4層に比べ砂質強い、炭化物、炭化物粒2~3%混。
- 6 オリーブ褐色(Hue2.5Y4/3) 砂粘土質シルト、粘性やや強い、しまり良い、2mm大の炭化物粒1%以下混。
- 7 オリーブ褐色(Hue2.5Y4/4) 砂質シルト、粘性やや強い、しまり良い、6層よりやや黄色味を帯びた色調となる。東側壁際に炭化物20%混(層に溶け込む状態)。
- 8 オリーブ褐色(Hue2.5Y4/4) 砂粘土質シルト、粘性やや強い、しまり普通、1mm以下の雲母粒2%混。
- 9 オリーブ褐色(Hue2.5Y3/3) 砂質シルト、粘性強い、しまり良い、炭化物溶け込む状態で10%混。1mm以下の雲母粒5%混、2mm大の炭化物粒1%以下混。
- 10 オリーブ褐色(Hue2.5Y4/4) 砂粘土質シルト、粘性やや弱い、しまり普通。8層に類似するが色調やや黄色味を帯び、砂質強い、1mm以下の雲母粒7%混。炭化物溶け込む状態で3%混。
- 11 オリーブ褐色(Hue2.5Y4/3) 砂粘土質シルト、粘性やや強い、しまり良い、炭化物溶け込む状態で10%混。2mm大の炭化物粒1%以下混。
- 12 オリーブ褐色(Hue2.5Y4/4) 砂粘土質シルト、粘性やや強い、しまり良い、砂質シルト、粘性やや弱い、砂質やや強く、混入物少。
- 13 オリーブ褐色(Hue2.5Y4/3) 砂粘土質シルト、粘性強い、しまり良い、暗褐色(Hue10YR3/3)砂粘土質シルトブロック状0%混。
- 14 暗オリーブ褐色(Hue2.5Y3/3) 砂粘土質シルト、粘性強い、しまり良い、暗褐色(Hue10YR3/3)砂粘土質シルトブロック状に20%混。Pitの他層より黒味を帯びる。

第13図 SB02 遺構図

SB03



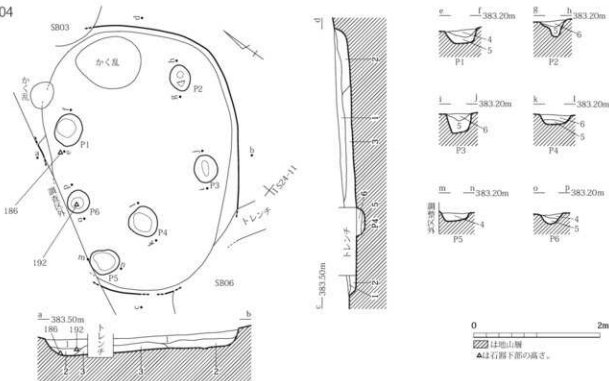
遺物出土状況



- 1 オリーブ褐色(Hue2.5Y4/4) 砂質シルト、粘性弱い、しまりやや良い、2~5mm厚のぶい、黄褐色(Hue10YR4/3)粘土質シルト、2~5条の帯状に上層中心に混。炭化物混。
- 2 オリーブ褐色(Hue2.5Y4/3) 砂粘土質シルト、粘性普通、しまり普通、ぶい、黄褐色(Hue10YR4/3)粘土質シルト、ブロック状に5%混。
- 3 黄褐色(Hue2.5Y5/4) 粘土質シルト、粘性やや強い、しまり良い、灰黄色(Hue2.5Y7/2)粘土質シルト30%混。
- 4 ぶい、黄褐色(Hue10Y4/3) 粘土質シルト、粘性やや強い、しまりやや良い、オリーブ褐色(Hue2.5Y4/3)極細粒砂、ブロック状に30%混。
- 5 オリーブ褐色(Hue2.5Y4/4) 砂粘土質シルト、粘性やや強い、しまり良い、灰褐色(Hue10YR4/2)砂粘土質シルト(焼熟土)、ブロック状に20%混。1mm以上の炭化物粒、焼土粒1%以下混。
- 6 黄褐色(Hue2.5Y5/4) 極細粒砂、粘性弱い、しまり悪い、暗褐色(Hue10YR3/4)砂粘土質シルト、ブロック状に7%混。
- 7 オリーブ褐色(Hue2.5Y4/3) 砂質シルト、粘性やや強い、しまりやや良い、暗褐色(Hue10YR3/4)砂粘土質シルト、ブロック状(一部帯状)に20%混。
- 8 黄褐色(Hue2.5Y5/4) 砂質シルト、粘性やや強い、しまり普通、暗褐色(Hue10YR3/4)砂粘土質シルト、ブロック状に5%混。
- 9 オリーブ褐色(Hue2.5Y4/4) 砂質シルト、粘性やや強い、しまり良い、暗褐色(Hue10YR3/4)砂粘土質シルト、上層にブロック状に3%混。
- 10 黄褐色(Hue2.5Y5/4) 極細粒砂、粘性強い、しまり悪い、暗褐色(Hue10YR3/4)砂粘土質シルト、ブロック状に7%混。1mm以上の炭化物粒1%以下混。
- 11 黄褐色(Hue2.5Y5/4) 砂質シルト、粘性やや強い、しまり良い、暗褐色(Hue10YR3/4)砂粘土質シルト、ブロック状に7%混。

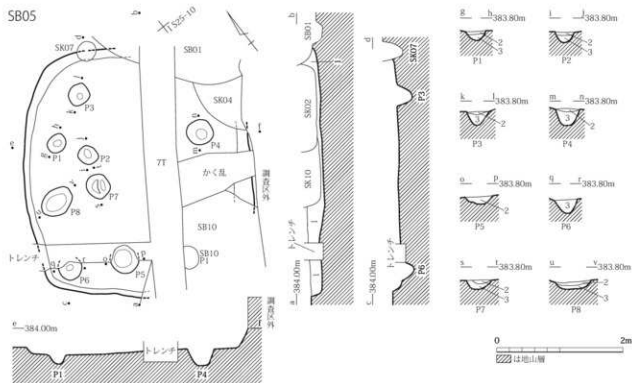
第14図 SB03 遺構図

SB04



- 1 オリーブ褐色(Hue 2.5Y4/3) 砂粘土質シルト、粘性やや強い、しまりやや悪い、暗褐色(Hue 10YR3/3)砂粘土質シルト、ブロック状に、帯状に20%混。砂粘土質シルト、粘性やや強い、しまりやや良い、暗褐色(Hue 10YR3/3)砂粘土質シルト、ブロック状に10%混。
- 2 オリーブ褐色(Hue 2.5Y4/4) 極細粒砂、粘性弱い、しまり悪い、部分的(北西側)に、暗褐色(Hue 10YR3/3)砂粘土質シルトブロック5%混。
- 3 オリーブ褐色(Hue 2.5Y4/4) 極細粒砂、粘性弱い、しまり悪い、暗褐色(Hue 10YR3/3)砂粘土質シルト、ブロック状に2%混。1mm大の炭化物粒1%混。
- 4 オリーブ褐色(Hue 2.5Y4/3) 砂質シルト、粘性やや強い、しまり普通、暗褐色(Hue 10YR3/3)砂粘土質シルト、ブロック状に10%混。
- 5 オリーブ褐色(Hue 2.5Y3/3) 砂質シルト、粘性やや強い、しまり普通、暗褐色(Hue 10YR3/3)砂粘土質シルト、ブロック状に3%混。
- 6 オリーブ褐色(Hue 2.5Y4/3)

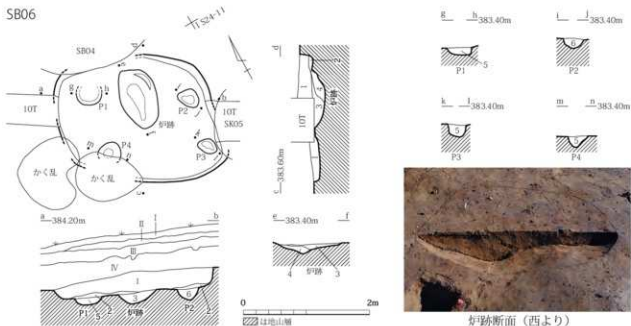
SB05



- 1 オリーブ褐色(Hue 2.5Y4/3) 砂粘土質シルト、粘性やや強い、しまり悪い、黄褐色(Hue 2.5Y5/4)極細粒砂、暗褐色(Hue 10YR3/3)砂粘土質シルト、ブロック状に、層状に30%混。2~3mm大の炭化物粒1%混。
- 2 オリーブ褐色(Hue 2.5Y4/6) 砂質シルト、粘性やや強い、しまりやや良い、暗褐色(Hue 10YR3/3)砂粘土質シルト、ブロック状に5~10%混。1mm大の炭化物粒1%以下混。
- 3 オリーブ褐色(Hue 2.5Y4/4) 砂粘土質シルト、粘性やや強い、しまり良い、暗褐色(Hue 10YR3/3)砂粘土質シルト、ブロック状に5~10%混。1mm大の炭化物粒1%混。

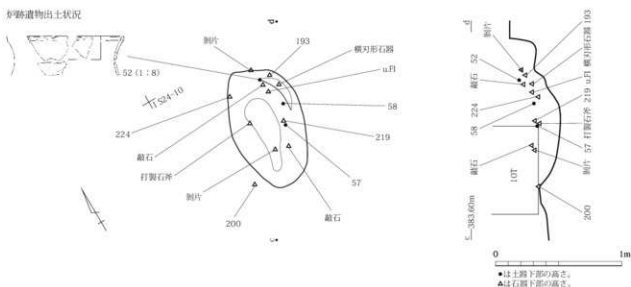
第15図 SB04.05 遺構図

SB06



- 1 オリーブ褐色(Hue2.5Y4/4) 砂粘土質シルト(やや砂質が強い)、粘性やや弱い、しまり良い、オリーブ褐色(Hue2.5Y4/6)砂粘土質シルト、50mm大以上のブロック状に20%混、5mm大程度の炭化物粒が1%混。
- 2 オリーブ褐色(Hue2.5Y4/4) 砂質シルト、粘性弱い、しまりやや良い、5mm大程度の炭化物が1%混。
- 3 オリーブ褐色(Hue2.5Y4/4) 砂粘土質シルト、粘性弱い、しまり良い、にぶい黄褐色(Hue10YR4/3) 砂粘土質シルト、50mm大のブロック状に1%混(壁際)、暗褐色(Hue10YR7.5YR3/4)焼土粒1%混。
- 4 オリーブ褐色(Hue2.5Y4/6) 砂質シルト、粘性弱い、しまりやや悪い、褐色(Hue10YR4/6)砂質シルト、珪ら状に10%混(焼土粒?)。
- 5 オリーブ褐色(Hue2.5Y4/3) 極細粒砂、粘性弱い、しまりやや悪い、褐色(Hue10YR4/6)細粒砂、全体に珪ら状に薄く混。
- 6 オリーブ褐色(Hue2.5Y4/3) 極細粒砂、粘性弱い、しまり悪い、褐色(Hue10YR4/6)細粒砂、上層中心に層状に薄く混、オリーブ褐色(Hue2.5Y4/4)極細粒砂、壁際〜下層中心に堆積。

お跡遺物出土状況



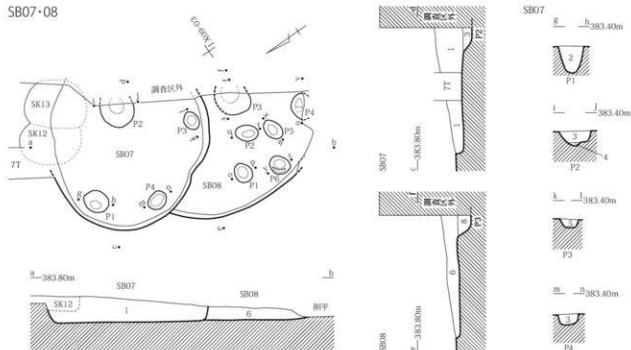
10T 断面中の SB06(南西より)



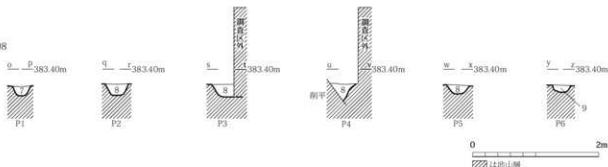
遺物出土状況(西より)

第16図 SB06 遺構図

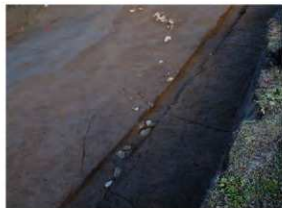
SB07・08



SB08



- 1 オリーブ褐色(Hue2.5Y4/6) 砂粘土質シルト、粘性やや弱い、しまり良い、下部は上部に比べやや砂質が強い、オリーブ褐色(Hue2.5Y4/4)砂粘土質シルト、30～70mm大のブロック状に10%混、上部に多い、5mm大程の炭化物粒1%混。
- 2 オリーブ褐色(Hue2.5Y4/6) 砂粘土質シルト、粘性弱い、しまり良い、5mm大以下の炭化物粒3%混。
- 3 オリーブ褐色(Hue2.5Y4/3) 砂質シルト、粘性弱い、しまりやや悪い、黄褐色(Hue2.5Y5/4)砂粘土質シルト、50mm大のブロックで5%混。
- 4 黄褐色(Hue2.5Y5/4) 砂粘土質シルト、粘性弱い、しまり悪い。
- 5 オリーブ褐色(Hue2.5Y4/3) 砂粘土質シルト、粘性強い、しまり悪い、オリーブ褐色(Hue2.5Y4/6)砂質シルト、50mm大程のブロック状に20%混、特に南側ベルト付近に多く混(30～40%)、10～30mmの炭化物粒3%混。
- 6 暗オリーブ褐色(Hue2.5Y3/3) 砂粘土質シルト、粘性やや弱い、しまり悪い、底面から10～30mm大の礫出土。
- 7 暗オリーブ褐色(Hue2.5Y3/3) 砂粘土質シルト、粘性やや弱い、しまり悪い、底面から10～30mm大の礫出土、10mm以下の土器片混。
- 8 オリーブ褐色(Hue2.5Y4/4) 砂粘土質シルト、粘性強い、しまり良い、暗オリーブ褐色(Hue2.5Y3/3)砂粘土質シルト、ブロック状に10～30mm大で3%混。



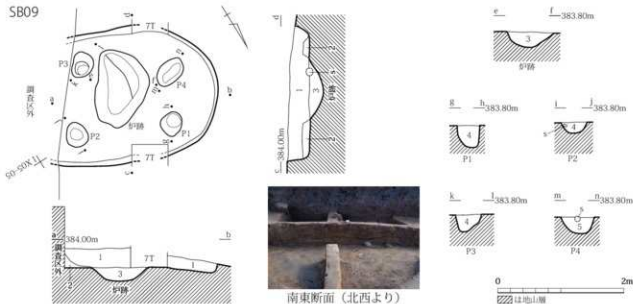
SB07・08 検出状況(南より)



SB07・08 北東断面(南西より)

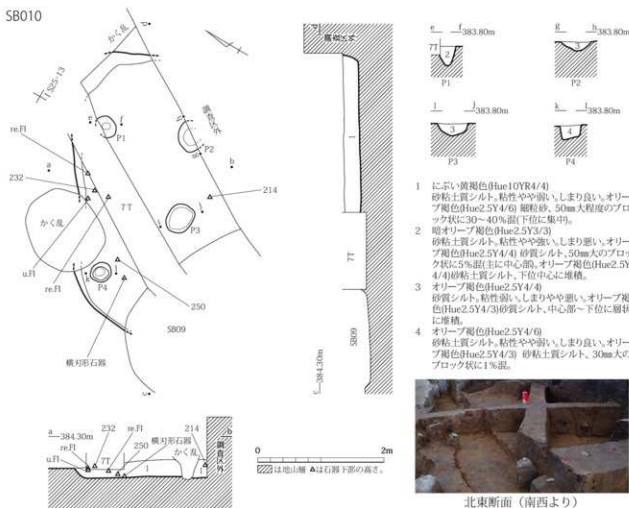
第17図 SB07・08 遺構図

SB09



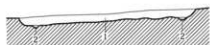
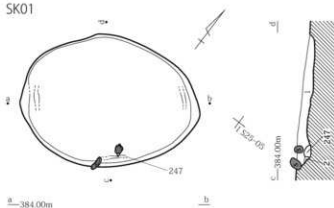
- 1 暗褐色(Hue10YR3/4) 砂粘土質シルト、粘性やや弱い、しまり良い、オリーブ褐色(Hue2.5Y4/6)砂質シルト、ブロック状に30~40%混(下位に多い)。下層(特に砂跡上面)、10~30mm程度の焼土粒、ブロック状に10%混。
- 2 オリーブ褐色(Hue2.5Y4/6) 砂粘土質シルト、粘性やや弱い、しまりやや悪い、暗褐色(Hue10YR3/4)砂質シルト、部分的に含、褐色(Hue10YR4/6)砂質シルト焼土、30mm大程度のブロック状に5~10%混。
- 3 オリーブ褐色(Hue2.5Y4/3) 砂質シルト、粘性弱い、しまりやや悪い、褐色(Hue10YR4/4) 焼土粒、5mm以下の粒状に3%混。
- 4 オリーブ褐色(Hue2.5Y4/3) 砂質シルト、粘性弱い、しまりやや悪い、やや赤味が強い、砂質シルト、30~50mm大のブロック状に5%混(上位に集中)。
- 5 オリーブ褐色(Hue2.5Y4/4) 砂粘土質シルト、粘性やや弱い、しまり良い、オリーブ褐色(Hue2.5Y4/6)砂質シルト、50mm大のブロック状に20%混。

SB010



第18図 SB09, 10 遺構図

SK01

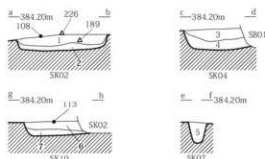
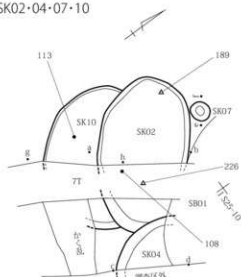


- 1 オリーブ褐色(Hue2.5Y4/4) 砂質シルト、粘性やや強い、しまり良い、暗褐色(Hue10YR3/4)粘土質シルト、10mm厚で層状に10~20%混。
- 2 オリーブ褐色(Hue2.5Y4/3) 砂粘土質シルト、粘性やや強い、しまり良い、1層より色調暗く、粘性やや強い。

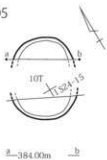


SK02 出土石錘 (226) (北西より)

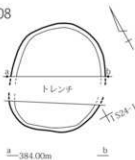
SK02・04・07・10



SK05



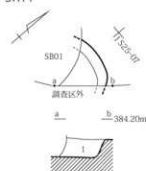
SK08



SK05・08

- 1 オリーブ褐色(Hue2.5Y4/4) 砂粘土質シルト、粘性弱い、しまり良い、黄褐色(Hue2.5Y5/4)細粒砂、50%混。

SK11



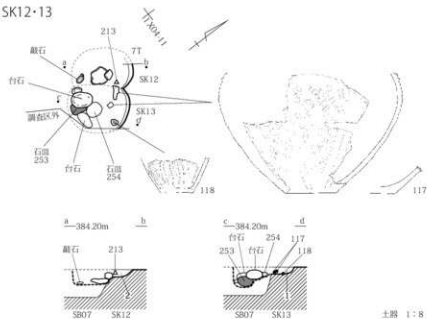
- 1 オリーブ褐色(Hue2.5Y4/4) 砂質シルト、粘性やや弱い、しまり普通、暗褐色粘土質シルト、ブロック状に10~15% (SB01層に多い)、2~3mm大の炭化物粒1%混。

SK02・04・07・10

- 1 暗オリーブ褐色(Hue2.5Y3/3) 砂粘土質シルト、粘性やや強い、しまり良い、暗褐色 (Hue10YR3/4) 粘土質シルト、層状に一部ブロック状に30~40%混。
- 2 オリーブ褐色(Hue2.5Y4/3) 砂質シルト、ブロック状に20~30%混。
- 3 暗オリーブ褐色(Hue2.5Y3/3) 砂質シルト、粘性やや強い、しまりやや良い、暗褐色(Hue10YR3/4) 砂粘土質シルト、ブロック状に40%混。
- 4 オリーブ褐色(Hue2.5Y4/3) 極細粒砂、粘性やや弱い、しまり普通、暗褐色(Hue10YR3/4) 砂粘土質シルト、ブロック状に20%混。
- 5 オリーブ褐色(Hue2.5Y4/4) 砂質シルト、粘性やや弱い、しまり良い、暗褐色 (Hue10YR3/4) 砂粘土質シルト、10~20mm厚の層状に20%混(中~下位に多い)、西側上層40mm、黄褐色(Hue2.5Y5/4)極細粒砂、混入多い。
- 6 オリーブ褐色(Hue2.5Y4/4) 砂質シルト、粘性やや強い、しまり普通、黄褐色(Hue2.5Y5/4) 極細粒砂、層状に20%混、暗褐色 (Hue10YR3/4) 砂粘土質シルト、層状、ブロック状に20%混。
- 7 オリーブ褐色(Hue2.5Y4/4) 砂質シルト、粘性弱い、しまり悪い、1層に比べ砂質強い、暗褐色砂粘土質シルトの混入減り、黄褐色極細粒砂30~40%混。

第20図 SK01~11 遺構図 (SK03,06,09欠番)

SK12・13



第21図 SK12・13 遺構図



SK12・13 遺物出土状況（西より）

SK12・13

- 1 オリーブ褐色(Hue2.5Y4/4)
砂質シルト、粘性やや弱い、しまり普通。
黄褐色(Hue2.5Y5/4)極細粒砂、層状に
20%、暗褐色(Hue10YR3/3)砂粘土質
シルト、層状、ブロック状に20%混。
- 2 オリーブ褐色(Hue2.5Y4/3)
砂質シルト、粘性やや強い、しまり良い。
暗褐色(Hue10YR3/4)砂粘土質シルト、
ブロック状に20～30%混。



第3節 遺物

1 遺物の概要

出土遺物は、縄文時代の堅穴建物跡出土の縄文土器が多くを占める。ただ破片資料が多く、全体形がわかる資料は少量である。また、過去の調査で多くの建物跡が発見された弥生時代の遺物として、中期の甕破片(第38図1)1点、磨製石鎌1点(第38図2)を図示した。古代、中世以降の遺物も出土しているが、出土量は少ない。

出土土器の量的把握として、時代別破片数・重量を計測した結果、総量3,997点(30,317g)に対して、縄文土器3,724点(28,769g)、弥生土器158点(919g)、古代土器5点(19g)、中・近世陶磁器ほか63点(272g)、近・現代陶磁器47点(338g)であった¹。上記のとおり、遺構を検出した縄文時代の遺物が最も多く、出土遺物の大半を占める(第13表)。

縄文時代の石器・石片類は853点であり、石器は350点、そのほかの石片類が503点(石核8点、剥片406点、砕片89点)となった(第14表)。そのほか、弥生時代の磨製石鎌および未成品が3点出土した。

時代ごとに項を設け、材質ごとに出土遺物の特徴を説明する。なお、石器1点1点の計測値等の詳細については「石器観察表」に示し、「土器観察表」およびそのほかの報告書非掲載遺物の詳細とともに添付DVDに収録した。

2 縄文時代の遺物

(1) 土器(第23～29図、PL12～18)

縄文土器は、破片資料がほとんどであり、器形を一部復元できたものは10点に満たない。器形は深鉢が基本となり、鉢、浅鉢、壺、注口土器および器台等がそれに加わる。

出土土器の時期区分は、文様、器面調整、胎土、出土位置等をもとに、以下のとおりとした。

中期後葉：下伊那唐草文土器Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ段階(唐草文系土器、加曾利E式系土器、下伊那Bタイプ土器)

後期初頭：称名寺式土器

後期前葉：堀之内Ⅰ式土器²

後期中葉：観塚Ⅲ式土器、加曾利B式土器

中期後葉から後期中葉まで、途中で空白期をはきんで、それぞれの時期の土器が少量ずつ出土した。その内訳は、中期後葉463点(8,919g)、後期初頭169点(1,821g)、後期前葉1,735点(12,588g)、後期中葉249点(2,340g)である(第13表)。時期ごとの遺物の出土量は遺構数と一致し、堅穴建物跡を中心に後期前葉の土器の出土量が最も多い。複数時期にわたって捨て場となっていた遺物集中(SH01)南側では、中期後葉の土器が目立つ。

なお、実測や写真撮影を行った土器は、遺構および時期ごとに特徴的な資料を163点選定し、原則として、調査時に認定した遺構ごとに提示した³。一方、報告書非掲載の小破片は、「有文」「無文」「不明」

1 数量の単位として「点」を使用した。すべての破片について接合関係、同一個体である確認ができたわけではなく、あくまでも概数であり目安とする値である。

2 長野県内における堀之内Ⅰ式期の土器については、栄村ひんご遺跡のSB26・28出土の一括資料を標式とする「ひんごⅠ式」が提唱された(長野県埋文センター2018)。本遺跡の当該期の資料は小破片が多く、「ひんごⅠ式」との比較検討が十分にできなかったため、従来の名称を用いた。

3 土器について、複数の破片が接合した資料で器形復元が困難なものは、すべての拓本を示さず、その土器の特徴を示す破片を選び、1～数片のみを土器図版で提示したこともある。

第 13 表 川原遺跡 土器破片数・重量集計表

遺構名	時代・時期		縄文時代										不明	小計	合計 破片数 重量 (g)
	中期後葉		後期前期		後期中葉		後期後葉		無文		有文				
	破片数 (点)	重量 (g)	破片数 (点)	重量 (g)	破片数 (点)	重量 (g)	破片数 (点)	重量 (g)	破片数 (点)	重量 (g)	破片数 (点)	重量 (g)			
SB01	21	25	1	39	42								184	123	1,233.8
SB02	2	9		780.7	37.9	6	11						20	48	50
SB03	2	52.0				35.0	34.9						29.9	181.1	183.3
SB04	2	45.7		28.9	16.9	197.5				86	137	5		310	311
SB05	23	23.0		249.1	493.0	72	2			1,203.0	983.0	13.8		160	2,573.4
SB06	6	21				71.1	10.3						7	69	70
SB07	399	183.0				73	10.6						35	222	59.5
SB08	33.5	7.1				424.2	11.94	9.2					77.9	167.3	167.3
SB09	58	17	36			11.1							24	136	136
SB10	10	17	124.8										11	38	38
SB11	36	3											10.9	180.5	180.5
SB12	898.7	42.5				33	86	6					75	239	239
SB13	79	3				292.0	57.98	16.7					69.5	1,892.2	1,892.2
SB14	3					18	100	4.7					17	141	141
SB15	68	4	12	35		57	133	4					117	1,143	1,141
SB16	2,304.9	70.2	22.5	1,301.6	6.3								202.3	5,129.8	80.5
SK01	8	17				9	15	2					8	34	34
SK02	147.2	173.1				3	3	1					30	53	53
SK03	2	1				7.3	34.2	11.4	2.9				29.8	406.0	406.0
SK04	8.8					196.6	114.2	6.0					4	34	34
SK05	21.6					61	1.9	1					0.7	30.2	30.2
SK06	2					7.7	2.9							106	106
SK07	30.9					10.8	78.8						5	18	18
SK08	6	11											8	25	25
SK09	125.1	83.0											11.4	219.5	219.5
SK10	1					34.7	5.1						3	3	3
SK11	6.8												39.8	39.8	39.8
SK12	29	6	4										1	6.1	6.1
SK13	2,643.2	22.7	6.5										1	40	40
遺構外	37	18	1			15	16	205	600	18	5	15	1	563	1,562
埋没土器	597.7	174.1	5.5			163.1	95.2	1,679.8	4,996.8	41.0	48.1	107.3	4.7	178.5	47.5
埋没土器合計	27.5	134	54			95	74	442	1,251	42	91	152	6	77.5	798.3
破片数合計	7,645.6	1,110.3	163.3			1,217.6	603.3	3,082.7	8,810.3	95.1	1,251.1	1,070.3	18.5	178.5	1,064
重量合計	891.92	1,201.6	35			169	17.38			249	9	2,339.9	26.9	12,583.1	3,274
						1,829.9				2,339.9		2,339.9		2,339.9	915.5
															1,350
															3,360
															3,360

に分類して、時期ごとに破片数をカウントし、計量を行い、実測土器の計量値と合わせて一覧表とした（第13表）。

① 遺構出土土器（第23～27図、PL12～16）

S B 01（第23図1～18、PL12）

後期初頭の土器が101点（1,159g）と最も多い（第13表）。

4、5は、細めの棒状工具による縦位区画および懸垂沈線文が施文される。2、3は類似するが、2は胎土が緻密、色調が橙色で東海系の雰囲気を持つ。また、9は細い茎状工具による沈線文を持ち、雨垂れ状短沈線文を施す10と細い工具を使用した点が共通する。6、7は蛇行懸垂沈線文を施文し、8と胎土が類似する。胴部以外では、円形連続刺突文を持つ口縁部1、北東埋土出土の底部破片18がある。14～16は、同一個体の鉢である。地文のLR縦縄文¹に1条の結節縦縄文が施文されている。そのほか、11、12のように節が細かいLR斜縄文または横縄文を地文とする磨消縄文土器、13の櫛歯状工具による斜行沈線文土器、17の雨垂れ状連続短沈線文土器が出土した。

図示した土器は、後期初頭称名寺式の末頃に位置づけられる。

S B 02（第23図19～21、PL12）

土器は少量の出土で、検出面からは後期前葉の土器片も出土しているが、主体は中期後葉の土器11点（81g）である（第13表）。

19は、LR斜縄文および縦縄文に棒状工具による沈線文が施されている。20も類似する土器片であり、加曾利E3式系である。21は折返し口縁の鉢である。

下伊那唐草文Ⅲ段階新相に位置づけられる。

S B 03（第23図22～35・第25図36～40、PL12）

後期中葉の土器228点（2,180g）が床面およびやや上層を中心に出土している（第13表）。

22は同一個体と考えられる土器片11点が出土し、6点が接合した。「く」の字屈曲の口縁部に横走沈線文と、下方からの連続刻み²を施した貼付横走隆帯文が巡り、胴部は緩いソロバン玉形の深鉢である。色調が黄褐色で、内外面に巻貝条痕の模倣と考えられるヘラ状工具による、ケズリ様のヨコミガキが施文される。後期中葉の東海地方の観塚Ⅲ式³に比定される。飯田市中村中平遺跡に、破片の類似例が出土している（百瀬2011）。口縁部が「く」の字に屈曲する深鉢は、ほかに23、24があり、加曾利B2式・B3式に比定される。また、頸部が屈曲し、胴部がソロバン玉形の鉢となる35も、加曾利B3式に位置づけられよう。ただ、内外面に巻貝条痕の模倣と考えられる凹面を持つ条痕がみられることから、東海地方的要素を持つ。そのほか、後期中葉の土器と考えられるが型式が不明な土器文様には、指頭による浅い横走沈線文（26）、太い横走隆帯に刻み（27、28）、櫛歯状工具による斜条線文1条（34）、無文（25）がある。27と28は同一個体で、ためてやや粗雑な文様を持ち、在地色が強い。底部破片（39、40）のうち、39は白色砂粒を多量に含む胎土で、表面の色調が赤褐色の点から27、28と類似する。29～33、36～38は、沈線文、刺突文、貼付文、LR縄文およびその組合せが施文された後期前葉土器である。

1 LR、RL、R等の縄文に関する摺りの呼称は、山内清男の縄文土器研究の成果による（山内1979）。LR縄文を横位方向に施文した文様を「LR横縄文」、縦位方向に施文した文様を「LR縦縄文」、斜位方向に施文した文様を「LR斜縄文」と呼称した。

2 土器器面の境界部分を意識して連続して印をつけたと考えられる場合は、「刻み」という用語を用いた。棒状工具により、単独および区画文様内を充填する目的で突いた文様については「刺突文」を用いた。

3 「観塚Ⅲ式」は、縄文時代後期中葉の加曾利B3式並行、関西系土器「元住吉山Ⅰ式」の東海地方における在土器である（森川ほか1995）。「観塚第6期」（向坂1968）、「観塚第六型式」、「観塚K2式」（増子1994）に一致する。

本遺構の主体となる土器群は、後期中葉のなかでも加曾利B3式期に位置づけられよう。

SB 04 (第24図41～48, PL13)

後期前葉の土器102点(748g)が、南東埋土および検出面を中心に出土した(第13表)。

41～46と鉢の出土が目立つ。41は、口縁部がやや波状となり、頂部に巻貝または竹管による円形刺突文と横走沈線文を組合せるタイプで、1969年調査の川原遺跡トレンチ出土I類土器(佐藤1983, 1991)に類似資料がみられる。内外面のヨコミガキ調整に巻貝条痕を使用している可能性がある。鉢には、41に類似する口縁部へ直線的に開く器形(42, 45, 46)、胴部が丸く曲線になる器形(43, 44)がある。43は口唇部に連続刻みを持つが、内面の横走沈線文下の貼付文が剥落している。44は貼付縦走隆帯に連続刻みを持つ。46は肥厚した口縁部に短沈線文と横走沈線文の組合せ文様を持つ。47, 48は、胴部に櫛歯状工具の縦位沈線文がみられる。

ほとんどの土器が、堀之内1式に比定されよう。

SB 05 (第24図49～51, PL13)

中期後葉の土器28点(397g)が床面や上層に出土した(第13表)。重複遺構が多いため、遺物量は少ない。検出面等に後期前葉の土器が混入する。

49は、逆「U」字状貼付隆帯懸垂区画内に結節LR縦縄文(結節右側のみ施文)を充填した土器である。50は、隆線区画間に結節LR縦縄文を充填する。51は、推定底径8.2cmの深鉢底部破片である。遺物群は、下伊那唐草文Ⅳ段階古相の時期である。

SB 06 (第24図52～62, PL13)

後期前葉の土器164点(1,553g)が、床面や上層の1層中位を中心に出土した(第13表)。

52, 53は口縁部の横走沈線文端部に円形刺突文を施す。52は器形が一部復元でき、黒褐色を呈す。53は、やや肥厚した口唇部内面にも同様の文様を施す。深鉢にはそのほか、円形刺突文を施した突起(54)、小波状口縁部(55)、指頭痕を残す無文土器(56)、縦位の沈線文(57, 59)、網代痕が残る底部(58)がある。鉢は、「く」の字に内湾する口縁に2条の横走沈線文(60)、1条の沈線文(61)を施文する直線的な器形のもの、貼付懸垂隆帯文を中心に同心円状沈線文が施文された胴部が湾曲するもの(62)がある。

これらは、堀之内1式に位置づけられる土器群である。

SB 07・08 (第24図63～66, PL13)

中期後葉の土器が、SB 07から111点(711g)、SB 08から27点(170g)出土した(第13表)。なお、それぞれの遺構の上層遺物は当初SB 07・08として登録したが、SH 01の遺物に変更した。

SB 07出土土器には、半隆起渦巻文ないしは曲線文と沈線との組合せ区画内に、斜め円形刺突文、密接沈線文を充填する土器(63, 65)、半隆起線が沈線のみになる土器(64)と、区画文の表現に2種がある。そのほか、RL斜縄文に2条の懸垂沈線文を施文した磨消縄文の66がある。

これらは、下伊那唐草文Ⅲ段階新相に位置づけられる。

SB 09 (第25図67～81, PL14)

後期前葉の土器125点(889g)が、床面のやや上層および跡から出土した(第13表)。

出土した深鉢の文様をみると、67は円形刺突文、68はミガキ様の浅い斜条線文、69はLR斜縄文に沈線文および細刺突文、70はRL斜縄文の磨消縄文に不規則な斜行沈線文、71は横走平行沈線間に連続短沈線文である。71に類似する文様では鉢(72)、さらに施文具を竹管に替えた浅鉢(73)がある。浅鉢にはそのほか、口唇部に浅い沈線文がある74と、無文の75がある。混入したと考えられる中期後葉の土器は、下伊那唐草文Ⅲ段階新相のものが多く、折返し口縁の壺(76)、区画内にLR斜縄文を充填する深鉢(77)、RL斜縄文に蛇行沈線文を伴う深鉢(78, 80)、中央に沈線文の入る貼付隆帯懸垂文にまばらな細沈線文

を充填した深鉢(79)、半隆起線による渦巻文および長楕円縦位区画文に斜行沈線文を充填した深鉢(81)がある。

中期後葉の土器には大形破片もみられるが、主体は堀之内1式の時期となる。

SB 10 (第25図82～91, PL14)

後期前葉の土器121点(1,098g)が、床面やや上層から出土した(第13表)。

82は頂部中央に半月形刺突文がある深鉢の円柱形突起である。そのほか深鉢の文様には、刻みのある貼付横走隆帯文(83)、2・3本の横走ないしは斜行沈線文間に短沈線文(84)・L R斜縄文を充填したものの(86)、3本の沈線による縦位区画内にR L横縄文を充填し沈線区画部分を磨り消したもの(85)がある。また、内外面にケズリ痕の残る深鉢87と先端がとがった口縁の鉢88は、粗製土器として位置づけられる。

加曾利E4式系の89、下伊那唐草文Ⅲ段階古相の下伊那Bタイプ土器90、91の3点の中期後葉土器が混入するが、主体は堀之内1式土器である。

SH 01 (第26図92～104, PL15)

中期後葉の土器84点(2,398g)、後期初頭の土器1点(6g)、後期前葉の土器194点(1,315g)が出土した(第13表)。北側からは後期前葉の土器が多く出土し、南側には中期後葉の土器がやや多い。

92、93は半隆起線や2重沈線による大柄な渦巻文および円文、楕円文(胴下半部は沈線化)で区画され、区画内はヘラ状工具による沈線文を充填する。94は楡形土器と考えられ、95、96とともに中期後葉でも下伊那唐草文Ⅱ段階まで遡るものと考えられる。97、98は縦位の区画内に縦位・斜行の沈線文を充填する下伊那Bタイプで、下伊那唐草文Ⅲ段階古相の土器である。99は台付深鉢の脚部で、下伊那唐草文Ⅳ段階古相に位置づけられる。102は竹管による刺突文と沈線区画文を持つ鉢、103は隆帯区画文を持つ鉢である。そのほか、R L横縄文の104が出土している。

SK 01 (第27図105・106, PL16)

後期前葉の土器26点(139g)が埋土中～上層で出土した(第13表)。

105は、3条の沈線区画にL R斜縄文(一部磨消し状)を充填した土器である。106は、口縁部内面に3本の縦短沈線文を施した浅鉢と考えられる。

SK 02 (第27図107・108, PL16)

中期後葉の土器25点(320g)が埋土1層から出土し、数点の後期初頭・前葉の土器が混入する(第13表)。

108は2条の隆帯による区画文にR L結節縄文(結節右側のみ施文)を充填した土器で、下伊那唐草文Ⅳ段階古相に位置づけられる。107はラッパ状の無文の口縁部を持ち、Ⅲ段階新相の深鉢と考えられる。

SK 04 (第27図109～112, PL16)

後期初頭の土器27点(311g)が出土した(第13表)。

109は検出面から出土し、表表面に連続円形刺突文、側面に右下がりの連続刻みを施文した釣手付深鉢の釣手部である。大町市一津遺跡に類似土器がある(鳥田1990)。そのほか、条線文の110、無文の111、全体が磨消し状で極浅い沈線による懸垂区画に羽状縄文を充填した112の深鉢がある。すべて、後期初頭称名寺式期の土器である。

SK 10 (第27図113・114, PL16)

中期後葉の土器17点(208g)が埋土中層～検出面で出土した(第13表)。

113、114は横走隆帯文および渦巻文に、R L結節縄文を左側のみ施文した深鉢である。本遺構出土土器は、結節縄文土器を特徴とする下伊那唐草文Ⅳ段階古相の時期に比定される土器群である。

SK 11 (第27図115・116, PL16)

後期初頭の土器3点(40g)が埋土中～上層で出土した(第13表)。

115は横走沈線文を持つ口縁部破片、116は横「8」の字と2重円弧の沈線文にR L斜縄文が施され、下地に円弧文の描損じが残る。称名寺式に比定される土器と考えられる。

SK 12・13 (第27図117・118、PL16)

中期後葉の土器が、SK 12から1点(7g)、SK 13から39点(2,673g)出土した(第13表)。

117は横走沈線文・半隆起線文下に縦位沈線区画を配し、R L斜縄文を充填した加曾利E 3式系の両耳壺である。118は一部羽矢状であるが、全体に不規則な縦位の細沈線文を施している。双方とも、下伊那唐草文Ⅲ段階新相の時期に位置づけられる。

②遺構外出土土器(第28・29図、PL17・18)

中期後葉の土器(第28図119～128、PL17)

56点(777g)出土し、有文37点(598g)、無文18点(174g)であった(第13表)。そのうち、深鉢8点、鉢1点、器台1点の計10点を図示した。

掲載資料のなかで古いものは、下伊那唐草文Ⅲ段階新相の時期で、加曾利E 3式系の隆帯を持つ鉢(122)、懸垂文にL R縦縄文を施文した深鉢(123、124)と、3条の縦位沈線文に肋骨状の連続円弧文を配した深鉢(126)が存在する。Ⅳ段階古～新相には、古相の結節縄文土器(120、125)、中相と推定する上面に陰刻三角状文を入れた橋状把手(119)、新相の3重弧線文の口縁部(121)がある。120は、類例があまりない横位の結節縄文(結節下側の施文)である。そのほか、時期は明確ではないが、深鉢底部(127)と器台(128)がある。

後期初頭の土器(第28図130・131・第29図155・156、PL17・18)

31点(258g)出土し、有文15点(163g)、無文16点(95g)であった(第13表)。そのうち、深鉢2点、鉢2点の計4点を図示した。

130は渦巻モチーフを持つ深鉢の口縁部であり、131は折返し口縁の深鉢である。細身のヘラ状工具による連続刺突文の155、貼付小突起のある156は、系統は明確でないが後期初頭の鉢と考えられる。

後期前葉の土器(第28図129・132～150・第29図151～154・157～161、PL17・18)

913点(6,218g)出土し、有文205点(1,680g)、無文690点(4,497g)であった(第13表)。そのうち、深鉢8点(うち6点は時期が明確ではなく縄文後期とした)、鉢20点(うち1点は縄文後期)、注口土器1点を図示した。

129は、口縁部の横走沈線文と2条の懸垂沈線文を組合せた深鉢の口縁部である。135は、L R横縄文を充填した楕円区画文と円孔の組合せた文様を持つ。そのほか、条線文(141、142)、L R横縄文(143)、無文(144～146)の深鉢が出土しているが、時期は明確ではない。

前葉の土器は、鉢が器種の主体をなし、堀之内1式がその中心となる。132・133は口縁部に円形刺突文と短沈線文を組合せた文様を持ち、134・136は突起と円形刺突文の組合せである。137～140は、口縁部～胴部にかけて沈線による懸垂・楕円・三角区画文等の文様構成となる。さらに、口縁部に円形刺突文と楕円区画文を組合せたタイプ(147、154)があり、1969年調査のトレンチ出土Ⅰ類土器(佐藤1983、1991)に類似資料がみられ、器形は異なるがSH 01の102とも類似する。147と同様に胴部が直線的な器形になる鉢には、口縁部に沈線文を施文した149があり、これも1969年調査資料に類似個体がある。前述した132も同様の器形となる。また、やや浅めの鉢(160、161)も胴部が直線的であり、161は折返し口縁となる。一方、L R横縄文と沈線文の組合せ(148、153)、無文(150)、竹管等による渦巻付三角形・変形渦巻文の沈線区画文様(151、152)の鉢は、胴部がやや湾曲する。そのほか、159は口縁部外面が「く」の字に屈曲し、2条の横走沈線文(楕円区画の可能性あり)を施文する。

158は注口土器で、L R横縄文に1条の横走沈線文を組合せ、頸部下無文帯に赤彩痕が残る。鉢として

分類した157は、波状口縁で中央がやや凹む橋状把手であるが、全体形がわからなく注口土器の可能性もある。

後期中葉の土器 (第29図162・163, PL18)

21点(160g)出土し、有文5点(48g)、無文15点(107g)であった(第13表)。

162は「く」の字に内湾する無文の深鉢、163は口縁部の貼付隆帯文に極浅い沈線文を施した浅鉢で、両方とも、加曾利B3式に比定される土器と考えられる。

(2) 石器 (第30～38図, PL18～23)

調査で得られた石器(石製品含む。以下、同じ)・石片類は、853点である。このうち器種分類した石器は350点で、出土地点別数量が遺構内226点、遺構外124点となり、遺構内では、堅穴建物跡160点、遺物集中39点、土坑27点が出土した。遺構別にみると堅穴建物跡では、SB01(14点)、SB03(34点)、SB06(21点)、SB09(32点)、SB10(16点)からの出土量が多い。最も出土が少ないSB05からは5点が出土した。土坑では、SK02が13点と最も多く出土した。全体をみると、遺構出土が主体であることから、石器の所属時期は出土遺構の時期に準じた形となろう。

石片類は503点で、出土地点別数量が遺構内357点、遺構外146点である。遺構内では、SB01(41点)、SB03(44点)、SB06(41点)、SB07(48点)、SB09(47点)、SH01(40点)で、40点以上の石片類が出土した。石器の出土数が多いSB01・03・06・09、SH01は、石片類も出土数が多い。石器・石片類の出土状況は、遺構によって偏りがみられる(第14表)。

出土石器の器種組成については、第14・15表のとおりである。微細な剝離がある剝片が88点、横刃形石器は86点で、次いで二次加工がある剝片と石錐が26点、敲石23点、打製石斧および未成品が22点と多い。さらに、石皿14点、削器13点が出土した。なお、器種分類については、飯田市川路大明神原遺跡(長野県埋文センター2010)、鬼釜遺跡(長野県埋文センター2016)に準拠した。石器図版は、器種ごとに特徴的な資料を選定して89点を図化し、器種ごとに提示した。石片類の剝片・碎片は図示しなかったが、遺構ごとにまとめ、図化できなかった石器の一部とともに写真を掲載した。

以下、縄文時代の石器を器種別に概観するが、個別の計測値等の観察結果は「石器観察表」に示し、そのほかの非掲載石器・石片類の観察結果とともに添付DVDに収録した。

①石鏃、石鏃未成品 (第30図164～168, PL18)

石鏃6点、石鏃未成品2点が出土した。これらは、小形剝片の表裏面に押圧剝離を施し尖部を形成した石器および完成途中のものである。非常に小形の凹基無茎鏃は、側縁が直線で正三角形に近い164、やや丸みを帯びる165、二等辺三角形の166が、それぞれSB01・06、SK07から出土した。大形の167は、基部の内湾が浅く平基鏃に近い。SB03から出土しており、小形のものより時代が下る可能性がある。加工剝離が石鏃よりも粗い168は、後期の小形石鏃の未成品とした。石材は黒曜石がほとんどだが、166は湯ヶ峰流紋岩製、167は凝灰岩製である(以下、各器種の石材については、第15表参照)。

②石錐、石錐未成品 (第30図169～171, PL18)

石錐2点、石錐未成品1点が出土した。小形剝片の一端を加工し錐部を形成した石器である。棒状で柄みを作出した169、素材の縁辺の一部に尖部を作出した170がある。170の右側上方には、柄み部の欠損と思われる箇所がある。171は錐部の形成が不十分であり、170に類似する石錐の未成品と考える。SH01(南側)出土の169はチャート製で、あとの2点は黒曜石製である。

③搔器 (第30図172・173, PL18)

3点出土した。小形剝片の長軸に対して直交方向の縁辺部を片面から主に加工し、急角度の刃部を作出した石器である。172は、表面が平坦で裏面の方が断面三角形となる。173は、両側縁にも微細な剝離が

第14表 川原遺跡 縄文石器・石片類 遺構別組成表

分類 遺構名	石 器																石 片 類			合計	比率 (%)								
	石 錐・ 石 錐 未 成 品	石 錐・ 石 錐 未 成 品	石 錐 未 成 品	透 器	罌 器	凹 形 石 器	一 次 加 工 が あ る 鱗 片	塊 形 石 器	微 細 な 割 痕 跡 が あ る 鱗 片	打 製 石 片・ 打 製 石 片 未 成 品	打 製 石 片・ 打 製 石 片 未 成 品	打 入 打 製 石 片 等	塊 入 打 製 石 片 等	磨 製 石 片・ 磨 製 石 片 未 成 品	磨 製 石 片	磁 石	石 錘	石 錘	石 片			石 片	石 片	石 片 類 計					
																									石 錐 計	石 錐 計	石 錐 計		
SB01	1	1								1	5			1					1	1	1	1	14	2	29	10	55	6.4	
SB02							1			1	1			1		2			2			1	10		15	5	30	3.5	
SB03	1						1			11	2	11				1	5		2				34	2	40	2	78	9.1	
SB04							1			1	5	2				1							10		15	2	27	3.2	
SB05					1					1	1	1										1	5		9		14	1.6	
SB06	1				1		1			4	5	5			1		2	1					21	1	31	9	62	7.3	
SB07							1	1		3		1						4	1	1			12		30	18	60	7.0	
SB08									3		2						1						6		10	3	19	2.2	
SB09					1	1	1	3		8	1	9				3	2			2		1	32		41	6	79	9.3	
SB10					1		3		5		3						2	1		1			16		7		23	2.7	
SB計	3	1	0	1	4	1	11	1	36	16	40	0	1	2	5	9	14	1	9	1	4	0	160	5	227	55	447	52.4	
SB01		1			2		5	1	8	1	6					2	9	1		2	1		39		1	35	4	79	9.3
SK01									2		1									1			4		5	1	10	1.2	
SK02					1				4	1	4												13		1	13	4	31	3.6
SK04																						1	1			1		2	0.2
SK07	1																						1				1	0.1	
SK08	1										1												2		2	1	5	0.6	
SK10																							0		1		1	0.1	
SK12												1				1							2		2	1	3	0.4	
SK13																			2	2			4				4	0.5	
SK計	2	0	0	0	1	0	0	0	6	1	7	0	0	0	0	1	3	0	3	2	0	1	27	1	23	6	37	6.7	
遺構内計	5	2	0	1	7	1	16	2	50	18	53	0	1	2	7	19	18	1	14	4	4	1	235	7	285	65	583	68.3	
遺構外	3	1	1	2	6		10	2	38	4	33	1		3		4	8	1			3	4	124	1	121	24	270	31.7	
合計	8	3	1	3	13	1	26	4	88	22	86	1	1	5	7	23	26	2	14	4	7	5	350	8	406	89	863		
比率 (%)	0.9	0.4	0.1	0.4	1.5	0.1	3.0	0.5	10.3	2.6	10.1	0.1	0.1	0.6	0.8	2.7	3.0	0.2	1.6	0.5	0.8	0.6	41.0	0.9	47.6	10.4		100.0	

みられる。両方とも、遺構外の出土である。

④楔形石器 (第30図174・175, PL18)

4点出土した。緑辺部に、両極打法による剥離が存在する石器である。長さ15mm前後の大きさをもち、すべて黒曜石製である。174の先端部はやや斜めとなり、175はほぼ平坦となる。それぞれ、S B 07とS H 01(南側)から出土した。

⑤二次加工がある剥片 (石器観察表・管理台帳では、re.FIと表示)

26点確認した。特定の形状を作出していないため定形の器種に分類できない石器である。二次加工の部位や状態はさまざまである。堅穴建物跡11点、遺物集中5点、遺構外から10点出土した。石材は、砂岩系が10点と最も多く、次いで緑色岩の6点が多い。

⑥微細な剥離がある剥片 (石器観察表・管理台帳では、u.FIと表示) (第30図176・177, PL18)

88点確認した。小形剥片の鋭利な緑辺部に、使用痕と考えられる微細な剥離が連続して残る石器である。176は縦長剥片の長軸に対して平行方向に微細な剥離が残り、177は直交方向に残る。176はS H 01(北側)、177はS B 05から出土した。全体では、遺構外から38点確認しているが、S B 03(11点)、S B 09(8点)と、堅穴建物跡からの出土も多い。石材は、黒曜石33点、砂岩系31点、緑色岩系15点で、全体のほとんどを占める。

⑦削器 (第31図178～181, PL18)

13点出土した。第一次剥離を刃部としてそのまま利用したタイプ(178、180)、剥片の長軸の緑辺部に連続的な平坦剥離により鋭利な刃部を作出したタイプ(179、181)がある。178、180は、緑辺部に微細な剥離がみられる。また、179、180は、刃部と対峙する側に刃潰し状の連続剥離を施す。181の刃部先端には摩耗痕がみられる。178はチャート製であるが、179～181を含め8点が緑色岩系の石材である。

⑧刃器 (第31図182, PL18)

S B 02から、1点出土した。182は下面、右側面を中心に連続剥離し、刃部を作出した石器である。頁岩製で、上部は切断または欠損したと思われる。

⑨打製石斧、打製石斧未成品 (第31図183～187、第32図188～193, PL19)

打製石斧18点、打製石斧未成品4点が出土した。打製石斧は、大形剥片または長方形扁平礫に対し、側縁に平坦剥離または階段状剥離を連続的に加えた石器である。平面形状から、短冊形5点(183～186、188)、撥形4点(187、189～191)に分類する。片面に自然面を残すものが多い。刃部形状は、斜刃(183～185、189)、円刃(187)がある。185の表裏面先端部、186の裏面先端付近には磨耗痕がみられる。

未成品は、大形の緑色岩長方形扁平礫を素材とした192、硬砂岩の片面自然面の剥片を素材とした193がある。192は、磨製石斧未成品の可能性もある。この2点を含めて、遺構出土はS B 04・06からの5点ずつが最も多い。石材は、砂岩系14点、緑色岩系7点、片麻岩1点と、砂岩系が多い。

⑩横刃形石器 (第33図194～204、第34図205～211、第35図212～217, PL20～21)

86点出土した。扁平な剥片の、主に長軸に対し平行方向の緑辺に二次加工を施し、刃部を作り出した石器および刃部に微細な剥離などの使用痕が確認できる石器である。背面全面ないしは一部に必ず自然面を残す。

剥離面の状況を見ると、使い易い形・大きさに整えるため、①基部・側縁に調整剥離を施したもの(194～199、202、204、205、207、208、211、214)、②側縁を大きく剥離(ないしは切断)したもの(200、201、203、206、209、210)¹、③背面の自然面の刃部側に古い剥離面を持つもの(212、216)、④背面上部および

1 201、206、209は、使い易い大きさにするため、故意に切断した可能性もあるが、長軸に対し直交する剥離面があることから欠損として復元線を入れた。

第15表 川原遺跡 縄文石器・石片類 石材別組成表

石 材	分 類	石 器																	石片類		合計	比率 (%)								
		石鏡	石鏃	石鏃未成品	石鏃未成品	鏃部	鏃部	凹形石器	一次加工がある剥片	磨形石器	微細な剥離痕がある剥片	打製石、打製石未成品	横形石器	抉入打製石包丁	刃部	磨製石、磨製石未成品	磨石	砥石	石鏢	砥石			石皿	直石	磨石	石鏢部	石鏢	剥片	砕片	
黒曜石		5	2		2			4	4	33																1	42	15	108	12.7
湯ヶ峰流紋岩		1																								2	1		4	0.5
安山岩																			1										2	0.2
花崗岩												1						4	4									1	21	2.5
黒雲母花崗岩																										1	1		2	0.2
閃緑岩																										1			1	0.1
蛇紋岩															1														1	0.1
砂岩系	砂岩					2		3	24	4	36							7	15		1	1	2		2	109	13		219	25.7
	赤色砂岩							1	1	5								1							2	1	15	1	27	3.2
	硬砂岩				1	1		5	6	10	32	1							1	6		1	2		3	52	12	133	15.6	
	凝灰質砂岩																								1			38	4.6	
	粗粒砂岩							1																		1			2	0.2
	細粒砂岩																	3		2	2		1	1		6		15	1.8	
赤色粗粒砂岩											1																1	1	0.1	
泥岩								1																	11	2		15	1.8	
凝灰質泥岩																									1			1	0.1	
粘板岩																									3			3	0.4	
柱状頁岩																									1			1	0.1	
頁岩						1		3	2	2	2		1	2											11	4		27	3.2	
凝灰岩		2					1	1	3																3	1		10	1.2	
緑色岩系	緑色岩			1	6	6	15	3	6				1	7							1			1	1	101	31	180	21.1	
	緑色片岩				2			1	4	2								2	1						2	18	2	214	25.1	
輝緑凝灰岩																												1	1	0.1
チャート		1			1	1	3																		22	3		32	3.8	
片状フォルンフェルス																			1										1	0.1
片麻岩								1																					1	0.1
黒雲母片麻岩						1																			2	1		4	0.5	
結晶片岩																													0	0.0
雲母																									1			1	0.1	
水晶																									1			1	0.1	
玉髓																									1			1	0.1	
透閃石岩											1			1														2	0.2	
不明																									1			1	0.1	
合 計		8	3	1	3	13	1	26	4	88	22	86	1	1	5	7	23	26	2	14	4	7	5	8	406	89	853	100.0		

その一部にのみ自然面を残し、表表面のほぼ全面に調整痕がみられるもの(213、215、217)がある。①～④の刃部に注目すると、剥離面側では上部方向からの自然な直刃がほとんどだが(196ほか)、なかには剥離をさらに加え、刃部の角度を変更したものの(205、207～209、211)もある。

第一次剥離でできた刃部をほぼそのまま使用したものは、刃部角が20°前後(197、199、201、214ほか)と25°前後(196、198、200、202ほか)の2種に分けられ、刃部角を変更したものは、ほぼ30°前後(207～209ほか)になるものが多い。刃部角の変更で、刃部は鋭角から鈍角へと変更されている¹⁾。石材は、

1 206は、刃部角の変更ではなく、古い剥離面を生かして刃部としている。207は、上部が鈍角(33°)、下部は鋭角(18°)になっており、両方を刃部として使用した可能性が高い。これら横刃形石器の第一次剥離は、小林公明氏の提唱する、扁平な円礫を直接台石に打撃して剥片を取る「扁平円礫打割技法」(小林1978)の可能性が高い。刃部角を変更する剥離も同様の技法が用いられた可能性がある。

砂岩系が74点とほとんどを占め、2番目の緑色岩系が8点である。

①磨製石斧、磨製石斧未成品（第35図218・219、PL21）

磨製石斧3点、磨製石斧未成品2点が出土した。両側縁および基部が研磨調整され、斧状に成形された石器である。218、219は表面と側面の間に稜を作り、断面が隅丸長方形となる定角式磨製石斧である。小形の218は透四石岩製で基部が欠損し、219は蛇紋岩製で刃部が欠損している。このほか、緑色岩の磨製石斧と頁岩の未成品2点がある。

②石核（第35図220、第36図221・222、PL22）

8点出土した。石材は、緑色岩1点、砂岩系6点、黒曜石1点である。両側面が残る緑色岩の220は、上・下面を同一に裏面方向から横長剥片を剥がした石核で、表面の右半分ほどが熱を受けて暗赤灰色に変色している。硬砂岩の221は、表裏両側面から横長剥片を剥がした五角形の石核で、横刃形石器等の素材になろう。いずれも、SB03から出土した。黒曜石の222は、様々な角度から素材を剥離した後の五角形の残核で、石鏃等の小形石器の素材だった可能性がある。

③剥片、碎片（PL24～26）

剥片406点、碎片89点が出土した。次節の小結で、石核をあわせた石片類として詳述する。

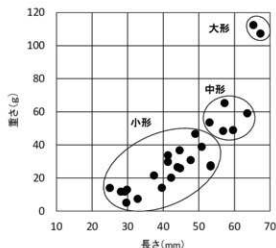
④石錘（第36図223～231、PL22）

26点出土した。楕円礫の両端に敲打による挟入部を作出した打欠石錘（礫石錘）（223～229、231）が23点と大半を占め、擦切りにより挟入部を作出した切目石錘（230）2点、剥片に挟入部を作出した石錘1点も出土した。石材は、21点が砂岩系である。

出土量の多い打欠石錘は、大きさにバリエーションがある。試みに、本遺跡では、長さ3cm～5cm前後・重さ50g以下の小形（227～229、231）、長さ6cm前後・重さ70g以下の中形（225、226）、長さ6cm超・重さ100g以上の大形（223、224）に分けると、小形が19点と最も多い。大形は、重さが100gを超え、ほかの石錘とは一線を画している（第22図）。多くの石錘が漁網錘に使用された可能性が高いが、大形の2点は別の用途を考える必要がある（山本2013）¹。

⑤敲石（第36図232～235、第37図236～241、PL22）

23点出土し、そのうち9点がSH01から出土した。片手で持ち上げることが可能な大きさの礫の先端部や側面に、使用痕と考えられる敲打痕や敲打による剥離痕が残存する石器である。素材の礫により、棒状、尖頭形、扁平な楕円の3種類に分類できる。棒状の敲石（232～235）は、長さ8.3～13.1cmで、上下両端部に敲打痕を持つ。232は上部側面に敲打による剥離痕がみられる。233の下端部の敲打痕は、表裏両面の斜め方向の敲打により稜ができ、先端断面が三角形を呈する。尖頭形の敲石（236～238）は、尖頭部に敲打痕があり、幅10cm前後・厚さ5cm弱で、ちょうど掌に収まる大きさになっている。237は、上部側面に敲打痕および



第22図 川原遺跡 石錘の重さと大きさ

1 「考古資料や文献史料、民具資料では、漁網錘では3g前後から90gまでが多く、110gをこえるものはきわめて少なくなるので、8～110gの打欠石錘は漁網錘になる可能性がある。」（山本2013:50）また、重量80～180gの石錘が、ハバキ、腰カゴ、スノコ等の、もじり編みの錘具（編物石）の一部になる可能性もあることを指摘している。

剝離痕がある。扁平な楕円礫の敲石(239～241)は、周縁部に敲打痕を持つ。239は、上部、両側面に自然面を残し、角となる部分を主に使用している。下部、上部の右肩部は使用頻度が高く、表裏面の斜め方向からの敲打により断面三角形となる。240は、下半を中心に敲打が行われている。241は、上部のみ自然面を残し、全周に敲打痕および剝離痕がある。表裏面は磨石として使用した可能性がある。石材は、砂岩である233、234を含め砂岩系が9点、232、235、237～239を含め緑色岩系が9点、236、240、241を含め花崗岩が4点である。

⑯磨石(第37図242、PL22)

7点出土した。片手で持ち上げることができる大きさの礫の表裏面に、使用痕と考えられる磨耗痕が残存する石器である。242は、表面中央の平坦面に磨耗痕が残る。下面に剝離痕と敲打痕がある。主用途は磨石であったが、7点中4点は、敲石としても併用していた可能性がある。石材は、242を含め花崗岩4点、細粒砂岩3点である。

⑰礫器(第37図243・244、第38図245、PL23)

7点出土した。扁平礫を素材とし、連続的な小剝離により礫の一端に刃部を作出している石器である。243は片面加工で、244、245は両面加工である。特に245は、表裏全体に、剝離調整があり、平面形が円形を呈する。幅7～10cmと大きさに差があるが、どの礫器も掌に収まるサイズである。石材はすべて、砂岩系である。

⑱石皿、台石(第38図246～250、PL23)

破片を含め、石皿14点、台石4点が出土した。表面に磨耗痕が残る大形礫を石皿とした。また、表面の磨耗痕が明瞭ではないが、石材、形状、大きさが石皿に類似する石器を台石とした。246、248は、表面に自然面を残すことなく平坦面を作出し、顕著な磨耗痕が中央に残る。247、249、250、252～255は、自然面を残し平坦面は表面全体には広がらない。なお、石皿の実測図のスクリーントーンは、磨耗痕の顕著な部分のみを表現した。246、253を含め、竪穴建物跡の炉跡およびその周辺等から出土した5点は、被熱して表面がもろくなり剝離し、赤色化している。石材は、247が安山岩、252が緑色岩であるほかは、石皿が花崗岩8点・砂岩系4点、台石が花崗岩3点、砂岩系1点であった。

(3) 石製品(第38図251、PL23)

石製品5点のうち、定形的な形状が想定できる石製品は、石剣柄部の再加工品(251)1点であった。細粒砂岩の棒状石片の表面を縦方向に丁寧に研磨して断面を凸レンズ形に整形している。中央部分はやや細身となる。上部と下面の欠損部は再加工され、やや丸みを帯びた形に面取りしている。石剣とは異なる用途に使用された可能性がある。

3 弥生時代の遺物

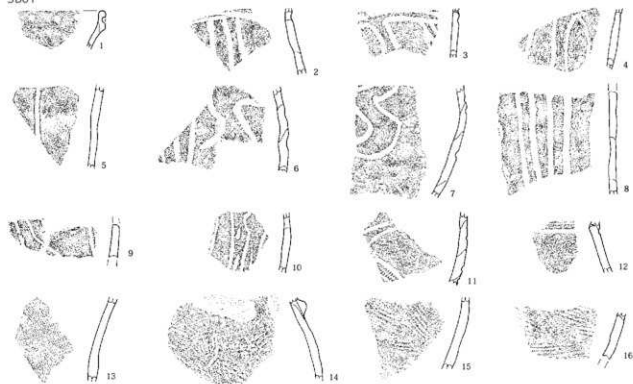
(1) 土器(第38図1、PL23)

検出面、トレンチおよび縄文SBへの混入を合わせると、弥生土器は158点(919g)の出土量である。1は、甕の頸～胴部破片である。櫛描波状文、斜行短沈線文が施文され、中期後半の恒川式新段階の特徴を示している。1969年調査資料にも類似する甕破片がみられる。

(2) 石器(第38図2、PL23)

明確に弥生時代とした石器は、磨製石鏃および磨製石鏃未成品3点である。2は、縄文SB10検出中に出土した磨製石鏃で、先端と側面を面取りして、断面台形となり、基部は裏面から片面穿孔している。1969年調査資料にも磨製石鏃はあるが、穿孔された資料はみられない。未成品の2点は、扁平な石の先端を三角形に整えた剝離調整段階のものである。

SB01

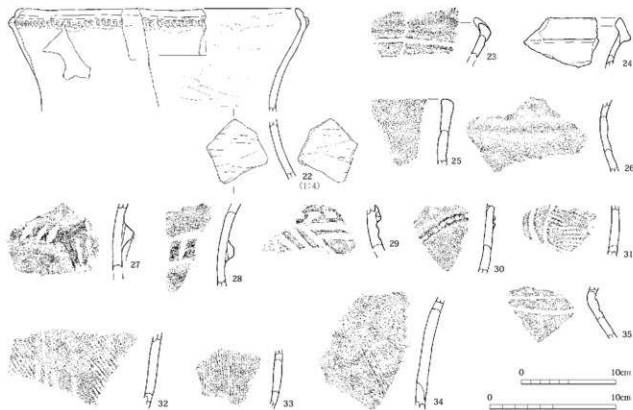


SB02

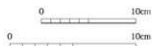


(17:4)

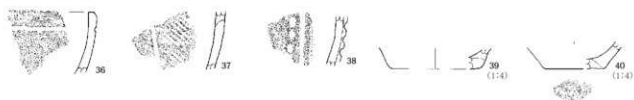
SB03



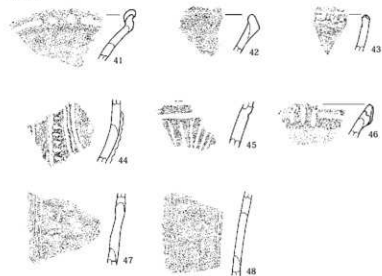
(17:4)



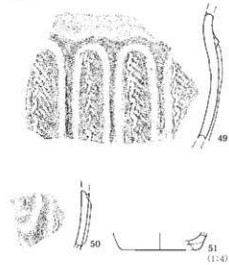
第23図 SB01~03 出土縄文土器



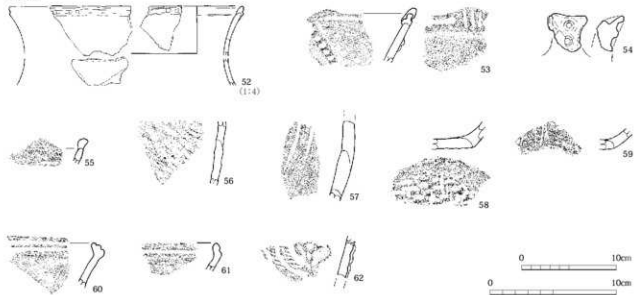
SB04



SB05



SB06

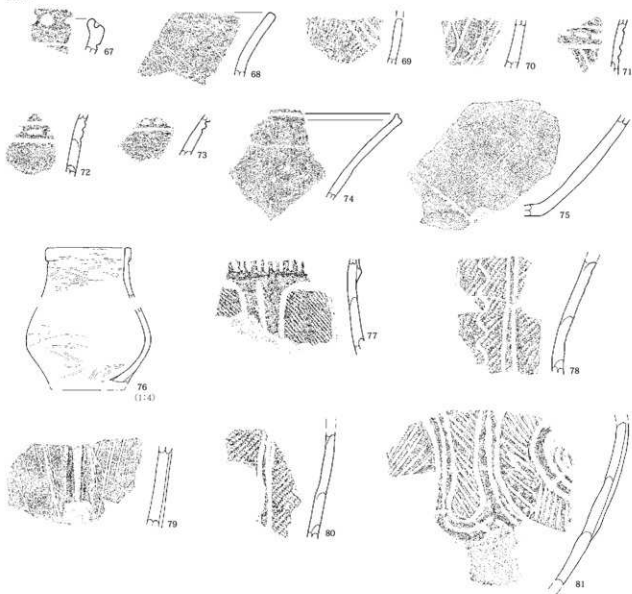


SB07

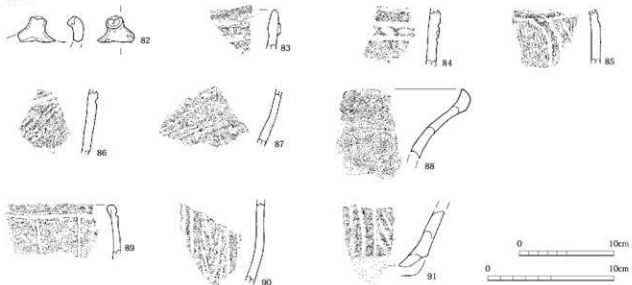


第24図 SB03~07 出土縄文土器

SB09

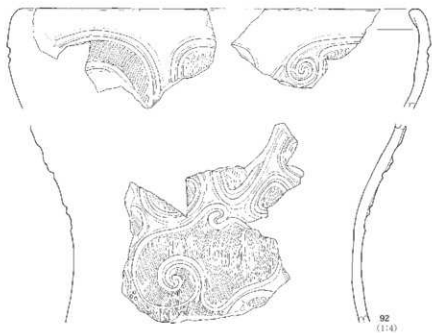


SB10



第25図 SB09、10 出土縄文土器

SH01



92
(1:4)



93
(1:4)



94



95



96



97



98



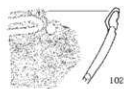
99



100



101



102



103



104



第26圖 SH01 出土繩文土器

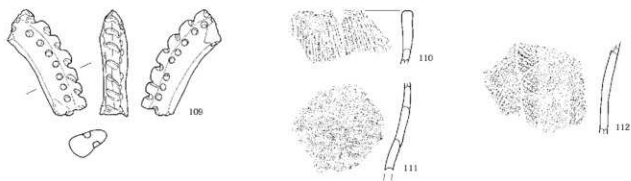
SK01



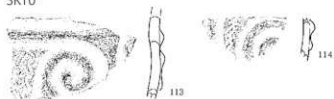
SK02



SK04



SK10

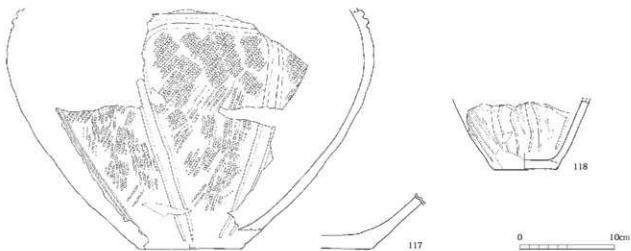


SK11



0 10cm

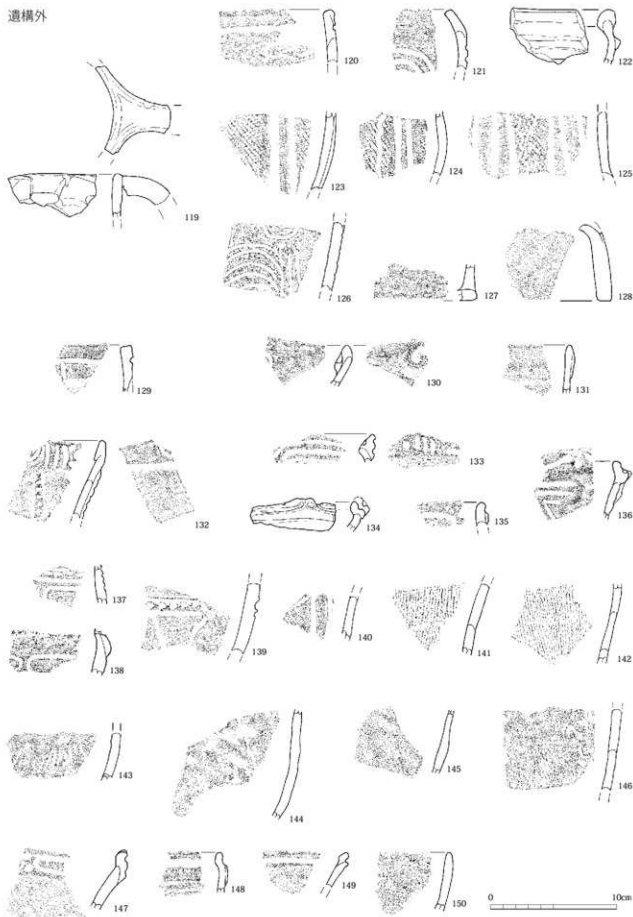
SK13



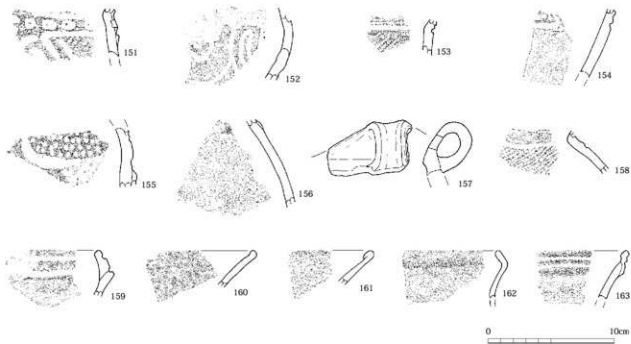
0 10cm

第27図 SK 出土縄文土器

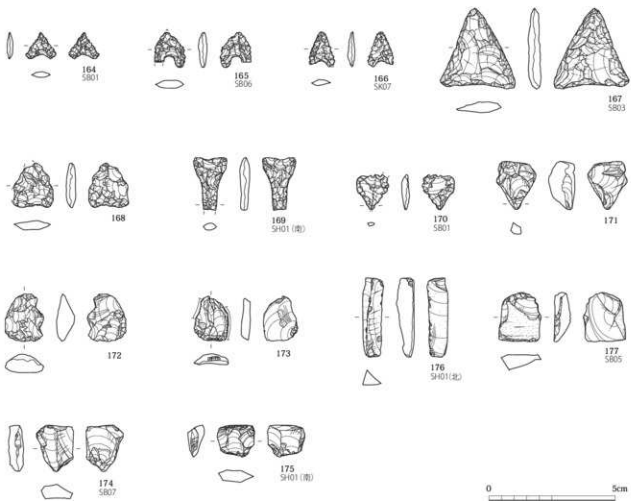
遺構外



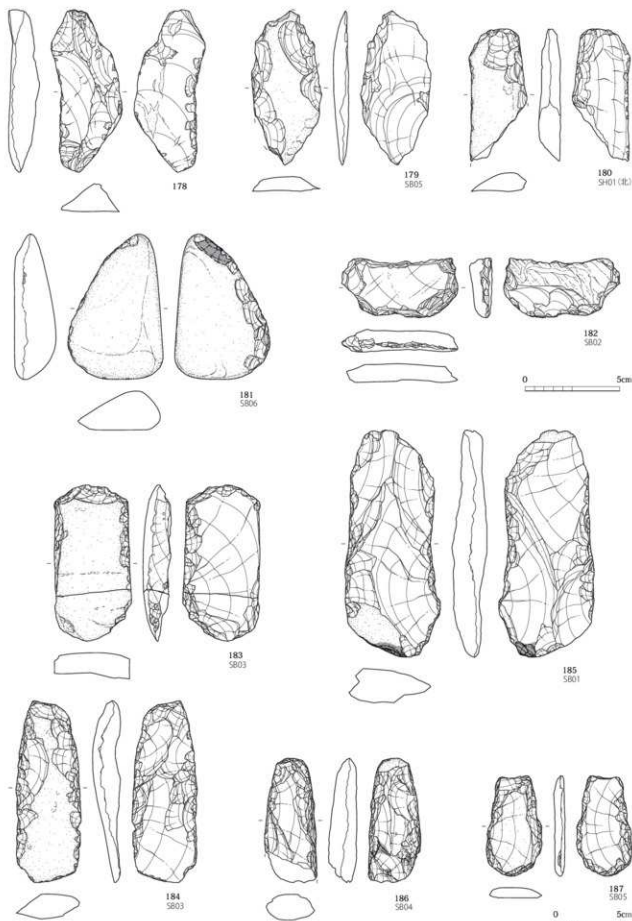
第28圖 遺構外 出土縄文土器 1



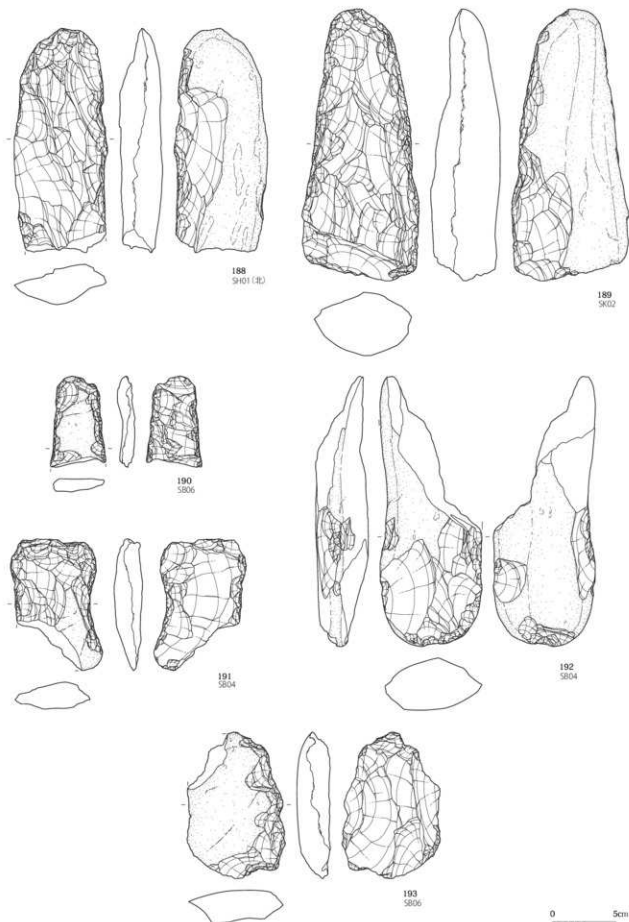
第29図 遺構外 出土縄文土器2



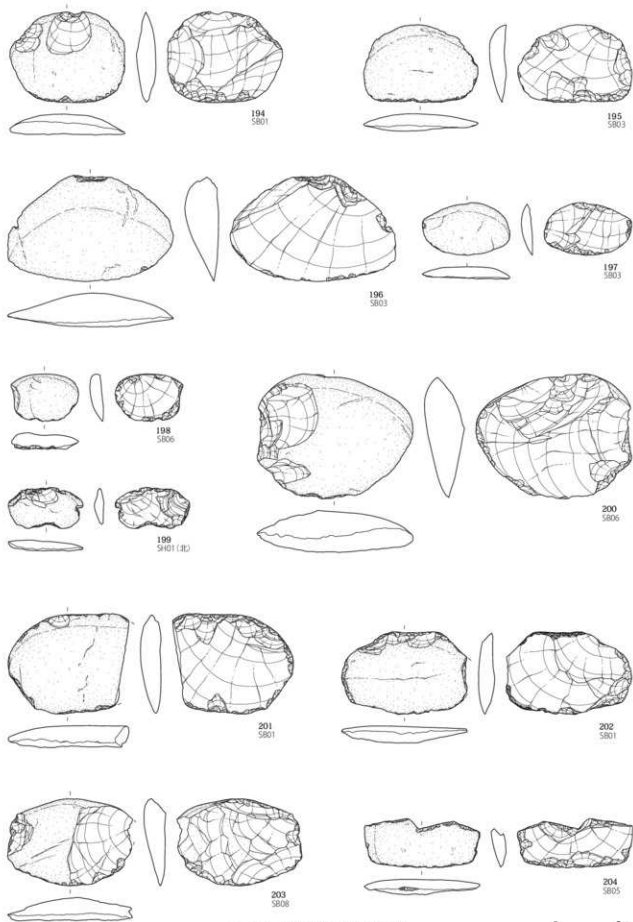
第30図 縄文石器1 (石鏃および未成品、石錐および未成品、搔器、楔形石器、微細な割離がある剥片)



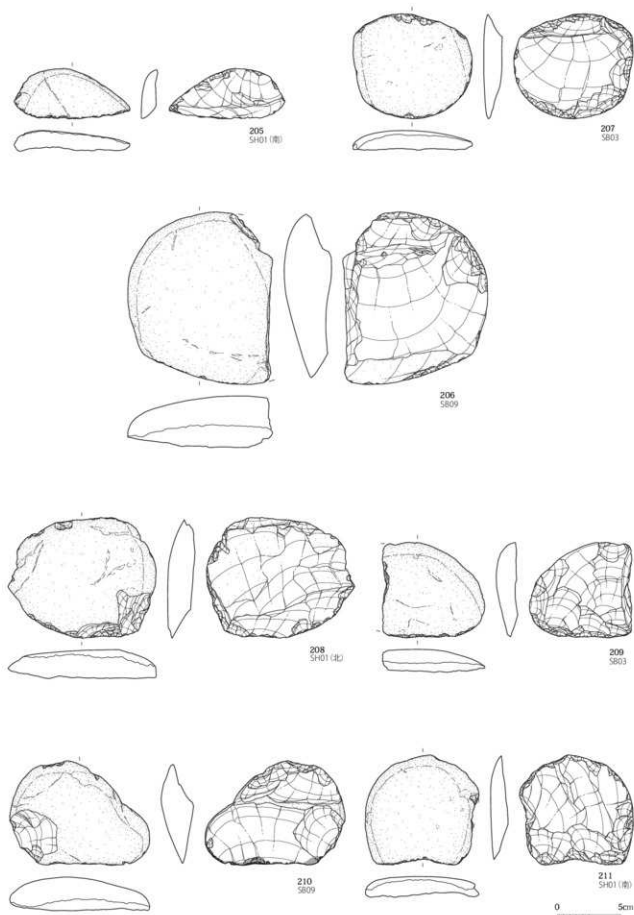
第31図 縄文石器2 (削器、刃器、打製石斧)



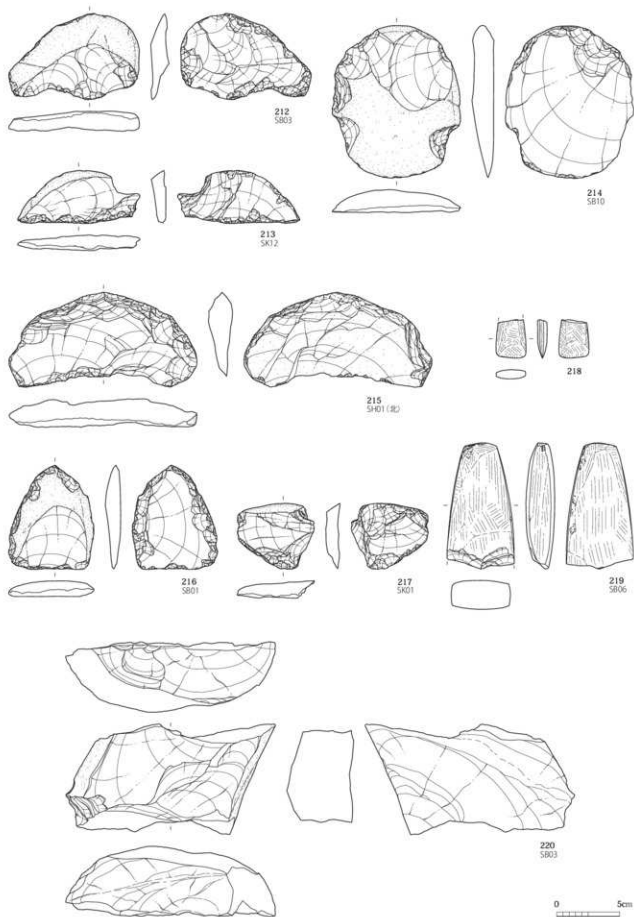
第32図 縄文石器3 (打製石斧および未完成品)



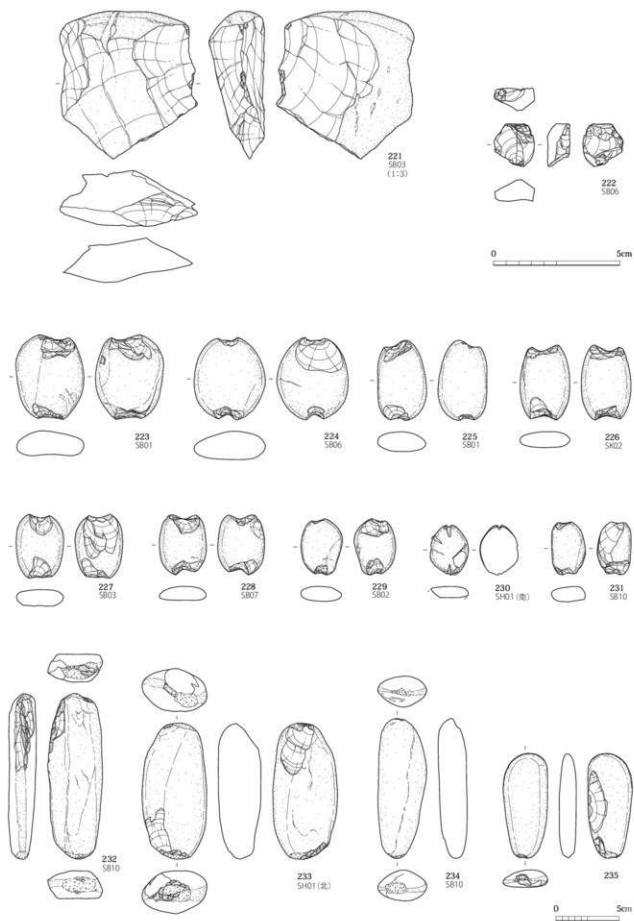
第33図 縄文石器4 (横刃形石器)



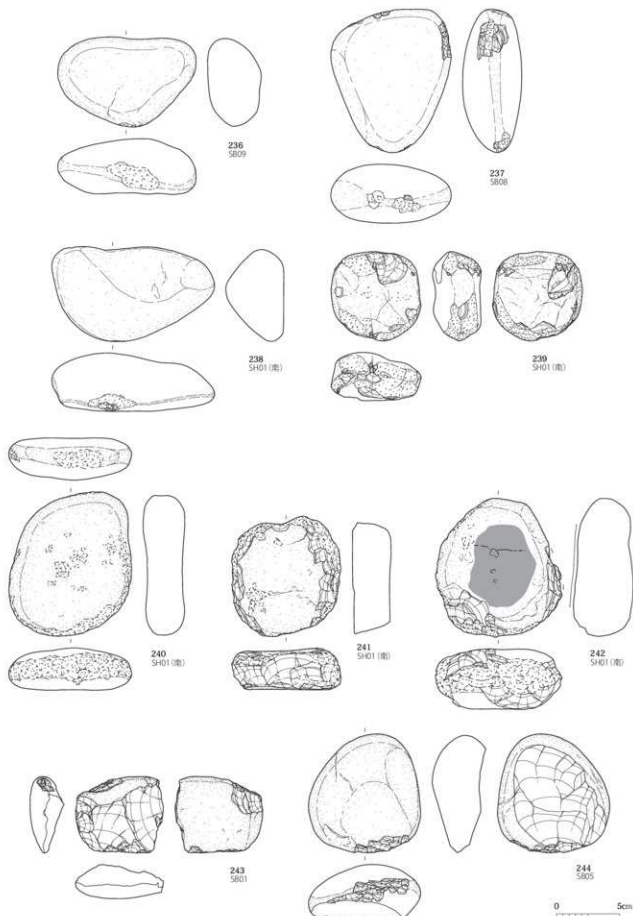
第34図 縄文石器5(横刃形石器)



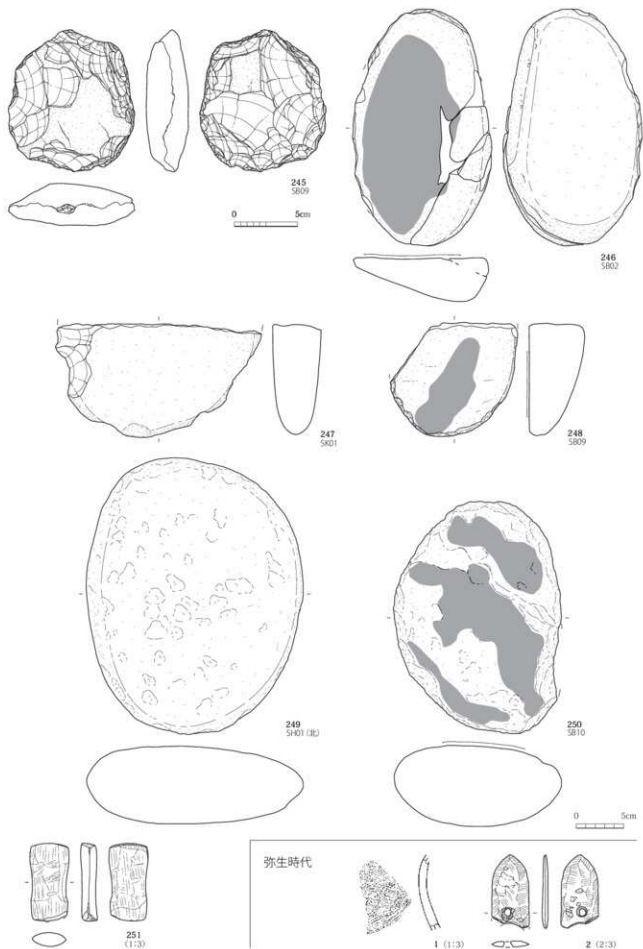
第35圖 縄文石器6 (横刃形石器、磨製石斧、石核)



第36図 縄文石器7 (石核、石錘、敲石)



第37図 縄文石器8 (敲石、磨石、礮器)



第38図 縄文石器9 (礫器、石皿、石製品)、弥生土器・石器(磨製石鏃)

第4節 小 結

ここでは、川原遺跡で得られた石器・石片類の石材について触れ、石片類の計測・計量結果をもとに、本遺跡内における石器製作について若干の私見を述べる。

前節に示した第15表のなかで、石材についてみると、砂岩系と緑色岩系が多く利用されている。さらに、それらの石材でつくられている定形的な石器は、横刃形石器、打製石斧、削器、敲石、石錘が多い。そのなかでも、横刃形石器が86点と最も多い。合わせて、同表で石片類に目を向けると、前出の2石材が多く出土していることがわかる。そこで、試みとして本遺跡で最も多く出土した横刃形石器に注目するとともに、石器製作に関わると考えられる石片類にも焦点をあててみることにする。

まず、横刃形石器が5点以上みつかった遺構を第14表から抽出すると、SB01・03・06・09、SH01となる。同時に、第14表でそれらの遺構の石片類に目を向けると、どの遺構も石片類の点数が40点を越えている。そこで、抽出遺構と石材の関係を捉えるため、第16表としてまとめてみた。すると、砂岩系、緑色岩系が多く、黒曜石およびそのほかの石材は少なかった。砂岩系、緑色岩系が、抽出遺構の石器・石片類の石材の中心となっていることがわかった。

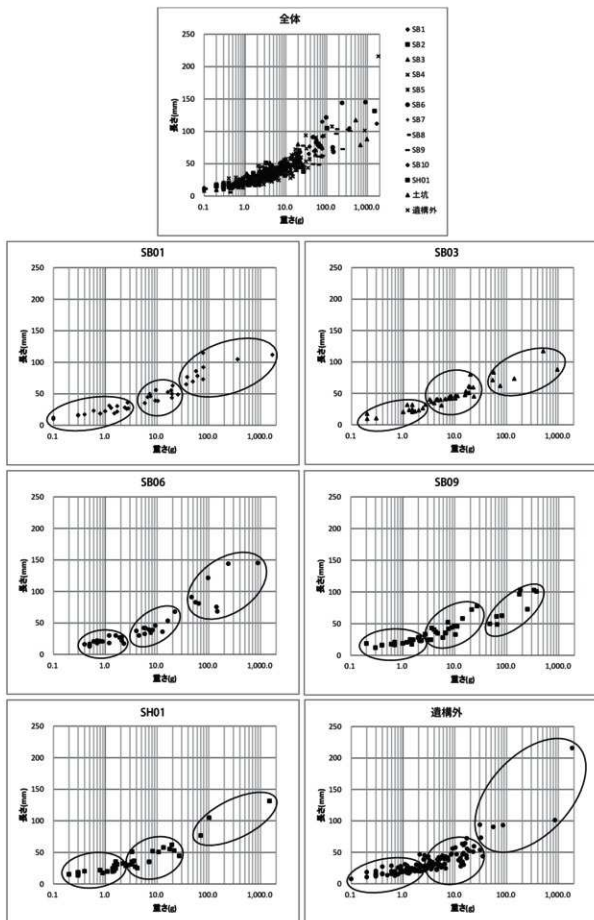
さらに、石片類の内容を把握する目的で、第23図を作成した。合わせて、遺構ごとに写真で示した(PL24～26)。第39図は、石片類の長さ重さをグラフ化したものである。長さの値の範囲に比べて重さの値の範囲が極端に広いので、重さの軸の目盛りのみを変更した¹。全体のグラフは、塊となって実態が捉えにくいのが、上記の遺構ごとに分離すると、石片類は任意の3つの大きさに分けられそうである。

- 1 約3g未満の碎片を中心とした一群。1gを超える重い方は二次加工がある剥片、微細な剝離がある剥片の素材となる可能性を残した大きさであるが、ほとんどが石器製作の残滓の可能性が高いと考えられる。石材は、黒曜石、砂岩系、緑色岩系がほぼ均等に多い。
- 2 約3g以上30g未満の小形剥片の一群。基本的に調整剥片と考えられるが、5cm以上の大形のも

第16表 川原遺跡 縄文石器・石片類 主要遺構別石材組成表

石材 遺構名	黒曜石	花崗岩	砂岩系							泥岩	頁岩	凝灰岩	チャート	緑色岩系		その他	合計	比率(%)
			砂岩	赤色砂岩	硬砂岩	凝灰質砂岩	粗粒砂岩	細粒砂岩	赤色細粒砂岩					緑色岩	緑色片岩			
SB01	3	1	18	2	14					2				12	2	1	55	6.4%
SB03	7	1	35	4	17				1	2	2	1	6	1	1	78	9.1%	
SB06	10	1	8	3	19					2		3	12		2	62	7.3%	
SB09	10	2	17	1	8					3		7	16	8	3	79	9.3%	
SH01	15	7	13	2	13	1	1		1	1	1	3	17	3	1	79	9.3%	
その他	26	8	60	8	25			5	4	6	1	6	63	10	8	230	27.0%	
遺構外	37	1	68	7	37			1	5	9	11	6	12	54	10	12	270	31.7%
合 計	108	21	398											214			853	100.0%
			219	27	133	1	2	15	1	15	27	10	32	180	34	28		

1 グラフの一方の軸が対数目盛になっている片対数グラフを用いた。通常目盛りの軸を範囲の狭いデータに、対数目盛りの軸は極端に範囲の広いデータ用にする事で、極端に範囲の広いデータを扱うことができる。



第39図 川原遺跡 石片類の長重分布

のを中心に、石鏃、削器、二次加工がある剥片、微細な剝離がある剥片等の小形石器素材となる可能性もある。石材は、砂岩系が多く6割を占める。

- 3 30 g以上、最大長5 cm以上の中～大形の剥片および石核の一群。約100 g未満の重さの軽い方の小群は、横刃形石器、打製石斧等の中形石器の素材となる大きさである。また、重い方の小群は、横刃形石器等の石核になり得る大きさである。石材は、砂岩系が6割となる。

また第15表のなかで合算すると、石片類の石材は、砂岩系215点、緑色岩系153点と多く、前述したように、砂岩系、緑色岩系は、横刃形石器、打製石斧、削器の製作に使われたと考えられる。

上記のことから、石片類の点数と横刃形石器、打製石斧等の剥片石器の点数を比較対照すると（第14表）、本遺跡における石器製作に関して以下のことが推定できる。

- ・横刃形石器、打製石斧、削器等の剥片石器の製作は、持ち運び可能な石核または素材剥片の形で遺跡内に持ち込み、刃部調整等の部分的な調整加工を行っていた。ただ、横刃形石器については、砂岩系の大形剥片が残っており、剥片の点数も多かったことから考えると、上記の形以前の素材の製作から行われていた可能性は高い。

なお、26点出土した石鏃について、飯田市周辺の縄文遺跡の事例を概観してみると、飯田市大門原遺跡をはじめとして、20点以上が出土した遺跡が数例あった（下平1999：199）。これらの遺跡はすべて、「天竜川を望む中位段丘面より高所に位置し、遺跡の脇には天竜川の支流となる小河川がみられることが共通する。」（下平：前出）という。本遺跡の石鏃は、今まであまり調査例がない天竜川の本流に面した遺跡からの出土であり、新たな類型となる。今回は、他遺跡との詳細な比較検討にまでは至らなかった。今後の課題としたい。

また、黒曜石、チャートの石片類は少なく、石鏃等の小形剥片石器の製作については、あまり活発でなかったと考えられる。

参考文献

飯田市教育委員会 2011「中村中平遺跡 遺物編」

神村 達 1988 「(4) 弥生中期後半の土器 III・IV期」『長野県史 考古資料編 全1巻(4) 遺構・遺物』長野県史刊行会：213-219

桐生直彦 2015 「『壑穴住居』から『壑穴建物』へ」『季刊考古学』第131号、雄山閣：14-16

小林達雄 1977 「型式・様式・形式」『日本原始美術体系1 縄文土器』講談社

小林公明 1978 「打製石器の製作技法」『曾利 第三、四、五次発掘調査報告書』富士見町教育委員会：222-224

坂井勇雄 2013 「下伊那地域における縄文時代中期土器の様相」『一般社団法人日本考古学協会 2013年度長野大会研究発表資料集 文化の十字路口』日本考古学協会 2013年度長野大会実行委員会編：218-237

坂井弘人 1986 「横刃型石器」『恒川遺跡群—一般国道153号座光寺バイパス用地埋蔵文化財発掘調査報告書—遺物編』飯田市教育委員会：25-27、170-173

島田哲男 1990 「一律」『大町市埋蔵文化財調査報告書』16：72、111

下平博行 1999 「石鏃について」『大門原遺跡』飯田市教育委員会：199-207

鈴木徳雄 2012 「壑之内式土器研究の諸問題—壑之内式の概観と周辺諸型式—」『第25回縄文セミナー 縄文後期土器研究の現状と課題』縄文セミナーの会：71-131

鈴木道之助 1981 「図録石器の基礎知識Ⅲ 縄文」柏書房

田井中洋介 2007 「石鏃による網漁」『縄文時代の考古学5 なりわい 食料生産の技術』同成社：155-162

長野県埋蔵文化財センター 2009 「第2節 森林遺跡」『国道474号(飯倉道路)埋蔵文化財発掘調査報告書 白山遺跡 山本大塚遺跡 寺沢遺跡 松並遺跡 竹佐中原遺跡 森林遺跡 下り松遺跡 太鼓洞遺跡 横山遺跡 久米ヶ城跡 久米大畑遺跡 久米上田遺跡 久米上の平遺跡 久米上の平南遺跡 本洞遺跡』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 86：73、74、81-85

- 長野県埋蔵文化財センター 1999『村東山手遺跡』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 44
- 長野県埋蔵文化財センター 2010『川路大明神原遺跡』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 87
- 長野県埋蔵文化財センター 2016『鬼釜遺跡 風張遺跡 神之峯城跡』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 102
- 橋本勝雄 2009『ものづくりの原点-最古のハイテク 石器製作-』『千葉県現代産業科学館研究報告』第15号：1-10
- 文化庁文化財部記念物課編 2010『第3節 竪穴建物』『発掘調査のてびきー集落遺跡発掘編ー』：131
- 森川幸雄ほか 1995『天白遺跡』三重県埋蔵文化財調査報告 108-2
- 余合昭彦ほか 1993『三斗目・三本松遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第47集
- 増子康真 1994『加曾利B式に平行する東海地方の縄文後期土器』『古代人』55、名古屋考古学会
- 向坂潤二 1968『浜松市史1』浜松市
- 百瀬長秀 2011『東海～北陸以西の緑帯土器群後期』『中村中平遺跡遺物編（第1分冊）』飯田市教育委員会：185-196
- 山内清男 1964『文様帯系統論』『日本原始美術1』講談社：157-158
- 山内清男 1979『日本先史土器の縄紋』
- 山本直人 2013『打欠石錘の用途と漁労活動』『縄文時代の生業と社会』同成社：23-54
- 吉川金利 2003『下伊那縄文中期後葉に於ける土器様相と編年』『長野県考古学会誌』102号 長野県考古学会：16-36
- 吉川金利 2005『下伊那唐草文土器～縄文中期後葉伊那谷南部の地域性～』飯田市上郷考古博物館 平成17年度秋季展示
- 吉川金利 2008『唐草文系土器』『縄文土器総覧』アム・プロモーション：436-443
- 渡辺 誠 1973『縄文時代の漁業』雄山閣

第5章 下川原遺跡の調査

第1節 基本層序

調査対象地は、天竜川を起源とする洪水砂が厚く堆積する地点と東側の丘陵から延びる微高地地点に大別できる。洪水砂が厚く堆積する地点では、砂の堆積が齊一的でなく、調査区内で土層を統一化できなかった。また、場所によっては、砂層が土壌化して灰色がかかる層も観察できたため、近世以前の水田跡などの耕作跡の有無を確認することを目的として、一部で表土下4m強まで掘り下げ、面的調査を実施した(第40図b)。その結果、最下層でビニールや丸釘の混入を確認し、洪水砂の堆積が新しい時期であったとわかった。しかしながら、三六災害等がどの層にあたるのかは明確にできなかった。

また、調査区中央部(2-1区)の東側の丘陵から延びる微高地地点では、面的調査を実施したところ、中世の遺構が検出できた(第40図c)。

基本層序は、以下のとおりとした(第40図)。

I層：暗灰黄色(Hue2.5YR5/2)表土・腐植土。

II層：にぶい橙色(Hue2.5YR6/4)現耕作土。粘性なし。

III層：オリーブ褐色(Hue2.5YR5/3)砂。度重なる洪水砂で構成され、間に灰色がかかる層が入る。bの最下層でビニールが混入。

-1：にぶい黄色(Hue2.5Y6/4)畝跡。砂。粘性なし。しまりやや良い。

IV層：調査区中央部(2-1区)の東側の丘陵から延びる微高地にみられる。細分したIV-3層の上面が中世遺構の検出面である。

-1：黄灰色(Hue2.5Y6/1)水田土壌。粘性強い。しまり悪い。

-2：暗灰黄色(Hue2.5Y5/2)粘性強い。しまりやや良い。

-3：黄褐色(Hue2.5Y5/3)シルト。粘性弱い。しまり悪い。明黄褐色シルトがブロック状に散在し、炭化物粒(2~10mm)微量に混入。

-4：オリーブ褐色(Hue2.5Y4/4)シルト。粘性やや強い。しまり悪い。きめ細かい。

-5：オリーブ褐色(Hue2.5Y4/4)シルト。4層と類似するが、上部に黄褐色土粒を多く含む。

-6：オリーブ褐色(Hue2.5Y4/4)シルト。4層よりやや暗め。粘性やや強い。しまりやや良い。白色粒(1~5mm)多量に混入。

-7：黒褐色(Hue2.5Y3/2)シルト。粘性やや強い。しまりやや良い。白色粒(1~5mm)多量に混入。

-8：暗灰黄色(Hue2.5YR5/2)シルト。粘性やや強い。しまりやや良い。炭化物粒(2~3mm)少量混入。

第2節 遺構

1 遺構の概要 (第41・42図)

遺跡中央、東側の丘陵から延びる微高地地点のみで、遺構が出土した。24基の土坑が検出され、石を伴う土坑10基、柱穴状の小土坑10基、それ以外の土坑が4基である。そのうち石を伴う土坑は、1か所に集中して重なり合うように出土した(第41図)。柱穴状の土坑群は、そこから20mほど東側に位置する(第42図)。陶磁器類が出土した遺構は、いずれも16世紀前半頃と推測するが、遺物が出土していない土坑については時期不明である。

2 石を伴う土坑 (第41・43・44図、PL29～31)

遺跡ほぼ中央2-1区の微高地地点の南西縁辺部にあり、基本層序Ⅳ-3層上面で検出した。すべての土坑埋土に礫が入り、微量な炭化物が含まれる。以下、代表的な土坑の記述にとどめ、それぞれの土坑の詳細については土坑一覧(第17表)を参照されたい。

SH 01 (第43図、PL30)

重複関係：北西側でSH 09、北東側でSH 10を切る。SH 09は土色、混入物、しまり、SH 10とは混入物、しまりの違いによってプランを識別し、掘り分けた。

構造：拳大～小頭大の礫が入る。なかには30cmを超える大礫もある。半数の礫が、表面がもろくなったり、黒色化しており、被熱している可能性が高い。SH 02・09が類似する。

出土遺物：礫に挟まり埋土中位より、内耳鍋(10)が出土している。

時期：中世(16世紀前半期)。

SH 03・04 (第43図、PL31)

重複関係：SH 03は、南東側でSH 04・05・06を切り、北側でSK 21に切られる。土色、混入物、しまりの違いによってプランを識別した。SH 04は、SH 06と同様に最も下位の土坑の1つである。SH 03東側表面、SH 04南東側中層には炭化物が多く堆積し、SH 05の4層は砂質が強いことから重複関係が確認できた。

構造：比較的長軸が長く、炭化物の混入が多い。内部で火が焚かれ、炭化物が残存したと考えられるが、焼土はほとんどない。細礫を中心に拳大までの礫が入るが、SH 05とあわせて、礫が入るほかの土坑に比べると密度が低い。

出土遺物：SH 03から、内耳鍋10点(12、13ほか)、天目茶碗1点、SH 04からは、内耳鍋(11)が出土している。

時期：中世(16世紀前半期)。

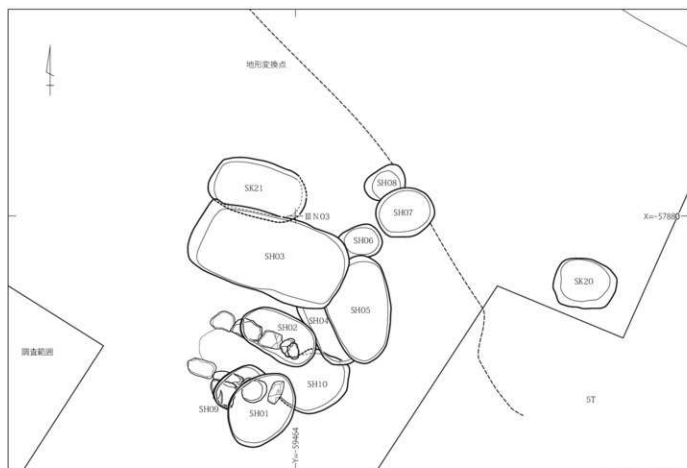
SH 06 (第43図、PL30)

重複関係：南側でSH 05、南西側でSH 03に切られる。土色、混入物、しまりの違いによってプランを識別した。

構造：拳大～小頭大の礫が入り、埋土上位を中心に堆積する。出土した礫の半数以上が、少量だが炭化物が付着しており、被熱している可能性がある。

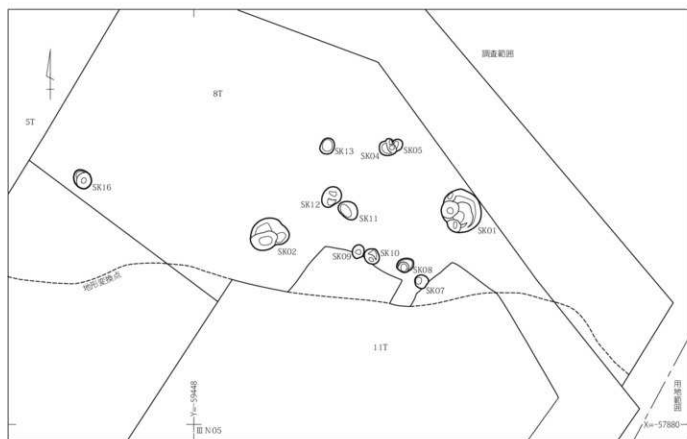
出土遺物：礫に挟まり埋土中位より、古瀬戸のすり鉢(4)と茶入れ(8)が出土している。

時期：中世(16世紀前半期)。



第41図 石を伴う土坑および土坑全体図1 (SH, SK)

※SHは内部の石を取り上げた状況



第42図 土坑全体図2 (SK)

SH 07 (第43図、PL31)

重複関係：北西側でSH 08を切る。土色、混入物、しまりの違いによってプランを識別した。

構造：拳大～小頭大の礫が入り、埋土1層を中心に集中して堆積する。出土した礫の3分の1近くが、表面がもろくなったり、炭化物が付着しており、被熱している可能性がある。SH 08と類似する。

出土遺物：礫の中に、縄文時代のものと思われる礫器(17)が混入している。

時期：中世(16世紀前半期)。

SH 10 (第44図、PL31)

検出：本遺構はSH 01～09検出時にはプランが捉えられず、SH 01・02・04・09調査終了後に並んだ礫を検出し、存在が明らかとなった。

重複関係：SH 01・02・04・09に切られるが、遺構本体は破壊されずに残存した。

構造：東側はやや傾斜を持つスロープ状の空間を不整形に掘り、2本の立石状の礫を境に、西側に長さ30～50cm、幅20～40cmの上面がほぼ平坦な3個の礫を直線的に2列に並べている。西側先端部は開放するが、全体にやや凹み、2か所で火を焚いた痕跡を確認した。底面全体に炭化物が広がり、火元に接する場所の礫は、部分的に炭化物が付着し黒色化したり、表面がもろく剥がれた状態である。炭化物には、細い竹の節様のものが含まれていた。

出土遺物：内耳鍋小片、表面が黒色化し被熱していると思われる温石様の砥石(18)がある。

時期：中世(16世紀前半期)。

3 土坑、小土坑(第41・42・44図、PL29・30)

5基の土坑から、縄文土器、中・近世の陶磁器、および礫石等、少量の遺物が出土している。

SK 01・02の2基は、長軸60cmを超える規模の土坑で、他の柱穴状の土坑よりやや大きい。SK 02は、埋土上位より古瀬戸緑軸小皿が出土し、15世紀後半期の遺構の可能性はある。

SK 04・05・07～13・16の10基は、柱穴状の小土坑であるが、掘立柱建物跡の柱穴としては組み合わず、土坑内から土器の出土もなく、時期は不明である。

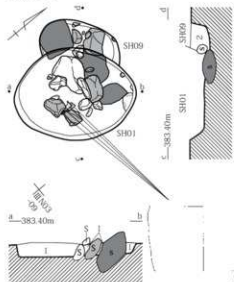
SK 20・21の2基は、石を伴う土坑を検出した場所にある。SK 21は、内耳鍋片が出土しSH 03とも重複していることから、SH群と同様の用途に使用された土坑の可能性が考えられる。また、SK 20では、かわらけが出土した。なお、土坑ごとの記述についての詳細は、土坑一覧(第17表)を参照されたい。

第17表 下川原遺跡 土坑一覧

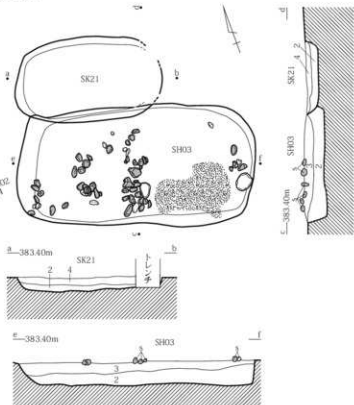
遺構名	位置	形状	断面形状	長軸 cm	短軸 cm	深さ cm	埋土 の 堆積	面積 ㎡	主軸方位	底面 標高 m	時期	重複関係	主な 出土遺物	備考
SH01 第43回	Ⅲ N02	楕円形	クライ状	128	100	13	1層	0.83	N36°E	383.02	中世	SH09・10(古)	内耳鍋	石を伴う 土坑
SH02 第43回	Ⅲ N02-03	長楕円形	クライ状	127	73	22	1層	0.64	N60°W	382.92	中世	SH04・10(古)		石を伴う 土坑
SH03 第43回	Ⅲ E22-23 Ⅲ N02-03	隅丸長方形	クライ状	250	128	25	2層	2.40	N68°W	382.91	中世	SH04-05-06(古) SK21(新)	内耳鍋、 天目茶碗	石を伴う 土坑
SH04 第43回	Ⅲ N03	長楕円形	クライ状	(98)	(40)	18	1層	(0.29)	N24°W	383.05	中世	SH10(古) SH02-03-05(新)	内耳鍋	石を伴う 土坑
SH05 第43回	Ⅲ N03	不整長楕円形	クライ状	171	106	16	2層	(1.10)	N3°W	383.05	中世	SH04・06(古) SH03(新)		石を伴う 土坑
SH06 第43回	Ⅲ N03	円形	クライ状	(59)	53	26	1層	0.19	N80°E	382.94	中世	SH03・05(新)	茶入れ、 すり鉢	石を伴う 土坑
SH07 第43回	Ⅲ I23 Ⅲ N03	円形	クライ状	93	79	24	2層	0.42	N89°W	382.96	中世	SH08(古)		石を伴う 土坑
SH08 第43回	Ⅲ I23	不整楕円形	クライ状	68	(40)	22	1層	(0.13)	N55°E	382.98	中世	SH07(新)		石を伴う 土坑
SH09 第43回	Ⅲ N02	楕円形	クライ状	88	(28)	20	1層	(0.18)	N54°E	382.94	中世	SH10(古) SH01(新)	内耳鍋	石を伴う 土坑
SH10 第44回	Ⅲ N02-03	不整長楕円形	変形の皿状	245	102	33	3層	(1.49)	N69°W	382.83	中世	SH01・02・04・ 09(新)	内耳鍋、 砥石(藍石)	石を伴う 土坑
SK01 第44回	Ⅲ I25	円形	クライ状	68	63	26	3層	-	N18°W	383.55	不明	なし		
SK02 第44回	Ⅲ I25	不整円形	変形のクライ状	63	48	16	1層	-	N82°E	383.63	中世	なし	陶器	
SK04 第44回	Ⅲ I25	不整円形	不整形	28	27	14	2層	-	N72°E	383.68	不明	SK05(新)		小土坑
SK05 第44回	Ⅲ I25	不整円形	すり鉢状	(18)	(16)	10	2層	-	N20°E	383.65	不明	SK04(古)		小土坑
SK07 第44回	Ⅲ I25	円形	円筒状	(21)	21	32	2層	-	N53°W	383.36	不明	なし		小土坑
SK08 第44回	Ⅲ I25	楕円形	不整形	29	22	13	2層	-	N70°E	383.58	不明	なし		小土坑
SK09 第44回	Ⅲ I25	楕円形	円筒状	22	18	30	1層	-	N22°E	383.40	不明	なし		小土坑
SK10 第44回	Ⅲ I25	円形	円筒状	26	23	29	1層	-	N46°W	383.42	不明	なし		小土坑
SK11 第44回	Ⅲ I25	不整楕円形	円筒状	34	28	29	2層	-	N45°W	383.46	不明	なし		小土坑
SK12 第44回	Ⅲ I25	楕円形	お椀状	36	29	12	2層	-	N42°E	383.64	不明	なし		小土坑
SK13 第44回	Ⅲ I25	円形	クライ状	27	23	6	2層	-	N38°E	383.70	不明	なし		小土坑
SK16 第44回	Ⅲ I24	円形	お椀状	32	27	20	2層	-	N35°W	383.62	不明	なし		小土坑
SK20 第44回	Ⅲ N03	楕円形	クライ状	98	80	13	1層	0.42	N77°W	383.15	中世	なし		かわらけ
SK21 第43回	Ⅲ E22-23 Ⅲ N02-03	隅丸長方形	クライ状	154	(90)	14	2層	(0.92)	N71°W	383.05	中世	SH03(古)	内耳鍋	

*計測値の()は残存値、()は推定値。重複関係の(古)は古い遺構、(新)は新しい遺構。S K 03、06、14、15～19欠番。

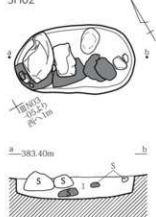
SH01・09



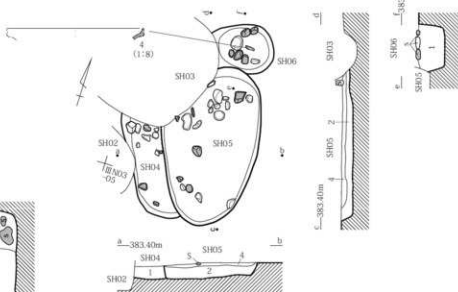
SH03, SK21



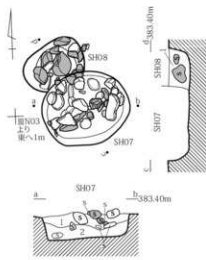
SH02



SH04・05・06

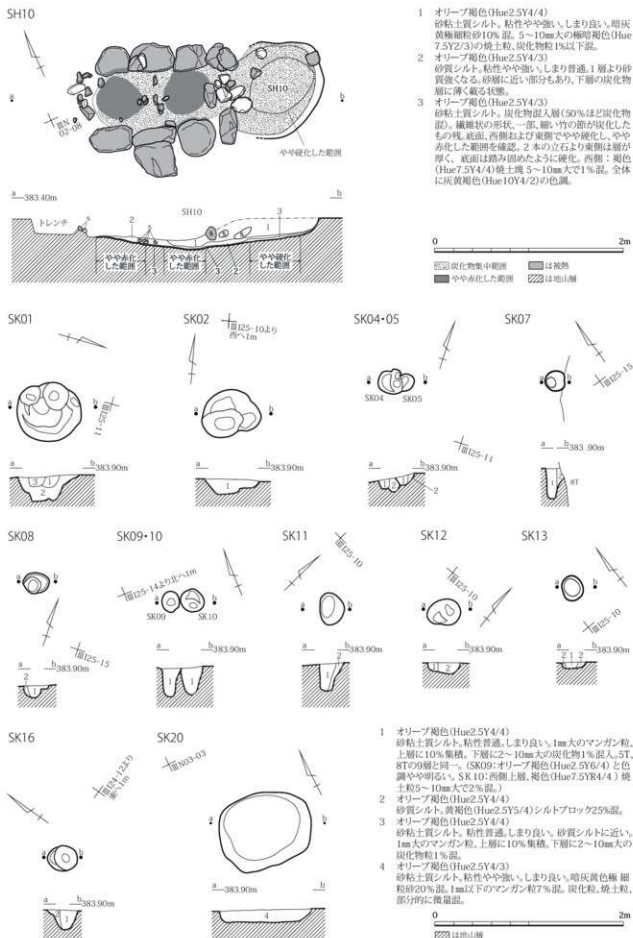


SH07・08



- 1 オリーブ褐色(Hue2.5Y4/4) 砂粘土質シルト。粘性やや強い、しまりやや良い、暗灰黄色極細粒砂20%混。1m以下のマンガン粒7%混。炭化物粒、焼土粒、部分的に微炭混。(SH01:底面近く、炭化物粒増1%)。SH02:高側1/4表面のみ、20~40mm大の炭化材5~10%混。SH04:砂質やや強い、しまり良い、5~10mm大の炭化材5%混。南東側中層に、炭化物集中層。
- 2 オリーブ褐色(Hue2.5Y4/3) 砂粘土質シルト。粘性やや強い、しまり良い、暗灰黄色極細粒砂20%混。1m以下のマンガン粒7%混。炭化物粒、焼土粒、部分的に微炭混。(SH09:20~30mm大の1層ブロック状に混。2~5mm大の炭化物粒2%混。)
- 3 オリーブ褐色(Hue2.5Y4/3) 砂粘土質シルト。粘性やや強い、しまり良い、暗灰黄色極細粒砂ブロック状に30%、5~10mm大の炭化物粒(材)3%混。(SH03:炭化物粒(材)、特に東側表面1~2m厚で30~40%混。)
- 4 オリーブ褐色(Hue2.5Y4/3) 砂粘土質シルト。3層よりやや砂質。湿入物混。炭化物微量となる(1%以下)。(SH05:より砂質強い、炭化物顆粒状に堆積。上層は炭化物混の砂。)

第43図 SH01~09, SK21遺構図



第44図 SH10, SK01~20遺構図 (SK03, 06, 14, 15, 17~19欠番)

第3節 遺物

1 遺物の概要

出土遺物は、中世の土坑出土以外のものは、トレンチおよび2-1区Ⅱ層（第1節第40図）以下の検出面の遺構外遺物である。

土器の総量は233点（2766g）で、時期ごとの出土量は、縄文時代前期後葉50点（445g）、後期初頭1点（18g）、後期前葉6点（61g）、弥生土器1点（3g）、平安時代土器17点（360g）、中世土器103点（1,626g）、近世陶磁器4点（22g）、近・現代陶磁器24点（160g）であった。遺構が検出された中世の遺物が最も多く、出土土器の中心となる（第18表）。

石器は22点（2,916g）、剥片・破片は21点（677g）が出土した（DVD内一覧表参照）。ほとんどが縄文時代であるが、中世の遺物として、石製品2点がある。

時代ごとに項を設け、材質ごとに出土遺物の特徴を説明する。なお、石器1点1点の計測値等の詳細については「石器観察表」に示し、「土器観察表」およびそのほかの報告書非掲載遺物の詳細とともに添付DVDに収録した。

第18表 下川原遺跡 土器破片数・重量集計表

時代・時期 遺構名	縄文時代										弥生時代	平安時代			中世		近世		不明		合計 破片数 重量 (点/g)
	前期後葉		後期初頭		後期前葉							土師器	須恵器	灰輪陶器	土師質土器	陶器	陶磁器	近代現代	無文		
	有文	無文	有文	無文	有文	無文	有文	無文	不明												
	破片数 重量 (点/g)	破片数 重量 (点/g)	破片数 重量 (点/g)	破片数 重量 (点/g)	破片数 重量 (点/g)	破片数 重量 (点/g)	破片数 重量 (点/g)	破片数 重量 (点/g)	破片数 重量 (点/g)	破片数 重量 (点/g)		破片数 重量 (点/g)	破片数 重量 (点/g)	破片数 重量 (点/g)	破片数 重量 (点/g)	破片数 重量 (点/g)	破片数 重量 (点/g)	破片数 重量 (点/g)	破片数 重量 (点/g)		
SH01														9 182.6					9 182.6		
SH02									1 3.4										1 3.4		
SH03	2 19.5							1 3.2			1 1.0			10 113.9	3 8.3				17 145.9		
SH04														1 98.7					1 98.7		
SH06															2 45.7				2 45.7		
SH10														1 3.5	1 13.1				2 16.6		
SK01								1 1.7											1 1.7		
SK02	1 10.1														1 4.8				2 14.9		
SK20			1 17.9											1 23.3					2 41.2		
SK21														3 16.2	2 9.7				5 25.9		
遺構外	27 307.1	20 108.5		4 38.9	2 21.9	1 1.2	18 58.5	5 4.3			4 13.6	7 51.5	5 293.8	5 274.0	36 832.5	4 22.2	24 160.3	1 1.5	191 2,189.8		
破片数合計 重量合計 (点/g)	30 336.7	20 108.5		4 38.9	2 21.9	1 1.2	20 63.4	5 4.3			5 14.6	7 51.5	5 293.8	5 712.2	58 94.1						
		50 445.2	1 17.9		6 60.8			26 68.9	1 3.4					17 399.9	103 1,626.3	4 22.2	24 160.3	1 1.5	233 2,766.4		

2 縄文時代の遺物

(1) 土器 (第45図1~8, PL32)

縄文土器については、文様、器面調整、胎土等をもとに時期区分した。上流の川原遺跡出土の縄文土器とは様相が異なり、後期初頭・前葉の土器は少量で、前期後葉の土器が最も多く、縄文土器の中心となる。形式は深鉢がほとんどを占め、少量の鉢がある。

以下、それぞれの時期の土器について概観する。

①前期後葉の土器 (1~6)

11 Tを中心に、2-1区およびSK 02、SH 03から出土した。50点のうち30点が有文であり、そのうち6点を図示した。

1、5、6は半截竹管による連続沈線文を施す深鉢の一群で、1は諸磯b式新段階、5・6は諸磯c式古段階に比定される。2・3は、LR縄文を施文した深鉢の一群である。2は器厚が薄く、3は条の間隔が広がっている。4は無節横縄文で、焼成が良く黒色化した深鉢である。内面に指頭圧痕を残し、内面の形状が3に類似している。

②後期初頭の土器 (7)

中世の土坑SK 20から1点出土した。厚みのあるヘラ状工具による花卉状刺突文を施文した鉢の口縁へ胴部破片は、三十稲場式中段階に比定される。

③後期前葉の土器 (8)

5・11・15 Tおよび2-1区から6点出土した。8はRL縦縄文を施文した深鉢である。

(2) 石器 (第45図9~17, PL32)

石器23点のうち、微細な剝離がある剥片(DVD内各表中「u.FI」と表示)が7点と最も多く出土し、横刃形石器4点、打製石斧3点と続く。そのほか、石鏃未成品、磨製石斧未成品などとともに、剥片17点、砕片4点出土した。

以下、器種別に概観する。

①石鏃未成品 (9)

2-1区9層から1点出土した。石材はチャートで、左右が非対称であることから、まだ製作段階と考えられる。

②石錘 (10)

11 Tから1点出土した。硬砂岩製で、川原遺跡から出土した石錘と比較すると重量が111.5 gあり、川原遺跡分類の大形に位置づけられる。

③横刃形石器 (11、12)

11 Tおよび2-1区から3点出土した。2-1区9層から出土した11は、周囲を剝離し形を扇形状に整えている。11 Tから出土した12は、1回の剝離で刃先を完成している。いずれも、使用痕跡は明確ではない。

④打製石斧 (13、14)

3点が5・15 T等から出土した。5 Tから出土した撥形の13は硬砂岩製で、使用頻度が高く、刃先と両側面の下方が磨耗している。5 Tから出土した先端が欠損している短冊形の14は砂岩製である。左側面下方が欠損しているため、製作途中の破損品の可能性がある。

⑤磨製石斧未成品 (15)

11 Tから1点出土した。基部が欠損し、磨痕や敲打痕、自然面を残していることから、製作段階と考えられる。

⑥磨石 (16)

11 Tから1点出土した。花崗岩製で、表面中央に小範囲の磨痕が残る。左右側面に敲打痕があり、敲石として使用した可能性も考えられる。

⑦礫器 (17)

中世の土坑SH 07から、礫に混じって1点出土した。左側面が欠損しているが、右側および下部の刃部裏面に使用痕と思われる磨耗痕が観察できる。厚さがない礫のため横刃形石器にも見えるが、裏面3分の1に自然面が残存するところから礫器に分類した。

3 平安時代以降の遺物

(1) 平安時代土器 (第46図1～3, PL33)

17点出土したが、SH 03出土の土師器片以外は、すべて遺構外出土である。以下で記述する灰軸陶器、須恵器以外に、土師器片が5点出土している(第18表)。

①灰軸陶器 (1, 2)

5点出土した。1は、高台が直立する深い碗である。2はやや高台の下部が開くが、1と同じ深い碗の高台部である。いずれも灰軸が漬け掛けで、10世紀中ごろの平安時代中期に位置づけられよう。

②須恵器 (3)

7点が遺構外から出土した。3は、回転糸切り痕が残る坏底部である。そのほかもすべて坏で、10世紀末～11世紀の平安時代後期に位置づけられよう。

(2) 中世土器 (第46図4～14, PL33)

古瀬戸を中心とした陶磁器類と土師質の内耳鍋がほぼ半数ずつを占める。以下、代表的なものを記述する。

①すり鉢 (4)

SH 06上面から出土した、錆跡が紫色に発色した古瀬戸のすり鉢である。縁帯を形成し外側端部が垂下しないところから、15世紀末～16世紀初めに位置づけられる。

②甕 (5, 6)

8・11 Tから出土した岐阜県中津川窯の甕で、接合はしないが5と同一個体と考えられる破片がまとめて10片出土している。胎土が白色で緻密な東濃の土を使用しており、13世紀後半～14世紀の時期に位置づけられる。

③卸皿 (7)

11 Tから出土した古瀬戸の卸皿の底部である。おそらく口縁部に灰軸が漬け掛けされ、内面に垂れた痕がわずかに残る。また内面のヘラ状工具による卸目は明瞭である。14世紀の時期に位置づけられる。

④茶入れ (8)

SH 06埋土から出土した茶入れで、鉄軸の全面施軸である。15世紀末～16世紀初めに位置づけられる。

⑤水注 (9)

11 Tから出土した古瀬戸の水注の把手部で、軸が厚く掛けられ、縦に平行沈線を引く特徴を持つ。14世紀のものと考えられる。

⑥内耳鍋 (10～14)

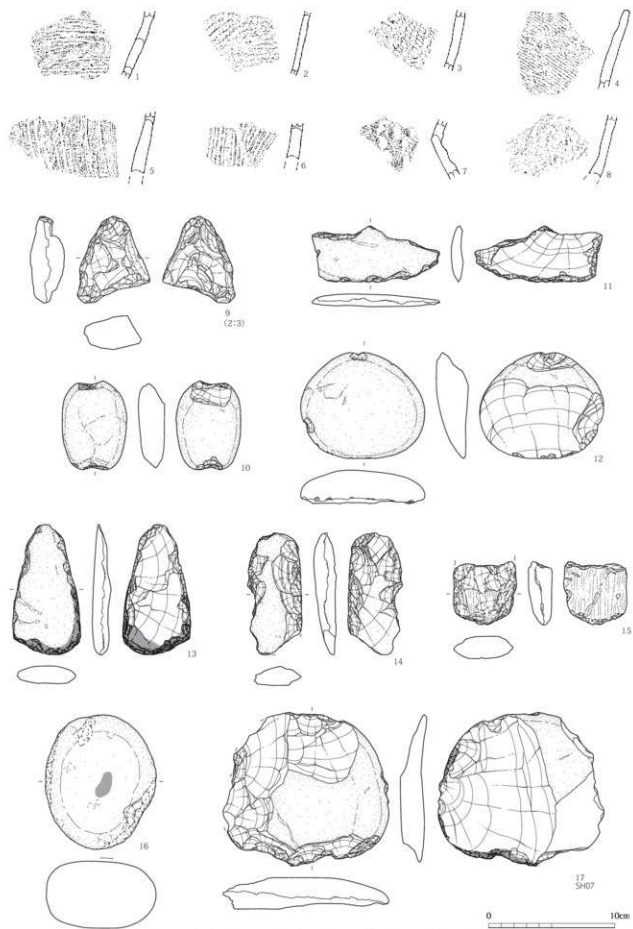
57点(688.9 g)が、SH 01・03・04・10、SK 21および遺構外から出土した。10は器形が復元できた唯一の個体である。11・12と同じく口縁部が直立し、内面に強くヨコナデが残るところから、16世紀前半に位置づけられる。

(3) 近世陶磁器 (第46図15・16、PL33)

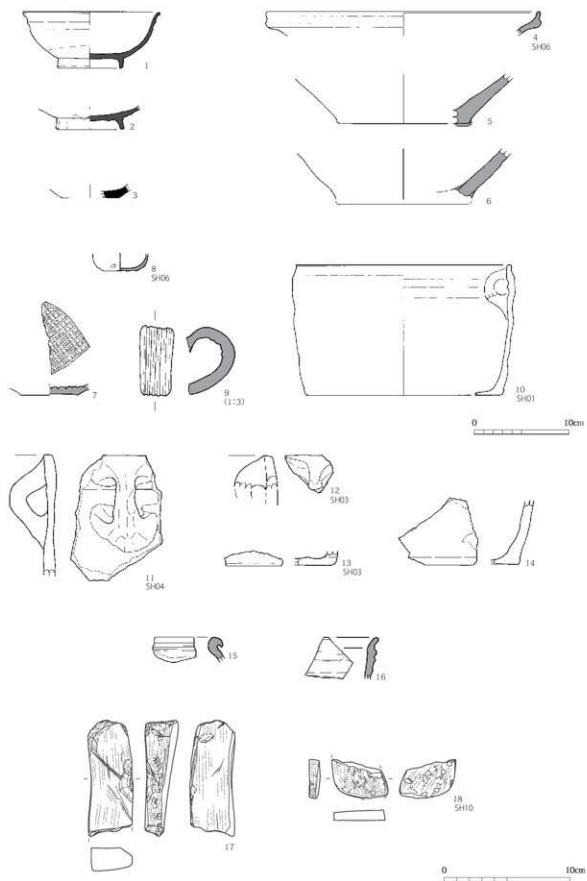
4点出土した。15は2Tの水田土壌から出土した。薄い灰軸をかけ淡灰緑色を呈しており、口縁部が外側に強く湾曲する形態的には江戸後期に位置づけられるが、中期の様相を残すものである。喬木村と飯田市にある富田窯で焼かれた甕である。16は鉢の口縁部破片で、水箆していない粘土を使用し鉄分が多く、尾林窯等の地元窯産の可能性が高い。

(4) 石製品 (第46図17・18、PL33)

砥石2点が出土している。17は断面が長方形の柱状で、表面が極めて平滑な仕上げである。上面、欠損する下面以外は縦方向の使用痕がある。また両側面の一部には、鋭利な刃物の痕跡が規則的に平行に並んでいる。18は、断面長方形の薄型で、欠損する上部以外は極めて平滑な使用痕が残る。17に比べると使用痕の方向は様々である。砥石としては薄く、1つの角は弧状に面取りしてあり、表面には火を受けた影響で斑に円形の剝落痕が残り、黒色化していることから、温石として使用された可能性もある(今野2003)。18は内耳鍋が出土したSH10の底面から出土しており、17と合わせて16世紀前半のものと考えられる。



第45圖 縄文土器・石器(石錘未成品、石錘、横刃形石器、打製石斧、磨製石斧未成品、磨石、礫石)



第46図 平安時代以降の土器・石製品

第4節 小 結

下川原遺跡の今回の調査対象地は、東側の丘陵から延びる微高地地点と、それを取り囲むように天竜川を起源とする洪水砂が厚く堆積する地点の、地形的に2つに大別できる。それぞれの地点について、前節までの内容を踏まえ、若干の補足を加えたい。

遺跡は中央2-1区、東側の丘陵から延びる微高地地点の南西縁辺部では、内部で火を焚いた痕跡がある中世期の石を伴う土坑が、重なり合って出土した。これらに類似すると考えられる既出遺構を、飯田市域で探してみた。

まず、上川路地区の開善寺境内遺跡では、時期が14世紀代およびそれ以前にまで遡る可能性はあるが、集石墓、集石、土坑として報告されている(飯田市教委2002)。また、山本地区の大塚遺跡では、石を伴う土坑が密集して出土し、火葬墓群として報告されている(下伊那教育会1991)。いずれの遺構群も、内部から焼骨、多量の焼土・炭化物が発見されており、墓跡および火葬施設として推定されている。本遺跡とは土坑の形態は類似するが、内部の状況が異なる。さらに、SH10のような石を2列平行に直線的に並べ、内部で火を焚いた土坑の類例はなかった。

今回は事例を提示することにとどめ、今後の類例の増加に委ねたい。

天竜川を起源とする洪水砂が厚く堆積する地点は、地表から深さ約4mまで堆積した砂を取り除き、畝を伴う畑跡を検出した。畑跡を覆う洪水砂からは、縄文時代の石器や中・近世の陶磁器のほかビニール片や丸釘などが出土したことから、畑跡は昭和期の洪水により埋もれたと考える。三六災害直後に撮影された写真(PL12 飯田市立中央図書館所蔵)には、今回の調査結果と一致する地形が見取れる。さらに、洪水砂下層の畝間からは当時飯田市内を中心に販売されていたコッペパンの袋(PL14)が出土した。

これまでの飯田・下伊那地域において、昭和期の天竜川の洪水砂を記録に収めることは少なかった。今回、地表下4mまでの土層断面を記録し、天竜川に関わる災害の痕跡を提示することができた。今後この記録が、天竜川の災害史研究の一助となれば幸いである。

参考文献

飯田市教育委員会 2002 「開善寺境内遺跡」

今野明子 2003 「発掘から見えてきた暖房具の歴史 温石」『埋文にいがた』No.42、新潟県埋蔵文化財調査事業団

佐藤勉信 1979 「(Ⅱ) 富田窯址」『大原遺跡・富田窯址 埋蔵文化財発掘調査報告書』長野県飯田市教育委員会：29-31、33、43-45

佐藤勉信 1983 「松尾南の原遺跡」『長野県史 考古資料編全1巻(3) 主要遺跡(中・南信)』長野県史刊行会：1315-1320

下伊那教育会編 1991 「第四章 封建社会の展開—鎌倉・室町・安土・桃山時代—」『下伊那史第一巻』：1035-1080

小山岳夫 1991 「(2) 砥石」『金井城跡(第二分冊 遺物・考察・写真図版編) 佐久市埋蔵文化財調査報告書第1集』：675-684

賛田 明ほか 2001 「万場遺跡」『中山間総合整備事業地内埋蔵文化財発掘調査報告書』大桑村教育委員会：85-92

第6章 総括

今回の調査により、天竜川の氾濫原に延びた微高地上に、川原遺跡では縄文時代中期後葉～後期中葉の集落跡を、下川原遺跡では中世の土坑群を確認できた。以下、調査成果を紹介し、今後の課題を提示したい。

(1) 川原遺跡について

東側の丘陵から北西方向に延びた微高地の両端は、近世以降の天竜川起源の洪水砂が厚く堆積し、遺構・遺物はなかった。微高地上では、竪穴建物跡10軒、集石1基、土坑10基を確認し、竪穴建物跡は、縄文時代中期後葉4軒、後期初頭1軒、後期前葉4軒、後期中葉1軒と変遷する。重複関係もあり、各期1～2軒程度の竪穴建物が存在していたと考えるが、各期における竪穴建物同士の同時性については未検討である。遺物量を加味すると、後期前葉の時期の活動痕跡が最も顕著である。

竪穴建物跡は、不整形、長楕円形、隅丸長方形と形状は様ざま、大きさも長軸3m未満から4mを超えるものまである。時期別にみると、中期後葉の4軒は長軸3m未満の不整形のもの为主体となり、4m近い大きさの隅丸長方形のものも存在する。後期に入ると不整形でやや大きくなるが、前葉では長軸3m未満と4m以上の長楕円形ないしは隅丸長方形プランの建物が対となって存在していた可能性がある。中葉は前葉の大きなタイプの流れがつかぬ。どの時期の建物跡も、床面は貼床がなくやや固い状態で、炉跡はないか、あっても焼土等が明確に確認されておらず、出土土器も少ない状況であった。その要因について解明するには至らなかった。

出土した縄文土器は、後期前葉の堀之内1式を中心に、その前後の時期の土器群も出土しているが、ほとんどが破片資料であり、型式や時期が不明なものも多い。時期的な特徴は、中期後葉が唐草文系土器を中心に加曾利E系が混入する在地色の強い時期であり、遺跡の中心的な時期である後期前葉に入ると関東的な要素が強くなり堀之内1式が大半を占めるようになる。続く後期中葉は、東海地方の「観塚Ⅲ式」に比定される東海地方的要素（巻貝条痕の模倣）を持つ土器が確認できたことは特出される。この時期には、飯田・下伊那地域の土器に、東海地方の土器の影響が及んでいたことがうかがえる。

調査で得られた石器・石片類は853点である。このうち、器種分類した石器は350点、そのほか石片類が503点となった。石器の出土状況は、竪穴建物跡160点、遺物集中39点、土坑27点の計226点が遺構内で、ほか124点が遺構外である。石片類は、竪穴建物跡SB01・03・06・07・09、遺物集中SH01でそれぞれ40点以上を数えた。利用している石材は、打製石斧、横刃形石器、削器等が砂岩系や緑色岩系を多く用いていた。石片類も同様に砂岩系や緑色岩系が多くみられた。なお、黒曜石は58点と石片類の1割ほどと少ない。このようなことから、砂岩系や緑色岩系を素材とした打製石斧、横刃形石器、削等の石器製作を想定して、検討を進めた。その結果、石片類は3つの大きさに分けられ、石器製作の際に出る残滓および素材となる大きさの石片を抽出した。それらはほとんど、天竜川の川原で見られる石材の加工品である。なお、出土石器のなかに石錘が26点ある。大・中・小形と大きさを作り分けて、漁労等が行われていた可能性を考える。

(2) 下川原遺跡について

地形的な立地条件が川原遺跡と一致する下川原遺跡では、川原遺跡よりも古い縄文時代前期後葉の土器片が見つかり、16世紀前半期の中世の活動痕跡に特徴がみられた。東側の丘陵から延びる微高地の南

および南西縁部に土坑群を確認した。そのうち、火を焚いた痕跡のある石を並べた土坑については、遺構の性格を解明するには至らなかったが、長野県内では類例がないと考えられる遺構として提示することができた。今後の類例の発見に期待し、遺構の性格については今後の課題とする。

微高地を取り囲むように、5 m以上厚く堆積した天竜川の洪水砂は、後世の人びとと天竜川との戦いの歴史が刻まれていた。昭和期だけでも何回もの洪水が襲い、畑や水田が厚い砂に覆われた。しかし人びとは、洪水が治まると、再び同じ場所に畝を作り畑を耕した。トレンチの土層断面は、天竜川に立ち向かった後世の人びとの苦勞と知恵を物語ってくれた。

(3) まとめ

川原遺跡は、1969・1981年に調査が行われた今回の調査範囲の東側では、弥生時代の建物跡が確認された。今回、その西側で縄文時代の集落跡が出土した。遺構は重なりあい、縄文人は断続的にこの地を訪れ、天竜川の氾濫原に延びる微高地上まで居住域として利用していたことがわかった。しかし、前述の堅穴建物跡の状況を考えて、川沿いという立地を活用した、キャンプ地的な集落の建物であった可能性がある。ただ、管見の限りにおいて比較する類例がなく、明確な根拠を示すことができなかった。本集落の性格は、今回確認し切れなかった遺跡の類例、さらには遺跡東側の未調査部分からの情報を得ることによって解明されることを期待する。

出土した縄文土器は少量であったが、後期中葉の時期に東海地方の影響を受けた土器を見出すことができた。今後、今回は行えなかった周辺遺跡の遺構・遺物の型式学的な検討をすることによって、他地域との文化的交流の解明にまでつなげられればと考える。

集落では、天竜川沿いという立地条件のなか、目の前を流れる天竜川で石錘を用いた網漁を行い、さらには石器製作のため、川岸での原石の粗削りあと、手頃な石核または素材剥片を遺跡内に持ち込み、刃部調整等の部分的な調整加工を行っていたと推測している。ただ、石器と石片類の接合関係がみられなかったため、1点1点の石片がどの器種のものかまでは照合することができなかった。今後、天竜川沿いの集落で、石器と石片類の詳細な照合分析によって、石器製作過程の具体的な姿を提示することが課題である。

飯田・下伊那地域では、縄文後期集落跡の調査例が少なく、今回の調査成果が遺跡立地、遺構、遺物ともに新たな事例となった。将来的には、資料の増加により、本遺跡も飯田・下伊那地域の縄文後期集落の一形態として位置づけられることとなろう。

天竜川は、今現在も勢い衰えず太平洋に向けて南流している。水面には舟下りの歓声が上がる。悠久の縄文人の生活にとっても、天竜川はかけがえのない存在だった。そして、後世人びとはその勢いを恐れ、そして苦しめられもしたが、現在もその存在は欠かせない。今回の調査成果が、現在・未来の天竜川と人びとの関わりを考える上での一助となればうれしい。

最後に、発掘調査に御協力いただいた飯田市の皆さま、発掘作業から報告書作成にまでに貴重な御教示をいただいた多くの皆さまに、この場を借りて感謝を申し上げます。

写真図版



調査区遠景（北西より）



2区全景（南東上空より）



2区6 T北東側断面 (北西より)



2区6 T北東端断面 (西より)



2区7 T中央 北東側断面 (北より)



2区7 T中央 北東側断面 (西より)



2区微高地 北側縁辺部 (西より)



2区10 T断面 (南西より)



2区7 T中央 南西側断面 (西より)



2区7 T南西側断面 (西より)



2区7 T南西端断面 (西より)



2区微高地 南側縁辺部 (南より)



SB01 表土からの断面（北西より）



SB01 北東断面（南西より）



SB01 遺物出土状況（北より）



SB01 弁跡（南西より）



SB01（北西より）



SB02 表土からの断面（北西より）



SB02 北東断面（南西より）



SB02 遺物出土状況（北西より）



SB02 (北西より)



SB03 検出状況 (南東より)



SB03 北西断面 (南東より)



SB03 遺物出土状況 (西より)



SB03 P1 断面 (南東より)



SB03 P1 遺物出土状況 (北より)



SB03 が跡 (南東より)



SB03 (北西より)



SB04 検出状況 (南東より)



SB04 断面 (南より)



SB04 (南西より)



SB05 南西隅断面 (南東より)



SB05 (南東より)



SB05 (北より)



SB06 検出状況 (北西より)



SB06 南東断面 (北西より)



SB06 遺物出土状況 (南西より)



SB06 (西より)



SB07・08 検出状況 (西より)



SB07 断面 (西より)



SB07 P2 断面 (北西より)



SB07 (北西より)



SB08 断面 (西より)



SB08 (西より)



SB07・08 (北より)



SB09 北東断面 (南西より)



SB09 P4 断面 (北西より)



SB09 (北西より)



SB10 南東断面 (北西より)



SB10 P3 断面 (南西より)



SB10 P3 (南西より)



SB10 (南西より)



SB09・10 (北東より)



SH01 検出状況 (南より)



SH01 検出状況 (北西より)



SH01 遺物出土状況 (南東より)



SH01 遺物出土状況 (南より)



SH01 遺物出土状況 (南東より)



SK01 検出状況 (南より)



SK01 北西断面 (南東より)



SK01 (南東より)



SK02 断面 (北西より)



SK02 遺物出土状況 (北より)



SK02 出土打裂石斧 (南より)



SK04 断面 (北より)



SK05 検出状況 (北より)



SK05 断面 (南より)



SK05 (南より)



SK07 断面 (南西より)



SK07 (南西より)



SK08 断面 (南より)



SK08 (南より)



SK10 断面 (南東より)



SK10 (北西より)



SK11 断面 (西より)



SK12・13 遺物出土状況 (西より)



SB01 ~ 03 出土縄文土器

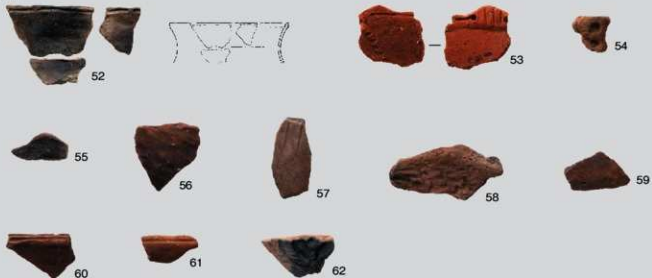
SB04



SB05



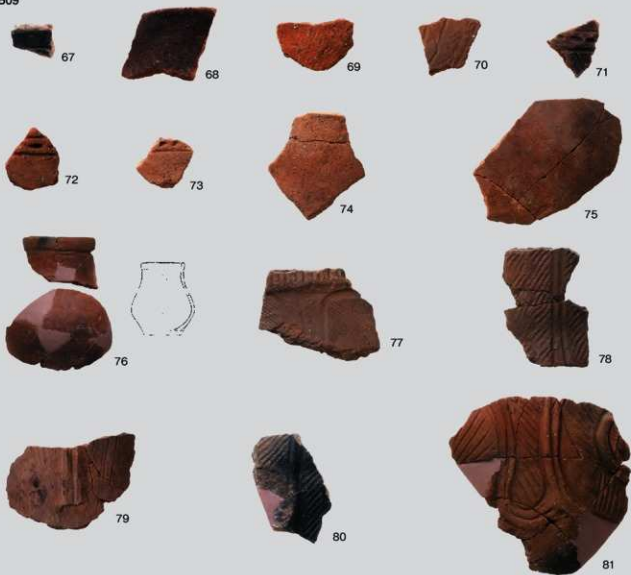
SB06



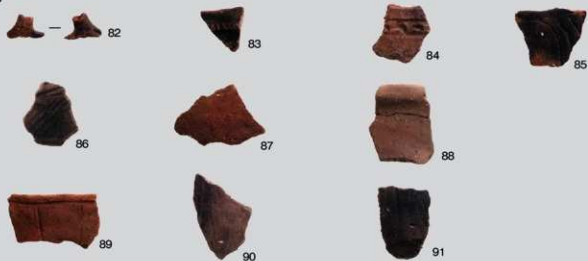
SB07



SB09



SB10



SH01



92



93



94



95



96



97



98



99

(1:4)



100



101



102



103



104

SK01



105



106

SK02



107



108

SK04



109



110



111



112

SK10



113



114

SK11



115



116

SK13



117



118

道構外



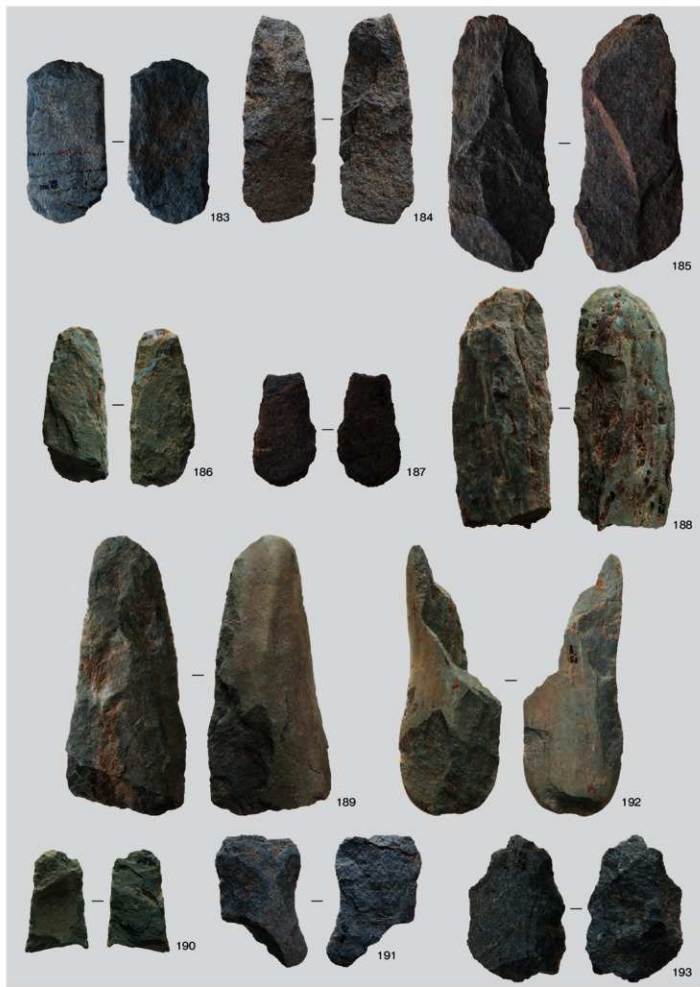
道構外出土縄文土器



遺構外出土縄文土器



縄文石器1 (石鏃および未成品、石錐および未成品、掻器、楔形石器、微細な剥離がある剥片、削器、刃器)



縄文石器 2 (打製石斧および未成品)



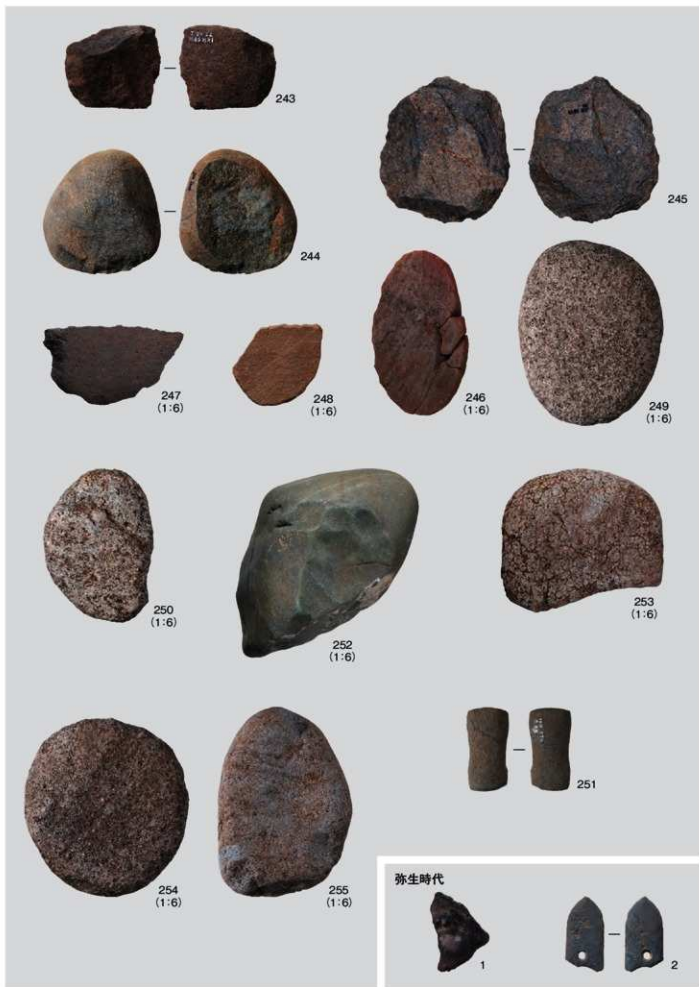
縄文石器 3 (横刃形石器)



縄文石器 4 (横刃形石器、磨製石斧)



縄文石器 5 (石槌、石錘、敲石、磨石)



縄文石器 6 (礮器、石皿、石剣再加工品)、弥生土器・石器 (磨製石鏃)



SB01 出土石片類 (1:3)



SB03 出土石片類 (1:3)



SB06 出土石片類 (1:3)



SB07 出土石片類 (1:3)



SB09 出土石片類 (1:3)



SK 出土石片類 (1:3)



SH01 出土石片類 (1 : 3)



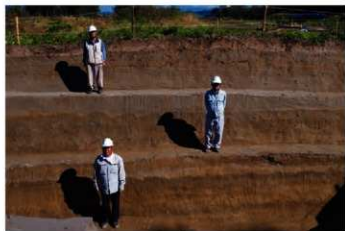
SH01 出土敲石類 (1 : 3)



遺跡遠景（南西より）



三六災害直後の遠景（南西より）



2 T断面 (南西より)



2 T断面 (南西より)



7 T断面 (北西より)



4 T断面 (北西より)



5 T断面 (北より)



6 T断面 (西より)



1 T断面 (西より)



3・13 T断面 (南より)



3 T断面 (南より)



15 T断面 (南より)



13 T東側 洪水砂下の細線跡 (東より)



2-2区 洪水砂下の細線跡 (北東より)



洪水砂出土の昭和期のバン袋



2区 全景 (南東より)



石を伴う土坑群検出状況 (北東より)



小土坑群 (東より)



8T 灰軸陶器出土状況 (北より)



SK01 断面 (北東より)



SK02 古瀬戸出土状況 (南東より)



SK11 (南東より)



SH01 検出状況 (断面) (南東より)



SH01 内耳鍋出土状況 (北東より)



SH02 ~ 07 検出状況 (南より)



石を伴う土坑群全景 (北東より)



SH02 (南西より)



SH03 南東側炭化物出土状況 (北東より)



SH07 (南より)



SH10 検出状況 (北西より)



SH10 断面 (南西より)



SH10 炭化物出土状況 (南西より)



SH10 東側開口アップ (北東より)



SH10 完掘 (北東より)





平安時代以降の土器・石製品

報告書抄録

ふりがな	かわらいせき しもがわらいせき							
書名	川原遺跡 下川原遺跡							
副書名	天竜川下久堅地区築堤護岸工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ名	長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書							
シリーズ番号	119							
著作者名	黒岩 隆 岡村秀雄 平林 彰							
編集機関	(一財)長野県文化振興事業団 長野県埋蔵文化財センター							
所在地	〒388-8007 長野県長野市篠ノ井布施高田963-4 Tel.026-293-5926							
発行年月日	2019年3月20日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コ 市町村	ド 遺跡番号	北 緯	東 経	発掘期間	発掘面積 ㎡	発掘原因
かわらいせき 川原遺跡	長野県飯田市 下久堅知久平 1993-1 ほか	20205	447	35° 28' 46" (世界測地系)	137° 50' 49" (世界測地系)	2016.8.24 ~ 2016.12.22	1,705	天竜川下久 堅地区築堤 護岸工事
しもがわらいせき 下川原遺跡	長野県飯田市 下久堅知久平 2025-5 ほか	20205	448	35° 28' 36" (世界測地系)	137° 50' 41" (世界測地系)	2016.8.24 ~ 2016.12.22 2017.8.1 ~ 2017.12.8	8,193	天竜川下久 堅地区築堤 護岸工事
所収遺跡名	種 別	主な時代	主 な 遺 構	主 な 遺 物		特 記 事 項		
川原遺跡	集 落 跡	縄文 弥生	堅穴建物跡10軒 遺物集中1基 土坑10基	縄文中・後期土器、石鏃、 石鏃、搔器、削器、楔形 石器、打製石斧、横刃形 石器、磨製石斧、石鏃、 敲石、磨石、石皿、石剣 再加工品、石核、剥片、 砕片、磨製石鏃				
下川原遺跡	集 落 跡	縄文 古代 中世	石を伴う土坑10基 土坑・小土坑14基	縄文前・後期土器、灰輪 陶器、須恵器、中・近世 陶磁器、内耳鍋、石鏃未 成品、打製石斧、横刃形 石器、石鏃、砥石(温石)				
要 約	<p>両遺跡とも、天竜川左岸の氾濫原に東側の丘陵から延びる微高地上に立地する。川原遺跡は、縄文時代中期後葉～後期中葉の集落跡である。縄文土器は、後期前葉の堀之内1式を中心に出土したが、出土量は少なかった。各時期の土器の様相をみると、中期後葉は唐草文式で在来色が強く、後期初頭・前葉には称名寺式・堀之内1式と同東系の土器となる。後期中葉は加曾利B3式並行期に東海地方の「観塚Ⅲ式土器」が出土し、東海地方の土器の影響が及んでいた。石器は土器と比較すると出土量が多く、特に砂岩系・緑色岩系の横刃形石器、打製石斧等の出土が目立ち、合わせて、同石材の石片類も多くみられた。そこでこれらの石器の製作を想定して検討した結果、直面する天竜川の川岸での原石の粗割のあと、手頃な素材を集落内に持ち込み、部分的な調整加工を行っていたと推定した。天竜川関連では、石鏃が26点出土し、漁労活動の根拠となる。一方、堅穴建物跡は、仮が貧弱もしくはない事例があることや、出土土器も少ないという特徴がある。その要因はわからないが、一つには、川沿いという立地を活用した、キャンプ地的な集落の建物であった可能性を考える。</p> <p>下川原遺跡は、16世紀前半期の中世の土坑群が特出される。北西方向に延びる微高地の南および南西側の縁辺部に土坑群を確認した。そのうち、火を焚いた痕跡のある石を並べた土坑については、遺構の性格を解明するには至らなかったが、長野県内では類例がないと考えられる遺構である。一方、天竜川寄りの低地部では、洪水により厚く砂が堆積し、地表から深さ約4mで、畝を伴う烟跡を検出した。烟跡は昭和期の洪水により埋もれたと考えられるが、三六災害等の天竜川の災害史上、貴重な記録を提示することができた。</p>							

平成 31 (2019) 年 3 月 20 日 発 行

長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 119

川原遺跡 下川原遺跡

天竜川下久堅地区築堤護岸工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

一飯田市一

発行者 国土交通省中部地方整備局天竜川上流河川事務所
(一財) 長野県文化振興事業団
長野県埋蔵文化財センター

〒 388-8007 長野県長野市篠ノ井布施高田 963-4

Tel 026-293-5926 fax 026-293-8157

e-mail info@naganomaibun.or.jp

印刷者 西沢印刷株式会社

〒 380-0904 長野県長野市鶴賀七瀬中町 1048

Tel 026-226-6071 fax 026-226-6049